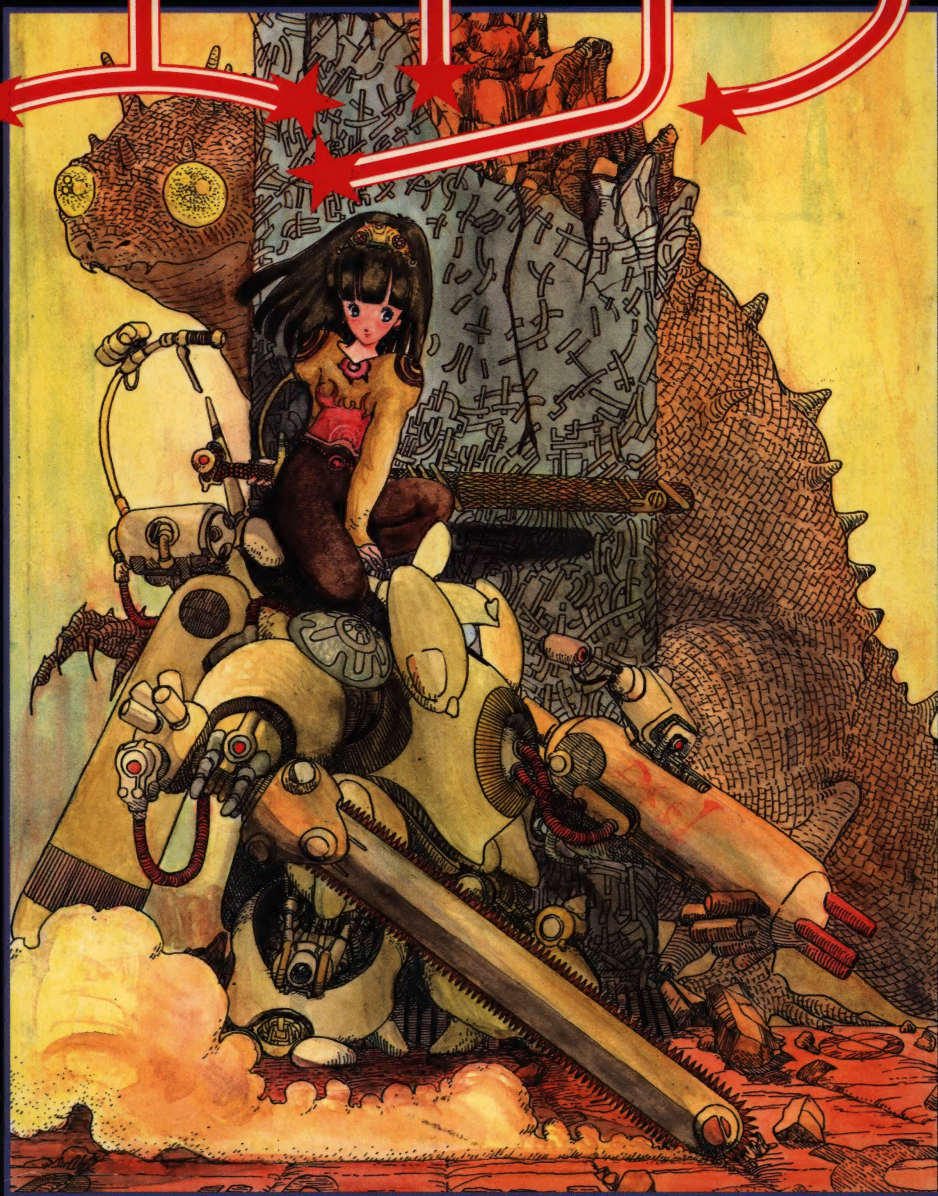
模型情報・別冊　夢幻境戦士エリア　昭和60年６月８日
発行　昭和59年10月26日第３種郵便物認可

夢幻境戦士 エリア

原　作　菊地秀行

イラスト　加藤洋之 ＆ 後藤啓介

CONTENTS

菊 地 秀 行

3D世界の未来へ捧げる書

「夢幻境戦士エリア」は、私のはじめての連載小説であり、同時に、はじめての共同作品である。

すでに主要な登場人物のキャラクター・デザインが決定されているという前提条件のもとでの仕事は、少々きついが、それだけにやり甲斐もあった。今回一冊の本にまとまるとき、大変うれしく思う。

篇中に付されたイラストや３Ｄフォトは、若いクリエーターたちの創造になるものだが、上手なそれらばかりでなく、小説の方にも注目していただきたい。デザインとキャラクターとが、見事に一致しているはずである。

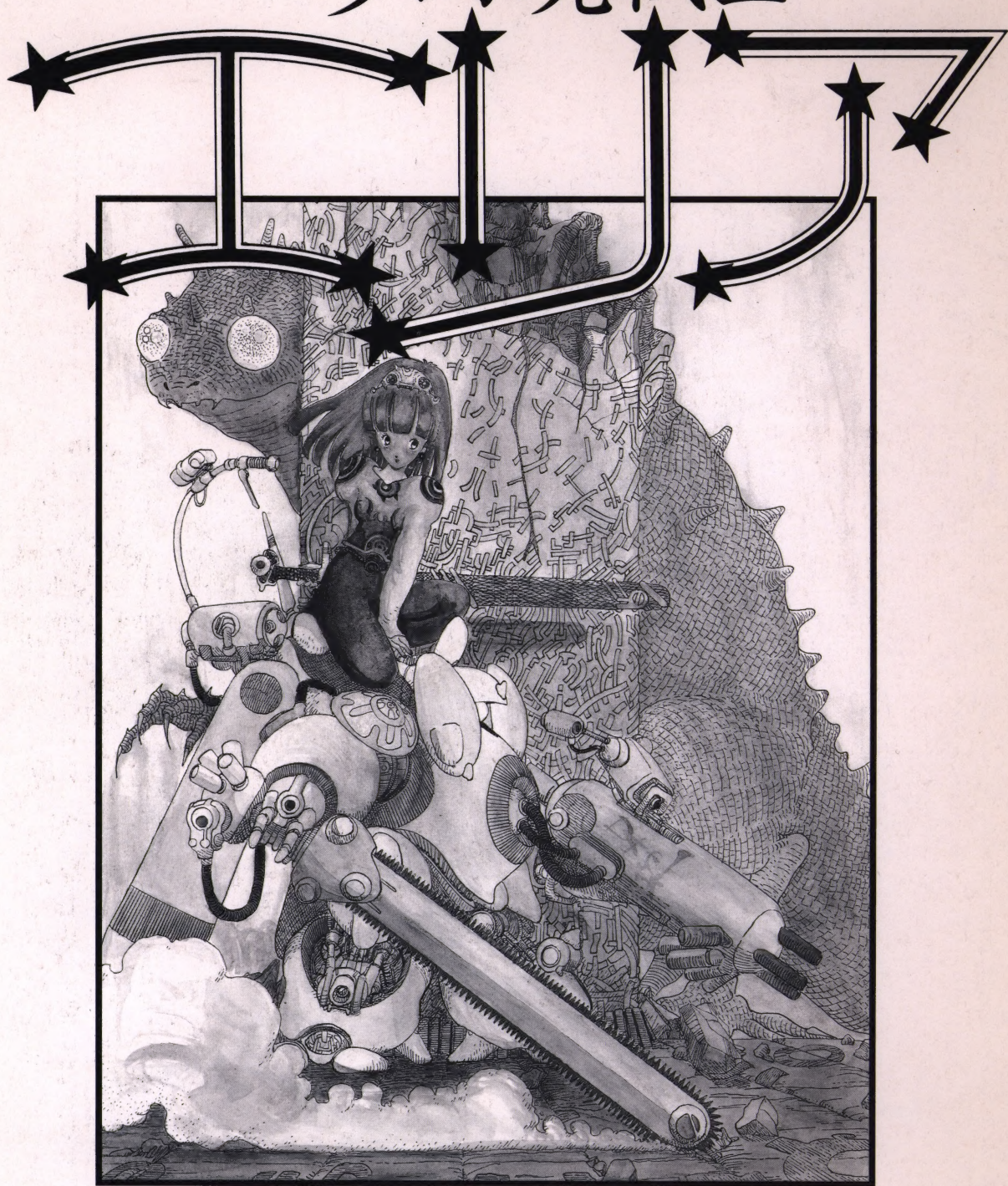
けれども、それは何より、若い人たちの作品集という趣きが濃い。これからの３Ｄ世界を担っていく人々の情熱がこもっているからだ。「夢幻境戦士エリア」が、そうした未来への展望の一助となれば、小説家としてこれに増す喜びはない。

原　作　菊地秀行

イラスト　加藤洋之 ＆ 後藤啓介

ILLUSTRATION by HIROYUKI KATO & KEISUKE GOTO

ILLUSTRATION by HIROYUKI KATO & KEISUKE GOTO

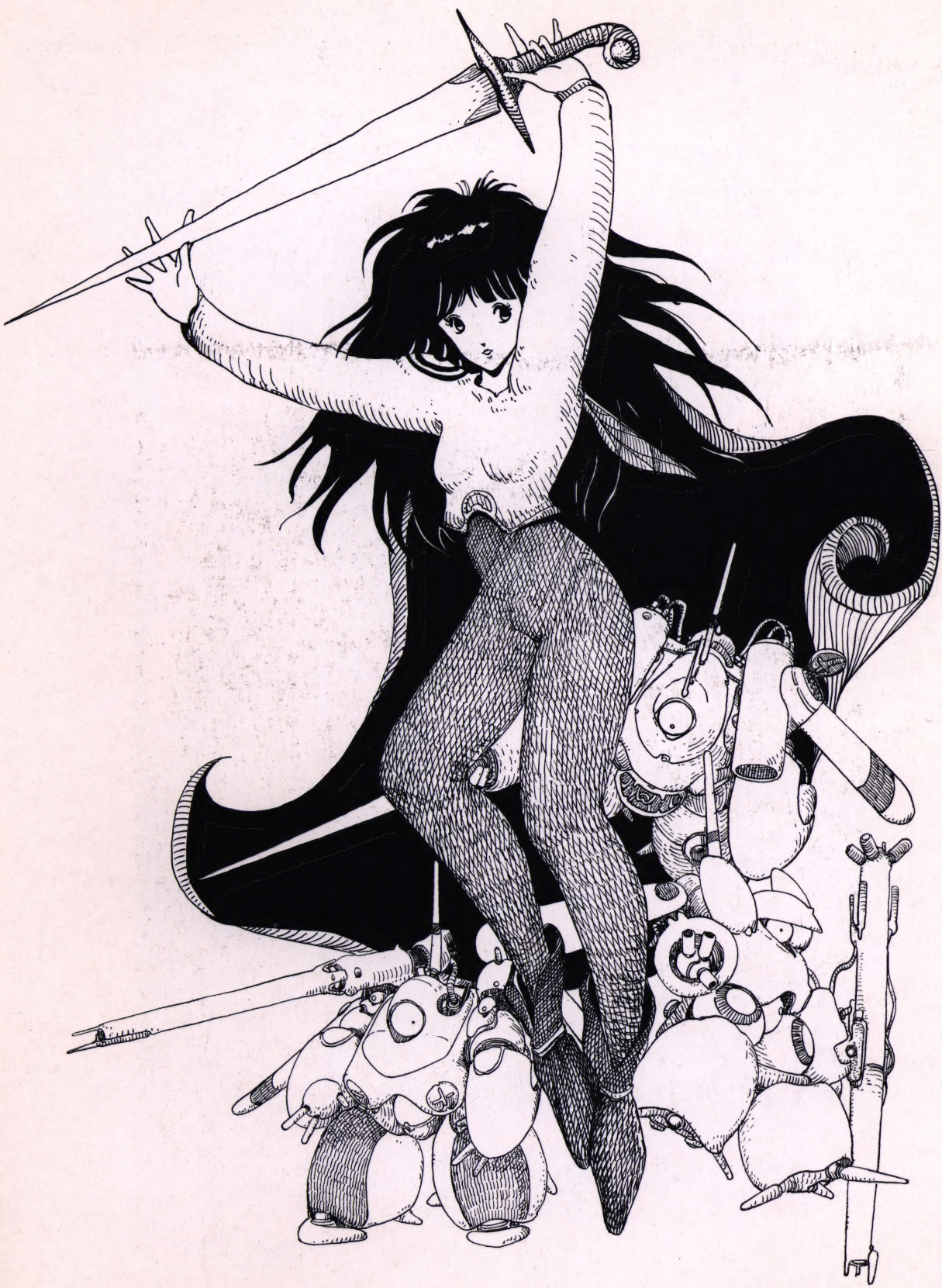
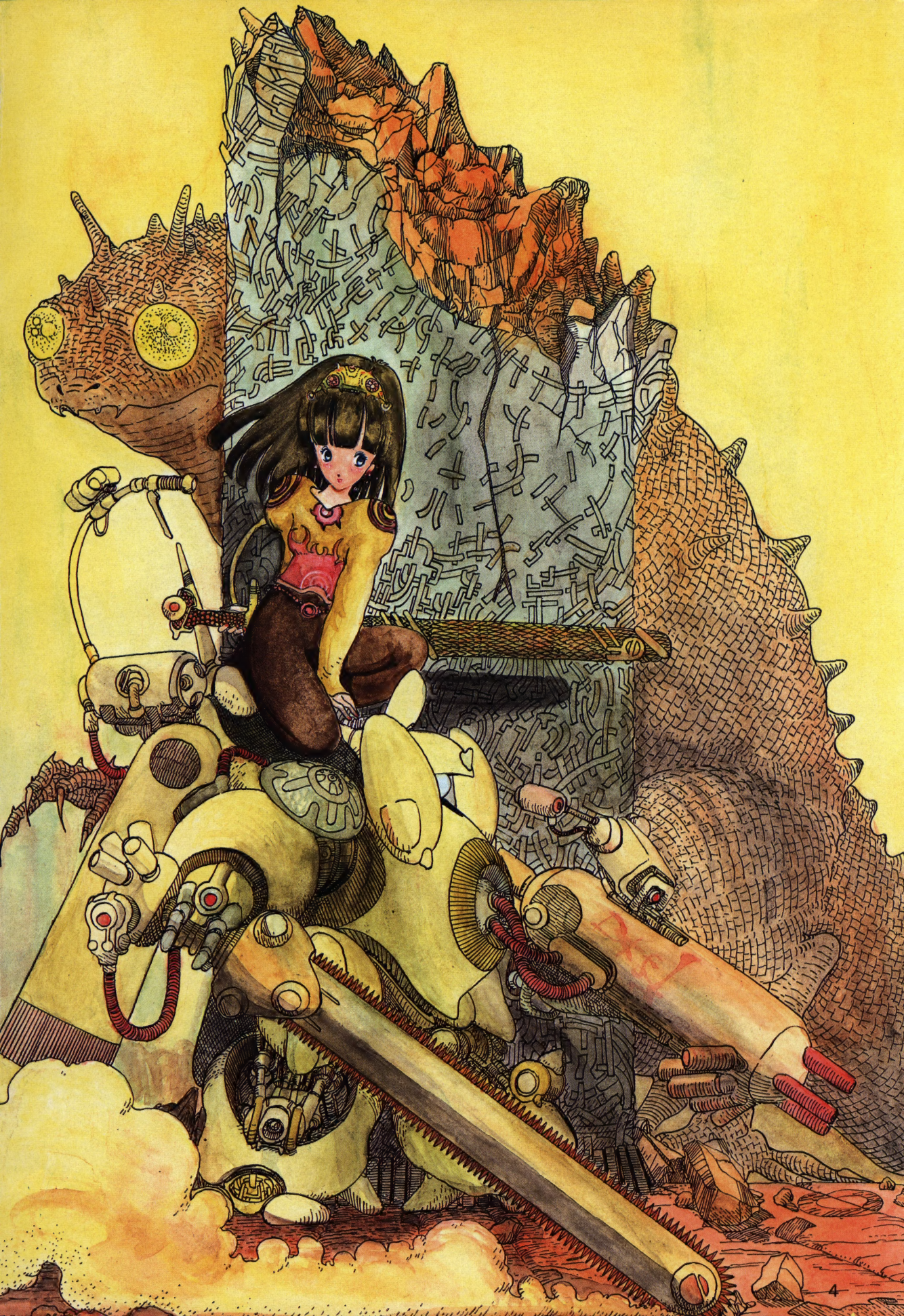
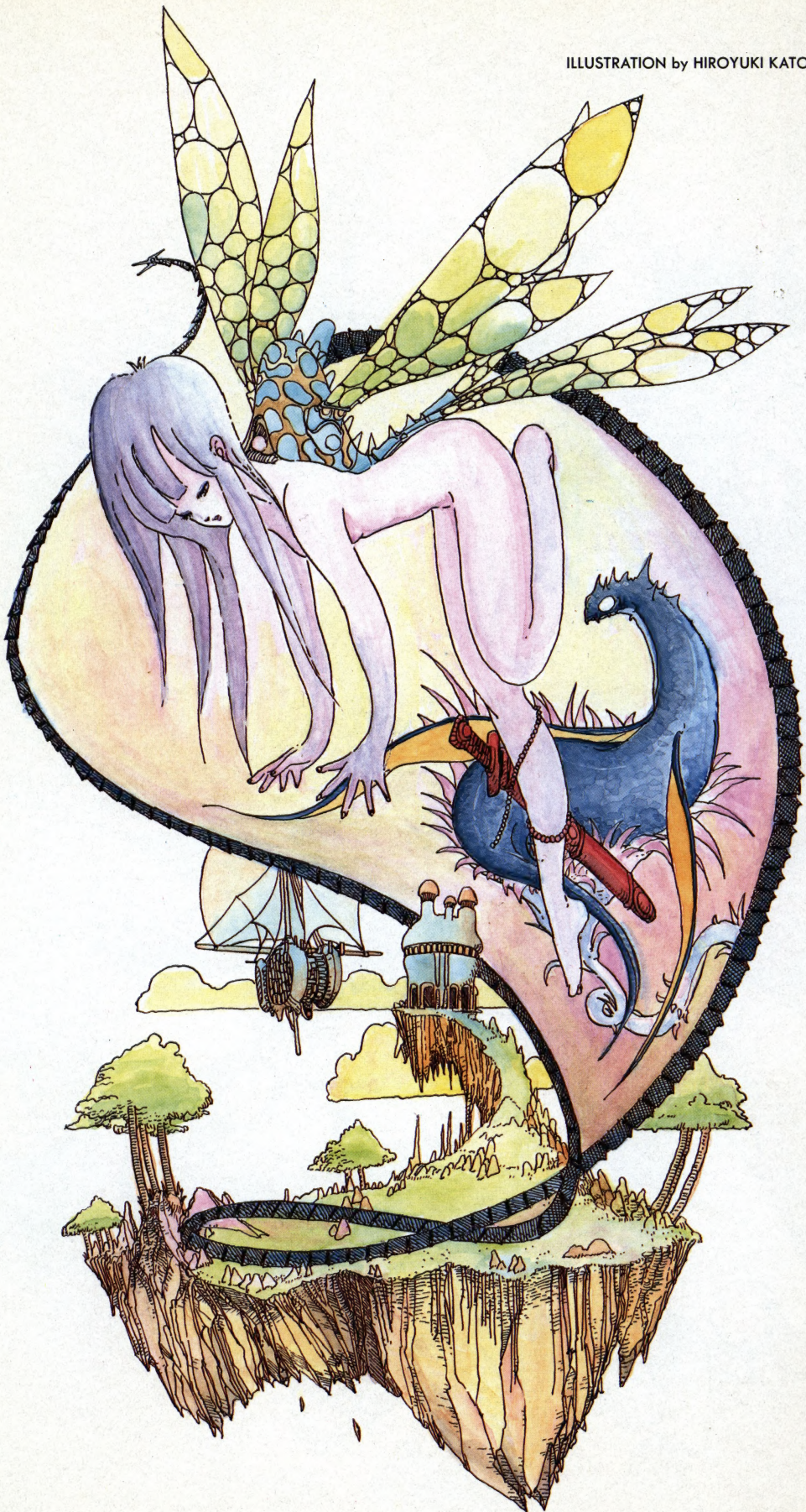
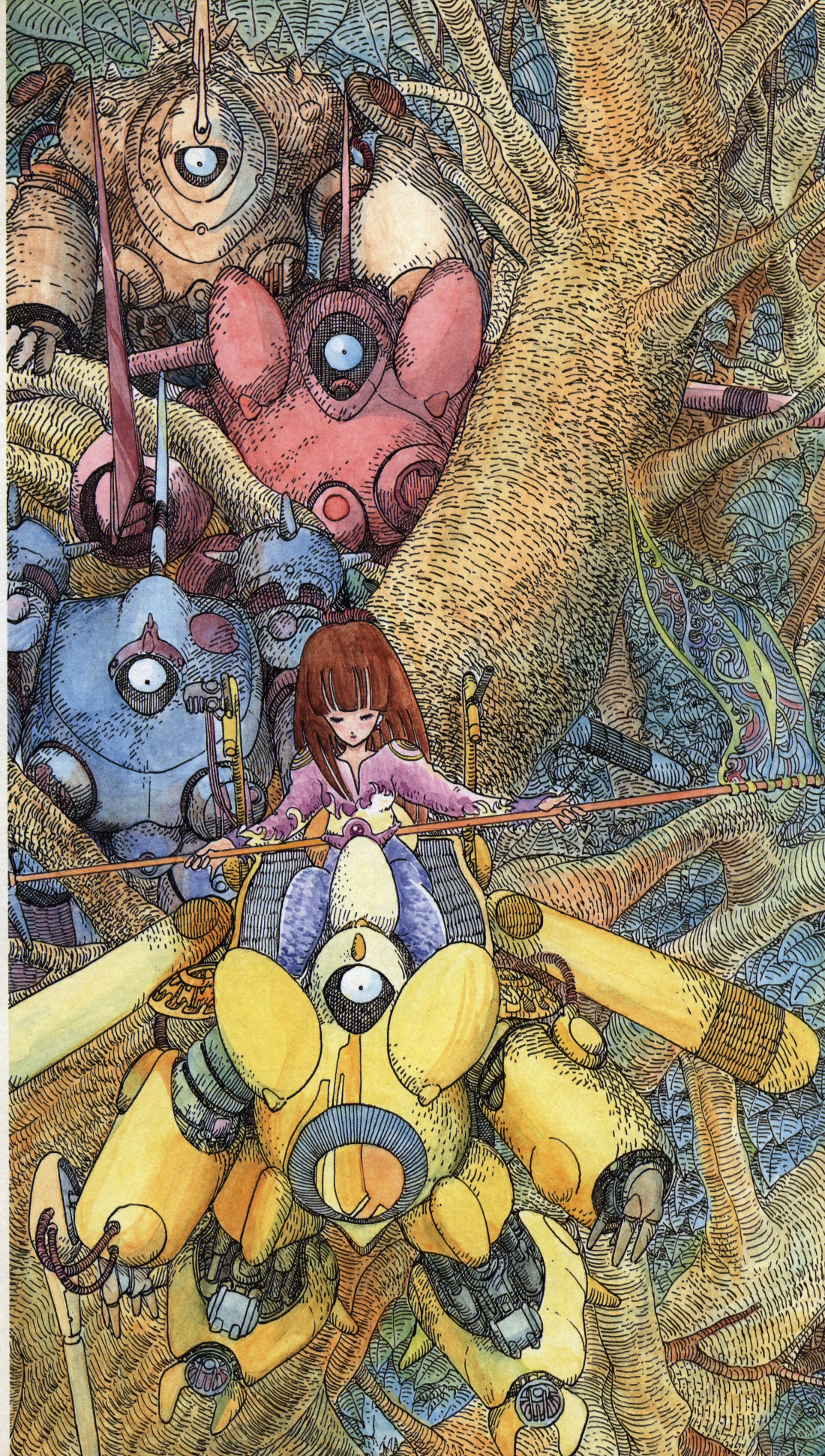
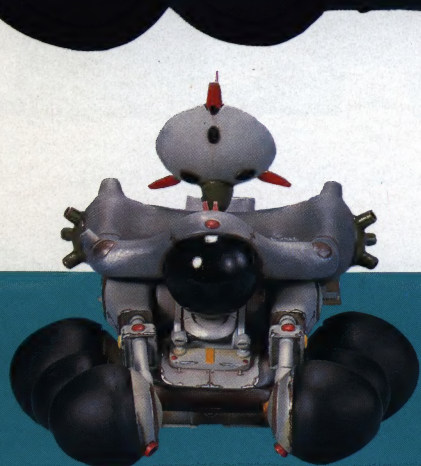
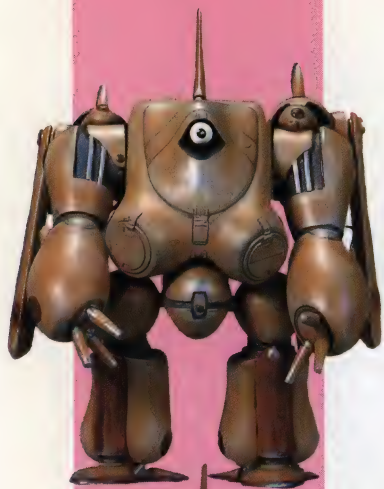
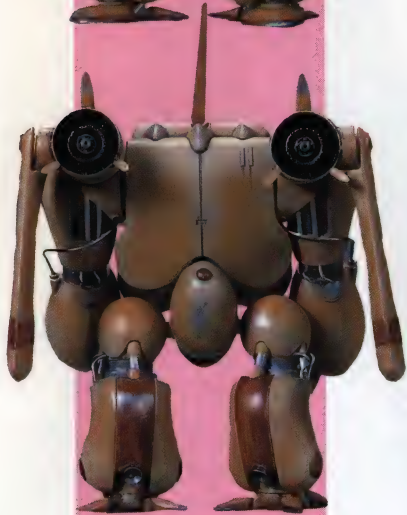



ILLUSTRATION by HIROYUKI KATO & KEISUKE GOTO

Modeling Staff
Naoki-Sato
Tetsuo-Akiyama
Kazuo-Ishii
ELIA
BURABURA SEIZIN
DALTANIAN
Diorama
& Figure

TALCAS

DEUY

YOUY

HEUY

FULLACTION ELIA

PROTECT SUIT

夢幻境戦士エリア

菊地秀行

青い森の中を小柄な影が駆けていた。尖った両耳と金色にかがやく瞳から、デブネ族の少年と知れた。平地に住む温和な種族である。密林をタブー視して滅多に近寄らないはずだ。

少年の年齢は十歳ほど。猫獣に似た顔が焦りと恐怖に歪み、少年の疾走ぶりをことさら異様に見せていた。

不意に樹々の連なりが消え、少年は沼のほとりに出た。満々と水を湛えた広がりが視界を独占した。

足取りが乱れ、少年は草むらにへたり込んだ。破れ目だらけのズボンからのぞく尻尾が、激しく巻き上がってはまた長々とのび、汗をかかぬ身体の疲労を伝えている。

「また逆戻りか…」

あえぐような声。どうやら、ここへ来たのは、はじめてではないらしい。

細い身体がすぐ起き上がった。

いつの間にか手足にまとわりついた青い蔓草が、ぴゅるると悲鳴をもらして草むらに引っこむ。

「森の主め、いい加減にしろ。今度は――こっちの方角だ」

短く吐き捨て、歩き出した少年の身体が不意に沈んだ。水飛沫がとぶ。今まで地面だった場所が、何の前触れもなく沼と変わったのだ。

肺の水を吐き出しながら少年は浮上した。必死で岸に手をのばすが、つかもうとする寸前、大地は幻のように消えた。

HAHAHAHAHA

風と木と沼が笑った。いや、森全体の嘲笑であった。

でられんぞ　ここからはえいきゅうにでられんぞ

「くそ――出てみせらい」

反抗の叫びをあげて、少年は再び岸に手をかけた。硬い感触。やった。

這い上がろうと両腕に力を込めたとき、異様な感覚が全身をなでた。

誰かが見ている。

水の中から。

恐怖の魅惑に引かれて少年はふり向いた。沼とは思えぬ深い紺色の水底で、巨大な「眼」が見つめていた。

少年の瞳と会った途端、それは眼ばたき――というよりウィンクをひとつし、またもや開いた眼蓋の奥から、人影らしいものが現われた。

身をくねらせて水を切り、ぐんぐん上昇してくる。距離と大きさから計算して、体長三トロン(三メートル)は越えているだろう。どう考えても味方ではあるまい。

だが、少年には余裕があった。後は岸によじ昇ればいい。

ぐい、と身体を引き上げる。

うすみどりの肌がさっと色を失った。

水が分厚い粘液と化したように絡みつき、動きを封じたのである。タールの海に浸っているようだった。

「うわわ」

少年の叫びは、背後で轟く水音にふり向いたからであった。

三トロンどころか、優に五トロンはある巨体が空中に跳び出し、全身の鱗をきらめかせながら落下してのけた。粘っこい水が激しく揺れ、そいつの両手に光る鉤爪と牙に、少年は二つの心臓が停まるかと思った。

森の主が創った水棲人である。

恐怖のために逃げることもできなくなった少年を高みから見落ろし、ぬるぬるした厚い唇がにやりと笑う。首筋の鰓から吐息と水を吐き出しながら、そいつは、ゆっくりと少年めがけて前進を開始した。水底は遥か下方のはずなのに、水に没している部分は両膝だけである。

半透明の水かきを張った六本の指がのび、水ごと少年をつかみ上げた。

くわれるぞ　くわれるぞ

森が歌うように言った。

だまってはいりこんだやつがくわれるぞ

巨大な口が城門のように開き、鋭い杭みたいな牙が少年の眼をとらえた。

「離せ、こん畜生」

少年は必死で怪物の指に爪をたてた。彼には、まだしなければならない任務が残っていた。水棲人は微動だにしない。

細い、澱んだ眼に残忍な色が湧き上がり、少年の身体はぐい！と口元に引き寄せられた。

そのとき――

木立ちの一角が何かに押しのけられたかのように左右に分かけ、まばゆい光が束の間、闇を真昼に変えた。

凄まじい苦鳴を発し、水棲人は両手で顔を覆った。光はもろに、邪悪な双眸を直撃したのである。

少年は水におちた。岸へよじのぼろうとするが、のたうつ巨体の巻き起こす彼に翻弄され、十ラリ（十センチ）も進めない。それどころか、粘っこい水をしたたか飲み、気が遠くなった。急速に力が抜け、顔が水中に没した。

硬い手が両脇を掴んで引っぱり上げた。ぐい！と水の抵抗も一瞬のことで、少年の肺は新鮮な空気を思う存分吸い込んだ。

身体の上昇感が止まらないのに気づき、少年はぼんやりと頭上を見上げた。

「――!?」

なんとも診妙な顔が見下ろしている。

「どーもどーも」

とそいつは、なにやら金属製の鎧みたいな顔の奥で、まん丸い眼をきょろきょろさせながら言った。まずいことに単眼であった。沼の底にいた奴よりは愛嬌があるが、曚朧状態の少年にはわからない。悲鳴をあげて、身をもがいた。

「なんだ、逃げたいのか」

そいつは、あっさり言うと、少年の手を離した。

わあああああ。

しかし、またもや誰かが少年の腰を抱き、再び上昇に移った。今度はやわらかくあたたかい腕だった。

「ごめんね、気をしっかり持って」

耳もとでやさしい声がささやいた。

今度こそ、少年の眼がぱっちり開いた。

自分が、愛苦しい少女に抱かれていることを知ったのである。ふっくらした白い顔の中で、黒い瞳とピンクの唇が励ますように笑っ

ていた。思わず少年も笑い返した。そうせずにはいられないような笑顔だった。

ところが――

ひょい、とかたわらへ眼をやるなり、

「なにしてんのよ、このドジ・メカ！――せっかく助けた子を空中へほっぽり出して、どうするのさ！」

少年の度胆を抜くような威勢のいい声が、隣りの「メカ」を怒鳴りつけた。

「ですが、姫、この餓鬼はせっかく助けたわたくしめから、こともあろうに逃がれようと。けしからん、けしからん。くすぐってやる」

空中でぽかーんとしてみせたのは、さっきのひとつ目だった。

いきなり鋼鉄の指で脇腹をくすぐられ、少年はきゃっと身をよじった。

「馬鹿！ 今度はしっかりガードしてるんだよ！ 私は下の奴を追い払うから！」

少年をそいつに手渡すなり、美少女は一気に急降下した。少年はようやく、うす緑色のボディ・スーツの背に、細長い半透明の羽根がついていることに気がついた。

地上ではひとつの戦いが山場を迎えていた。

ようやく眼がなれたのか、岸辺によじ昇った水棲人が、光の元凶に挑みかかったのである。大小さまざまの四個の球形車輪の上に平べったい屋根をつけたような、奇妙なスタイルの乗り物だった。

水棲人は近寄るなり、巨体を利して高々とかかえ上げようとしたのだが、どんな材質を使っているのか、これが仲々重く、びくりとも動かない。で、ちょっと頭をかくや、今度はやたらめったら、ふた抱えもありそうなこぶしで車体を殴りはじめた。

なにしろ身長五トロン、体重六〇〇ダイン（六〇〇キロ）――車体にはたちまち亀裂が生じ、透明の球形コクピットはぶっ壊われ――と思いきや、これが全然平気なのであった。

水棲人は完全に逆上し、痛めたこぶしを交互になでながらも、すぐそばの巨木に手をかけるや一気に引っこ抜いた。

頭上に思い切りふりかぶったその顔前へ、少女が急降下したのである。

あっけにとられる顔面へババババンとストレートの五連打。ぐええと水棲人語でのけぞったところを、ひょいと背後にまわり、ぬらぬらする太い首筋に抱きついた。

「デューイ、ユーイ！」

かけ声にあわせたごとく、上空からふたつの影が水棲人の両脇の下へもぐり込んだ。上空で少年を支えるもうひとつとよく似たずんぐりむっくりだが、細かい部分が微妙に異っている。

「急上昇！」と少女が叫んだ。

「ほほーい」

間の抜けた声を、次の光景が帳消しにした。

小さな三つの影が、六〇〇ダインの巨体をあっという間に空中へ持ち上げたのである。

森中がどよめいた。

なんとも邪悪な「意志」が空気に満ち、攻撃を開始した。

周囲の樹が身震いするや、ねじくれた枝を鞭のように、上昇する巨体へ絡みつかせた。

引き戻そうとしているのだ！

しかし、なんということか。三人(?)と一匹の上昇は止まらず、樹という樹は根こそぎ大地からもぎ取られ、土塊（つちくれ）をふり巻きながら宙に浮いた。

どれほど巨大な質量も地には留めぬ力――三人(?)は半重力装置（アンチ・G・デバイス）を備えていたのである。

「そろそろ、いいかしらね」

と少女がつぶやいた。

「ななりません、なりませんぞ、姫」と左脇の下にいる「メカ」が言った。興奮のあまり声がうわずっている。「もっと、もっと、ずしっと高いところから落とさなければ、ぺっちゃんこにはなりません。血や脳味噌のとびちるところが見えないのだ、と私は主張する。」

「やめぬか、デューイ。このサディストめ」

ともうひとつ、こちらは右脇の下で支える方が、重厚な声でたしなめた。そういえば、フードの奥にはめこまれた単眼も、こちらは落ちついた、風格のある色を湛えている。つづけて言った。「なにもぺちゃんこにしなくとも、首の骨を折れば、楽に死ねるではないか。ことわっておくが、最後の手はわしが離す」

「あっ、ユーイのずる！」

「ふたりとも、おやめ！ ちゃんと、沼へ戻すのよ！」

と少女が叱咤した。

「メカ」同士のやりくりをきいていたのか、不安気な目つきの水棲人が、ほっと安堵の色を洩らした。見かけの割りにだらしのない男だ。

百メートルほど急上昇して、少女は沼を見おろした。沼は眼の形をしていた。水中で巨大な眼球がはったと上空をねめつけている。

「あいつが森の主よ――眼の玉の真ん中へ落とすわ！」

嬉々として少女が叫んだ。こっちもかなり荒っぽい性格らしい。

三つの手が順々に離され、そのたびに小棲人はぎゃっぎゃっと悲鳴をあげながら、ついに沼へと落ちていった。

このとき、奇怪なことが起こった。危機を察知したのか、沼の眼蓋がぱちりと閉じ、水棲人の落ちる寸前、草茂い繁る大地と変わったのだ。

可哀相に巨人はもろ地面と激突し、しかしお尻から落ちたのが幸いしたのか、ひいひい言いながら森の中へと消えたが、意外な副産が誕生した。

水棲人と一緒に落下した巨木が次々と大地に突き立ち、最後の一本がめり込んだ地の底から、形容し難い苦鳴が洩れたのである。

森じゅうが絶叫した。

上空の少女ばかりか、メカたちでさえ耳をおさえたほど、不気味な声であった。

すぐにやんだ。

三人は音もなく「車」のかたわらに着地した。

「邪霊気はどう――ダルタニアン？」

なお用心しいしい、少女はコクピットに向かって訊いた。

「――目下、平静。ただし、消滅ではない。回復所要時間は、推定一四ローグ（十四時間）プラス・マイナス二」

どこかにマイクでも仕掛けてあるのか、仏頂面の声が漂ってきた。もうひとり仲間がいるらしい。

「今は二二ローグ。すると次の夕暮れまでは十分もつわね。――じゃ、近くで野宿しましょ」

はじめてにっこり笑うや、少女はまだ頭上に停滞中の少年とメカに降りてくるよう合図した。

地面に足がつき、鉄の指が離れると同時に少年は少女に駆け寄った。

「すごいや、お姉ちゃん。森の主をやっつけるなんて――ねえ、みんなを助けておくれよ」

「ちょっと待ってよ」急な申し出に少女は少しあわてた。「いきなり言われても困るわ。夜の森に子供がひとりでいるなんて、おかしいと思ったけど、どんな事情があるの？いらっしゃい、こっちで聞くから。お腹すいたでしょ？」それから、にっこり笑って手をさし出した。「わたし、エリア。よろしくね」

少年が事情を話し終えたのは、それから三〇ラコス（三〇分）ほどたってからだった。

二日まえの明け方、正体不明の部族の襲撃を受け、抵抗するものは殺され、村人のほぼ半分が襲撃者の居城に連行されたという。少年は城の大門が閉まる寸前、ただひとり逃亡してきたのだ。

「おかしいわねえ」とエリアは首をかしげた。乗りものの車体の屋根に防水シートを張った即製テントの中である。

「私もこの地方ははじめてだけど、デブネ族は、あらゆる部族と不可侵の条約を結んでる

んじゃないの。どんなに侵略好きだって、あなた方の部落は避けて通るはずだわ。それとも、この世界のセオリー無視の部族が突然生まれたのかしら」

言ってから、大きな瞳が不思議そうにぱちくりした。なぜか、最後の言葉は、エリア自身を不安にさせたのである。

「わかんないよ、そんなこと」と少年は手にした金属製の皿を置きながら言った。夕食は合成肉と沸騰させた水である。旅人の標準食料だ。「とにかく、みんなさらわれちゃったんだ。おいらの父さんも母さんもいる。お願い——助けておくれよ」

少年は手を合わせ、エリアは困ったような表情をつくった。

「でも、私たち……旅の途中だし……」

「そんなあ」

少年がベソをかいたところへ、

「寄り道は禁物だ」

いきなり横柄な声が口をはさんだ。コクピットへのハッチから、操縦席に手をつけたような「メカ」が顔(?)を出している。

「なんだよ、こいつ。余計なことを言うな！」

少年が緑の舌でアカンベをした。

「礼儀を知らん餓鬼だな、この」

ぶつぶつ言いながら「メカ」はまたコクピットへ戻った。

「なにさ、あいつ？　やっぱり『メカ』なの？」

少年は背後で何やらこちらの様子を窺っている三人(?)の方を見て訊いた。

「『メカ』ってね、『メカロイド』の略なの。機械人間のことよ。——ちょっと。何、聞き耳たててるの!?　あんたたち置き去りにしたりしないから安心おし」

じっと、つんつるてんの顔の脇——つまり耳のある位置——をふたりに向けてた三台が嬉しそうに手に手を取って踊りだしたので、少年はびっくりした。

「もう——。自分がドジってわかるもんだから。お払い箱にされたくなけりゃ、もっと真面目にやればいいのよ」

「同感」

コクピットの中から気難しげな声がきこえた。

「あんたもよ、ダルタニアン。赤色人の女の裸なんかに気をとられるから、木にぶつかったりするの！」

「わたしはもう、自己批判している。誰の世話にもならず、自分で自分を修理中ではないか」

「お黙り！」

「うむ」

「まったくもう。——どいつもこいつも、へらず口ばっかり多いんだから」

とエリアは少年の方を向き直って

「ご覧の通りよ。とっても、力を合わせて何かやるってタイプじゃないの。自分たちを守るだけで精一杯。あなたの気持はわかるけど——」

「そんな。——お姉ちゃんだけでもいいからあ」

「左様」と重々しい声で言ったのは、ユーイと呼ばれたメカロイドである。「義を見てせざるは勇なきなり。拙者は、この子の仲間の救出を提案いたす」

「あ。——わたくしも」

とサディストがかったデューイが妙にかん高い声で賛意を示したが、エリアにじろりとにらまれ、すぐそっぽを向いて口笛を吹きだした。よほどドジを重ねているらしい。

「頼むよ、お姉ちゃん。——奴らに何されるかわかんないけど、放っといたら、きっとみんな殺されちゃうよ」

少年が哀しげな声を振りしぼり、エリアがため息をついたとき——。

「虫がうるさいなあ」

とダルタニアンの声がきこえた。

少年がおかしな顔をするので、エリアは素早く唇に人差し指をあてて声を封じ、その第二関節から先にかぶせた金色のキャップの先を親指に押しあてた。

カチリという音がした。

メカたちも何か感じたのか、ずんぐりした装甲みたいなボディの奥で、丸い眼を光らせている。

シートの天井から吊された銀灯が五つの影を黒々と車体におとしている。

虫の声など最初からしていない。

エリアが、右のこぶしの上へ左手をそえた。ハンド・ガンを射つ構え——ツー・ハンド・ホールドという奴だが、エリアの右手には、金色のキャップが変形した小型銃(ハンドガン)が握られていた。

無色透明の殺気が周囲に充満した。

ふ、と少女の背後に長身の影が湧いた。光るものが夜気を切り裂く。

髪の毛がとびちり、影の眼を覆った。キン！　とエリアのハンドガンが鳴る。鋭い音をたてて影の左肩がずれた。

二撃目が空気を裂き、後方のデューイがぎゃっと叫んで一トロンほど吹っとんだ。

敵は空気と同化——つまり消えてしまったのである。

「どこへ!?」

ふり向いたエリアの背後で

「姫、危い！」

ヒューイの手首が火花とともに、間一髪身を伏せたエリアの頭上をとんだ。

「何すんのよ、馬鹿！　やる気!?」

いきり立つエリアに、

「ちがうのだ。奴が背中にいたのである」

鎖付きのチェーン・ハンドを眼にもとまらぬ速度で戻しながらヒューイが平然と弁解した。

「本当——」と援護しかけて、ユーイが悲鳴をあげた。ガチンと音をたてて、銀色の光が装甲を滑った。背後に敵。しかし、いつの間に!?

エリアは少年を背にかばい、メカたちは顔を見合わせた。いつの間に取り出したのか、デューイの右手には短槍、ユーイの手には長剣がきらめいている。しかし、どんな強力な武器だろうと、標的の姿が見えなくては……

「わーかった」

ダルタニアンの声が静寂を破った。

「わかったなら早くおっしゃい。このとんまメカ！」

「光が欲しいなあ〜〜」

小説・夢幻境戦士エリア

「なにを――」

言ってるのよ、と言いかけて、エリアは気づいた。音もなく背後に現われ、しかも、瞬時に消え去ることが可能な隠れ場所――

ハンドガンが金属音をたてた。

銀灯がはねとび、仕込まれた光粒子が霧みたいにとんで周囲を真昼に変えた。

エリアは見た。少年の足元――あらゆる影が消えた床の上に、くっきりと浮かぶ黒い影法師を！

こいつは影に潜むのだ！

衝撃波がプラスチールの床をへこませ、敵は絶叫とともに黒い手で腹をおさえつつ車外へはねた。

どっと車のへりに殺倒するメカたちへ、

「およし、外は影だらけよ」

とエリアはとめたが、三人ともたちまち元の位置へ戻ったところをみると、エリアの静止を見込して格好だけつけたに違いない。

銀灯に粒子を詰めるようヒューイに命じ、エリアは茫然と立ちつくす少年にむかってうなづいてみせた。

「今のは、私を狙ったわね。――こいつは、黙ってられないわ」

翌朝は霧がでた。

世界中を灰色の壁が覆い、一トロン先も見えない。

「あなたの言う通りなら、敵の城はこの方角だけど、自信ないわねえ」

コクピットで操縦桿を握りながら、エリアは助手席の少年に言った。驚いたことに、少女の席は実はダルタニアンそのものである。その腹部にぽっかり収まるような形で腰をおろし、操縦桿もその他のメーターもすべて、下半身を床に埋めたダルタニアンの胸部にインプットされているのだった。これほど皮肉っぽいコントロール・パネルはあるまい。

「これでは視界が効かん。三馬鹿トリオに空から見張らせたらどうだ?」

と文句を言う。エリアは首をふった。

「駄目よ。五〇トロン（五〇メートル）上空まで霧が覆ってるの」

「五〇トロンまでしか上がれん半重力装置か。飛行時間は三ラコス――恐れいるよ」

「お黙り。あんたは操縦だけしてればいいのよ」

「へいへい」

全長十八トロン（十八メートル）、重さ七千ダイン（七千キロ）巨体は、大きなボールみたいな車輪で樹々をなぎ倒しながら前進していくが、コクピットは特殊な干衝装置で保護されているため、いかなる衝撃も伝わってこない。車体が横転しても、ここだけは常に正常位置を保っている設計だ。

「凄い乗りものだねえ」

少年が感心したように言った。

「これなら、どんな怪物（モスタロ）ができても安心だ。ねえ、誰に貰ったの？　これから、どこへ行くの？」

「えーっとね――」

言いかけて、エリアは口ごもった。

「――北（ノルト）よ。氷河の涯て」

「へえ!?――あんなところに、何かあるの？」

「……」

それきり少年は口をつぐみ、エリアも無言で車を走らせたが、二ローグ（二時間）後、ついに停止せざるを得ない状況に追いこまれた。

眼前に黒々と、長大な岩肌が立ち塞がったのである。

その頂きは霧の彼方に隠れ、とても五〇トロンの上昇能力で、片がつく高さとは思われない。方向を転じ、崖に沿って四、五千トロン（四、五千メートル）進んでみたが、とてもなくなってくれそうにない。

エリアが唇を噛んだとき、

「あれ見て！」と少年が霧の奥を指さした。

「洞窟だわ――よく見つけたわね。通れそう、ダルタニアン？」

「ふむ。なんとかなるだろ。この車は君の尻（けつ）ほど大きくない。――ぐわわ、ビリビリビリ」

「ざまあみなさい。以後、言葉に気をつけることね」

エリアがにっこり笑って小さなスイッチから手を離したところをみると、ダルタニアンは、自分への電撃制裁装置も内蔵しているらしかった。誰がつくったのか知らないが、実に行き届いたメカではある。

しかし、その判断に誤まりはなく、三ラコス（三分）ほどして、五人を乗せた車は、黒い岩壁にもっと黒に開いた口みたいな穴へ、エンジン音も軽やかに入りこんでいた。

車体上方の天井――居住区と荷物入れの外殻に取りつけられたサーチライトが、幅広い通路と天井を煌煌（こうこう）と照らし出している。霧はない。

「なんだか、おかしな通路ね」少し行ってエリアが細い眉を寄せた。「さっきまでつるつるの地肌だったのに、今は穴だらけよ」

「ほんとだ」と少年が不気味そうに頭上を見上げてつぶやいた。

不意に、車体が沈んだ。

「きゃっ――どうしたの、ダルタニアン？」

「穴に――いや、岩に車輪がめり込んだらしい。こいつは困った」

「岩にですって!?」エリアは逆上した。気が短いことこの上ない。可愛らしい顔が鬼みたいに変わって「車輪への重量軽減構造は効果率八〇パー（八〇パーセント）よ。十ダインが二ダインになるのよ。岩にめり込むはずないでしょ、この可呆メカ。――三馬鹿大将、ちょっと見てらっしゃい」

すぐ、前車輪の方へ向かう三人組が見えた。確かに半分以上岩肌に沈んだ車輪のまわりでワイワイやってたのが、確かめるつもりか、そろって着地したのである。

「やめなさい！」

エリアが叫んだときは遅かった。

次の瞬間、三人は地面に貼りついていた。

「飛んで逃げるのよ！」

コクピットのハッチから身をのり出して叫ぶエリアへ、面白くもなさそうなヒューイの声が

「それが動けない。地面ごと持ち上げることになるのである」

「これは岩ではありませんぞ、姫」とユーイの渋い声も言った。「何か、岩に似た――」

「いや、岩です」とデューイが異を唱えた。三人のうちで、最も冷静かつ分析力に富んだメカである。欠点はサディストということだ。「成分は岩に違いありません。ただ、本来の『役目』が物理特性を無視させているのです――と私は断言する」

「なによ、それ？」

身をのりだしたエリアの頭上で、何かがシートにあたる音。

「ほーら、来た。くくく、私の分析は正しかったのだ。うう、身体がチクチクする。いい気持」

「おまえ――マゾヒストの気もあったの？　どうしたのよ!?」

ぷん、と何かが焦げる匂いが鼻をついた。眼の前を銀色の線が何本も垂直におちていく、雨か？

「サン（酸）であるな、これは」

とヒューイがつぶやいた。

「何ですって!?」

異臭の正体がシートの溶ける匂いであることに、エリアはようやく気づいた。あわててハッチを閉め、マイクを握って呼びかける。

「一体、何なのよ、これは？　デューイ、マゾってないで説明おし」

「ご覧の通りで」とディーイはうっとり、肩をすくめてみせた。「この通路の役目は、入ってきた異物を捕獲し、酸でほどよく溶解後、さらに奥、腸の方へ押しやることなのです。――つまり、ここは、胃というわけで」

エリアは絶句し、すぐにダルタニアンの方を向いた。

「彼ら、あと何分もつ？　この車は？」

「このサンの強度だと、ざっと二〇ラコス。

車体もその程度だな」
　さすがに、すぐ事態を呑みこんで計算していたらしく、打てば響く返事だった。しかし、返事が早くてもどうにもならない。
「何か手はないの？　三人とも——デューイは喜んでるけど——苦しんでるわよ」
「ふむ」
　絶望がコクピットを支配した。時だけが非情にすぎる。外の三人は——ヒューイは口笛を吹き、ユーイは腕組みしたまま瞑想、デューイだけが恍惚に身をよじって——三者三様の反応を示しているが、その全身から、白い煙がたちのぼってきたではないか。
「見てられない。私——行く」
「無駄だ。姫は彼らよりもたん」
　冷静な指摘に、エリアは両手でコントロール・パネルをひっぱたいた。
「打つ手はないの——打つ手は」
　その眼が急に細まった。
「どうしたの？」
　少年の問いにも答えず
「頭の中で誰かが言ったわ——心臓だって。どういうことよ？」
「ほう」とダルタニアンが感心したように言った。「それに気づいたか、こういうことだ。この岩壁生物の重量は推定二〇億ラン（二〇億トン）——それだけの身体を維持する心臓のエネルギーも茫大なものだ。それを積荷の予備半重力回路にある方向から注入できればテレポートができる」
「それよ！」
　エリアの眼が太陽の光を放った。
「無理だ。大口径衝撃銃（スタンナー）で穴をうがつにしても、心臓まで優に三ローグはかかる——!?」
「どうしたの？」
「右前の岩壁を見たまえ。急に——穴が開いたぞ！」
　誰かが頬を叩いていた。
　薄眼を開けると、若い男の顔が視界いっぱいに微笑んでいた。
「なによ、あなた!?——びっくりするじゃない！」
　叫んでエリアは身を起こした。妙に薄暗い部屋である。鉄格子の扉がはまっているところをみると、牢の中らしい。エリアは、ピン！　ときた。
「ねえ、ひょっとして、ここ、正体不明で凶暴な部族の牢獄じゃない？　他にもつかまっている人たち、いるでしょ？」
　唐突な質問に、青年は眼を丸くした。丸顔の、ひと目で善人と知れるタイプだった。茶色の工具服をつけてるところからして、旅回りの技術者（クラフツマン）かもしれない。
「びっくりしたのは、こっちだよ。いきなり眼の前にぱっと現われてさ。君が噂にきく森の魔法使いかい？」
「残念でした。でも、いま、あなたと議論してる暇はないの。教えて。他の人たちはどこにいるの？」
「知らんよ」と青年は首をふった。「ぼくは平原地帯の街で技術屋してたんだけど、二日前の夕方、食事の最中にめまいがして、気がついたら、この城の広間にいたんだ。で、その場でここへ連れ込まれたってわけさ。すべての牢を見たわけじゃないけど、この棟にはぼくひとりだね」
「おかしな人ね」
　異様な現象に翻弄されながら、妙に愛敬ある表情を浮かべている青年をしげしげと見やり、エリアは彼も異生物の体内からテレポートしてきたのではないかと思った。あの穴を通って辿りついた心臓部の、あの凄まじい鼓動と大円柱みたいな石の血管。装置を固定するまでの苦闘。——そういえば、みな、どこ行っちゃたんだろう。三人のことが心配で、先のことも考えずテレポートしちゃったけどお願いだから、無事でいて。
　エリアは立ち上がった。背中の半重力装置はアウトだった。空間の歪みを通過する際、エネルギーが流出してしまったのだ。幸いハンドガンだけは無事だった。出力を全開にして射つと、鋼鉄の錠前はあっさりはじけとんだ。
「じゃ、元気でね。しっかり逃げるのよ」
「ちょっと待てよ。どこ行くんだ」
「助けなきゃならない人たちがいるのよ。依頼人はどうなったかわかんないけど、約束した以上は守らなくっちゃね」
　青年は少しのあいだエリアを見つめ、それから工具服のポケットに手をつっこんで、親指ほどの太さの円筒を取り出した。底をひねり、中味を出してみせる。
「なによ、——ただの口紅じゃない。恋人への贈りもの？　さよなら」
「待てってば、危ない橋を渡るにしても、身だしなみさえよくすりゃ、死神（ベイダー）も見逃してくれるかもしれないぜ」
　言うなり、青年は赤い先端で、エリアの唇をひと撫でした。
「持っていきな——達者でな」
　エリアの手に円筒を握らせ、手をふった。
「逃げないの？」
「今逃げてもすぐつかまる。君が騒ぎを起こしてからにするよ」
「合理主義者（チョーシー）だこと」
　エリアは素早く牢を出た。ふり向くと、青年が内側から扉を閉めるところだった。変わった男がいるものだ。
　青年の言葉通り、蜿蜒（えんえん）とつづく鉄格子の中には誰もいなかった。牢自体、いやに新らしい。いや、角石を整然と敷きつめた石畳の通路や、そびえたつ城壁にも、風雨の刻んだ年（とし）月（つき）がまるで感じられない。まるで、出来たてのほやほやだ。——まさか。
　空は晴れわたっているが、空気には異様な気配がみなぎっていた。ここは尋常な場所ではない。
　不安が記憶を喚び醒ました。
　テレポートの瞬間、当然次元転移すべき方角から、誰かの力によってこの城へ運ばれたような気がする。そのとき、もうひとつの力がそれと争い、自分はあの牢へ落ちたのだ。それは、どちらの力のせいだったのだろう。
　前方の城壁に黒々と出入口が開いている。ためらわず、エリアは中へ入った。
　幅広い階段を降り、廊下を渡るうちに、
「おかしいわ」
　つぶやきが洩れた。疑惑は決定的だった。この巨大な城内に、人っ子ひとりいないのか。
　誰かが肩を叩いた。
　跳躍しざま、ハンドガンを向け、その顔がぱっとかがやいた。
　少年だった。
「どうしたの、こんなところで？——みんなは？」
「わかんない」と少年は首をふった。「気がついたらここにいたんだ。それより、部落の人を助けて。案内するよ」
「案内するって——あなた、ここはじめてじゃないの」
　不審そうに訊くエリアに、少年は平然と首をふった。
「さっき、見といたんだ。——こっちだよ」
　茫大な数の階段を降り、二人は地下の闇の一角に辿り着いた。
　床や柱に優雅な彫刻。城主たちの居住区であろう。
　前方に大きな入口が口をあけていた。
　光と歓声が洩れてくる。
「早く——」
　少年が先に立って進んだ。入口をくぐり、エリアは眼を見張った。
　広大な広間の真ん中に、ひとりのデネブ人が引き出され、不安そうに周囲を見まわしている。
　彼を囲むように、城の住人たちの姿があった。金糸銀糸の衣裳をつけた異形のものども。三つの眼は血よりも紅く、残虐な形にめくれ上がった唇から鋭い牙がのぞいている。この世界——スナイドリーマー一凶暴といわれる

小説・夢幻境戦士エリア

ダッタン族でさえ、これほどの妖相は呈していまい。エリアは吐き気を覚えた。
　何処からともなく、直径三トロンほどの球体がデネブ人の前に出現した。半透明の身体はぶよぶよと歪み、脈うち、それは突然宙に舞い上がるや、彼を呑みこんだのである。
　球体の内側でもがいたのも束の間、大柄なデブネ人はたちまち溶解してしまった。
　怪物たちがどよめいた。どんな種類の声かは不明だが、面白がっていることは表情からわかった。デブネ人たちは、虐殺のために連れて来られたのだ。
「なんてことを！」
　エリアの頭に血が昇った。かといって、いきなりとび出すわけにもいかない。三つ又の槍を抱えた衛兵らしきものを入れれば百人近い人数が集まっているのだ。
「みんながどこにつかまってるか、わかる？」
　少年はうなづいた。
　二人は素早く広間を抜け、もう一層下へ降りた。広間の真下に、牢らしい扉があった。鉄柵を見なくても、二人の衛兵でそれと知れる。エリアのハンドガンが唸り、二人は石壁に激突し気を失った。一種の音波衝撃波だが、ロー・レベルに合わせてある限り、死ぬことはない。
　鉄格子の向うにデネブ人たちの姿を確かめ、エリアは鍵を吹きとばし、扉を開いた。少年が駆け込み、父らしい男に抱きつく。感動のあまりか、みな、顔を伏せた。
「早く逃げるのよ。地理のわかる人、先に出て！」
　エリアが叫んでも動かない。
　すすり泣きが洩れた。
　いや、笑い声が。
　全員がいっせいに顔を上げた。エリアの方へ。
　紅い眼と白い牙。
　かすかな唸りとともに、左右の石壁と天井が床に吸い込まれた。
　耳をふさぎたくなるような邪悪な声援に包まれ、エリアは先刻の大広間の真ん中に立っていた。
　五〇ラン（五〇センチ）と離れていないところで無数の槍の穂先がかがやいている。抵抗は無駄であった。
「ようこそ、わが城へ」
　ひときわ豪華な衣裳に身をつつんだ怪物が言った。
「勇敢な女戦士に自己紹介させていただくとしよう。わしが当城主、グロッホ大帝じゃ。そして、こっちが――」
　少年の衣服を着たやつがにやりと笑った。
「わが部下三羽烏のひとり――チューラ。どんな姿にも変化できる他、記憶まで自由につくり出して、そのものになりきるという特技をもつ」
「お見事ね。お隣りの影さんがこの子だけは襲わなかったとき、見抜いておくべきだったわ」
「ほう、気づいていたか」とメルバラが感心したように言い、影法師もうなづいた。
「影の名は、ドウス。そして、もうひとりを紹介する前に、ひとつ訊きたいことがある」
「それは、こちらも同じだわ」
　エリアはあどけない顔に微笑さえ浮かべて言った。
「要するに、今度のことは一から十まで、私をここへ連れこむために仕組まれた罠よね。何の目的で、そんな可呆なことするの？」
　グロッホ大帝の返事は、エリアのどんな予想も越えていた。いともあっさり――
「わからん」
「なんですって⁉　もう――からかわないで！」
「本当にわからんのじゃ」大帝は、その顔に似合わぬ愛敬のある動作で肩をすくめてみせた。
「理由もなく、おまえを捕えねばならぬような気がするのだが――それより訊きたい。おまえ、わしたちに捕われねばならぬような理由があるか？　何処へ行く途中じゃ？」
　なんとも珍妙奇怪な問答であった。襲うものと襲われるものが、互いにその理由さえ知らぬとは。しかし、エリアは一瞬、茫然となった。彼女は真実、旅の目的地さえ知らなかったのだ。いや、目的さえも。
「おまえもわからぬか」大帝の邪悪な声は疲れをおびていた。次の瞬間、その両眼が炎と変わり、天地を揺がす大音声で――
「しかし、仕事は果たさねばならぬ。三羽烏最後のひとり――グルーカ、出でよ！」
　エリアの囲みがさっと後退し、果てもかすむ広大な床の一角がぐん！　と傾斜した。
　青臭い異臭が広間に溢れ、なにやら巨大なものが浮き上がってきた。
　全身に紫のこけが張りつき、まだらを形造ったような巨体は三トロンはあろう。両脇から数本ずつの手足が突き出ている。
　しかし、エリアの口をぽかんと開けさせたものは、その巨体全体にくっついた、なんとも巨大な眼と鼻と口であった。こいつは、全身が顔なのだ！
「ぐうふ。」
　ひと声唸るや、全長二トロンはあろうかと思われる口の端から、床と並行に、湾曲した剣のごとき牙が二本吐き出された。
「気の毒だが、こうせねばならん」大帝が嘲けるように言った。「愛苦しい女戦士の死にざま、とくと見届けてくれようぞ」
　足元の空気が鳴った。皮膚を裂く鈍い痛みにもめげず、エリアは二トロンも後方へとび下がり、空中でハンドガンを放った。
　眼を狙った衝撃波は怪物の眼蓋ではね返り逆にエリアの腹部を襲った。
　低い悲鳴を洩らして落下する。幸い、効果は大幅に低下していた。足めがけてふりまわされる牙を転がりながら避け、エリアは夢中でハンドガンを照射した。
　通じない。とてつもない面の皮の厚さだった。
　立ち上がろうとした足首を何かがつかんだ。影から突き出た黒い手が！
「ドウス――ああん、卑怯もの！」
叫ぶ眼前に巨大な顔と死の牙が迫った。
　絶望と恐怖がエリアの心を直撃した。
　やだ！　生きたい。
　唇がひきつった――そう感じたとき、エリアの身体は真紅の光芒に包まれていた。
　左右から抱きこむように襲った牙は、跳躍したエリアの下方を薙ぎ、足首を握ったまま引っぱり出されたドウスの胴を両断していた。
　悲鳴もあげず、影法師は分解した。血一滴でない。
　真紅にきらめくプロテクター・スーツに全身を覆われたエリアを見て、大広間がどよめ

いた。
仰天したのは、広間の怪物たちよりもエリアの方だった。
負けてたまるかと念じた途端、唇の表面がカッと熱くなり、次の瞬間、頭のてっぺんから爪先まで真紅の金属服につつまれていたのである。鮮明な電子視界の隅に迫りくる大牙を認め跳躍するや、一気に十トロン以上をクリアしてしまったのにも驚いた。エリアの筋力が増幅されたというより、スーツの金属自体が柔軟性に富んでいるらしかった。
頭の中で何かが閃いた。スーツの使用法に構造だと理解するより早く、エリアは、突進してきたグルーカを避けて跳躍した。
真紅の流れ星を巨大な顎がとらえた。
グルーカがスーツに負けぬ猛スピードでエリアの腰に牙をたてたのだ。
だが、速度に停滞はなかった。グルーカの巨体もろともエリアは広間を横切り、グロッホ帝と衛兵たちの席へ突っ込んだのである。
グルーカの体重プラス加速度の下敷きになり、数名の衛兵が圧死した。みるみるうちに姿がかすみ、消滅してしまう。
まるで、形のある幻のようだ、とエリアは思った。
腰のあたりで鉄をこすり合わせるような音。グルーカの牙だ。
「えい!」
右手の手刀を無雑作に叩きつける。ひびが入った。二撃めでへし折れた。エリアの腕に衝撃はない。十万分の一リミト(十万分の一ミリ)の薄さとはいえ、エネルギー吸収塗料の効果は完璧だった。
グルーカの絶叫をききながら、エリアは立ちすくむグロッホ大帝の背後に跳んだ。
あわてて突進してくる衛兵の槍を片手でつかみ、持ち主ごとえいやと放り投げてしまうとてつもない力だった。
大帝の首に片手を巻きつけ「お下がり!」と衛兵に命じる。「近寄ると、首の骨がぽきんよ」
「大したものだな、エリア」
大帝が感服したように言った。怒り狂っている風はない。落ち着き払った声だ。
「これで失礼するわよ」とエリアは宣言した。
「あなたが私を襲わなくちゃならないってだけじゃ、戦う理由が不十分だわ。お互いにさっぱり別れましょ。追いっこなしよ」
「そうもいかんな」
「じゃ、ポキンよ」
「できるか、お前に?」
エリアは可愛らしく首をかしげ、舌を出した。「できない」
「では、どうする?」
「はい、さようなら」
大帝の肩を軽く押し、衛兵を薙ぎ倒してグルーカの顔と激突するのを見届けるや、エリアは出入口へ跳んだ。
大帝が何か叫んだ。
上下左右に石の壁が走り、エリアをはね返し、封じ込めた。厚さ五〇ラン(五〇センチ)はある。
大帝は嘲笑した。
「スナイドリーマーいち硬い石の壁だ。どうじゃ、そこから出られるか?」
答えは、鈍い打撃音だった。大帝と衛兵、グルーカの眼がかっと見開かれた。壁面にひびが入ったかと思うや、破片を巻き散らしてエリアが跳び出した。一同には眼もくれず、広間の入口から消えた。
だが――異形のものたちは追わなかった。
「くくく……この城を出られると思うか、小娘」
自信たっぷりに言い放った大帝の顔が青ざめたのは次の瞬間であった。いや、このとき、階段を駆け上がるエリアさえ、思わずその足を停めた。
AAAAH……
奇妙な――正確に言うと、誰かがあくびしたような音が響き渡ったのである。この世界全体に。
そして、エリアは見た。
周囲に屹立する大質量の石壁が色を失い、幻のように溶け消える光景と、その背後に束の間浮き上がった、途方もない存在の一部を――。
しかし、思わず眼をしばたいたとき、周囲は元通りの光景を取り戻していた。
「今の、何かしら、幻?」
頭をふってまた走り出したとき、エリアは何かが剝れるような音をきいた。妙に身体が重い。足の方を見て、ぎょっとした。
スーツが剝れかけている。赤い破片が巻き起こる風に乗って舞った。
「やだ、どうしよう、この役立たず!?」
恩知らずな言葉を吐いて階段を駆け上がり廊下へでた。前方に扉が見える。
出られる!
歓喜して一歩踏み出した刹那、足元の床が陥没した。落し穴である。かろうじて左手の第一関節から先で穴の縁につかまり、楽々とはね上がる。
バランスが崩れた! 肘の部分がはがれたのだ。どっと横倒しになるところへ、猛烈な勢いで穴から緑の光線がはね上がった。なんと、石の天井で屈折し、エリアの頭部に命中する。炎が上がった。
「あつっ!」
悲鳴を洩らしたが、幸いスーツは破れない。しかし、廊下は光線のダンス会場と化していた。床で天井ではね返り乱舞する光線はまさに生物であった。次々にスーツの上で小さな炎を生む。あちち。
左肘をかばうようにして、エリア は扉へ走った。
扉に肩からぶつかろうとしたとき、扉は外から開き、エリアは陽光の下に引っぱり出されていた。
「あなたは!?――まだ、ぐずぐずしてたの?」
驚きの声を受けたのは、あの口紅をくれた青年だった。
「いつまでたっても騒ぎが起こらないんでね。しょうがないから自分で出てきたんだ。ちょっぴり、君のことも気になって、この扉をのぞいたら」
「私が出てきたってわけ。心配してくれてうれしいわ――チュッ」
頬っぺたに口づけされて青年は破顔した。にこにこしながら意味ありげに
「どうしたんだい、その服?」
エリアは事情を説明しかけ、途中で気がついた。
「――ひょっとして、これ……あのとき、唇が急に熱くなって――わかった、あの口紅ね!」
青年は自信たっぷりにうなづいた。
「ぼくの作ったプロテクト・スーツ・ルージュ型(タイプ)さ。あれ一本で三〇回使える。五ラコス(五分)しかもたないけどね」
「凄いわ! ちょうだい!」
「え」
「早く行きましょ。敵が追ってくるわ! あなた、出口わかる?」
「うん」
こうして、プロテクト・スーツはエリアのものになった。
走りながら青年が言った。
「だけど、おかしいな」
「この城、こんなにでっかいのに、ほとんど住人がいない。それに、どこもかしこも新品で、つい最近できたみたいだ」
それはエリアの疑問でもあった。
理由も知らず自分を襲う敵――こんな奇妙ではた迷惑な存在があるだろうか。もうひとつ、エリア自身の旅の目的とは?
「あれ、おかしなところへ出ちゃったぞ」
青年が困ったような声をあげた。
城壁の端だった。遥か彼方に青空と半透明の山々が広がっている。

小説・夢幻境戦士エリア

身を乗り出して下方をのぞき、エリアは天をあおいだ。見渡すかぎり森の絨毯だった。五〇〇トロン（五〇〇メートル）はある。よく、こんな場所に城など建てたものだ。

「とび降りるしかないなあ」とエリアはつぶやいた。「あの口紅、じゃなかった、プロテクト・スーツ——壊われないかしら?」

青年はムッとしたように

「このパラレルさまのつくった服だぞ。五倍の高さ——じゃちと危いが、これくらいなら大丈夫さ」

エリアはうなづき、ぽんと城壁に乗った。素早く口紅を塗り、

「じゃ、いくわ。さよなら。この服ありがとう」

「ちょっと待て!」パラレル青年はとび上がった。「ぼくはどうなる?」

「あ、そうか」

風を頬に受けながらエリアは城壁の上で立ちどまった。

「じゃ、一緒に連れてとび降りてあげる。そうだ——どうすれば、口紅がスーツになるの?」

パラレルの口がぽかんと開いた。エリアの呑気ぶりにあきれたのである。

「絶体絶命の窮地に陥ったとき、生きたいという潜在意識が服の『使命記憶』のスイッチを入れるんだ」

「じゃ、このままとび降りれば途中で着れるわね」

「そんな無茶な」

「なこと言ってられないわよ、ほら!」

エリアが指さした方を見て、青年は青くなった。城壁の角を曲がって、とんでもない怪物が姿を現わしたのである。

吐き気を催すような色の球体をいくつもつなぎ合わせたような胴、首はなく、そのかわり、胴の下部からのびた無数の触手の先端に真っ赤な憎悪をたたえた眼と槍みたいな牙をのぞかせた口、それに手足がくっついている。

驚くなかれ、それが数万本はありそうな触手の数だけ勢揃いしているのだ。体長は十トロン、体重五万ダイン（五万キロ）というところか。

「よく逃げのびたな」と怪物はグロッホ大帝の声で言った。エリアは眼を丸くした。

「——これが、あんたの本体なの? わざわざ大帝さまの出陣とは恐れ入りますけど、グルーカはどうしたのよ?」

「食った」と怪物の無数の口が一斉に言った。「役目を果たせなかった奴には当然の罰じゃ。今度はおまえたちを食う」

「べえ、だ」

エリアは舌を出した。震える青年の両腕に手を入れ、城壁に乗せる。

「それまで待ってるもんですか。失敬するわよ」

「そうはいかん!」

大帝の周囲でぐおっ!と風が唸った。

手足と口が眼にもとまらぬ速さで二人にとびかかった。

ガチガチガチッ! 牙と鉤爪の噛み合う音を後に、エリアは宙に舞った。耳元で風のどよめき。樹々の連なりが迫ってくる。

あることに気づき、エリアは愕然となった。口紅が守ってくれる——それを知るためか、ちっとも恐くないのである! 死の恐怖を味あわぬ限り、スーツは作動しないのに!

視界一杯に、巨木と見分けられる樹が広がり、喉の奥で悲鳴を洩らした途端、唇が熱をおび、エリアは音もなく太さ一センチ程度の針金みたいな小枝上に着地していた。衝撃はすべて干衝され、小脇に抱えたパラレル青年も無事だ。ただし、泡吹いて失神しているのはやむを得まい。

「凄いわ、あなたの発明品!」

ぎゅっと抱きしめるや、身体中の骨がボキボキ鳴って、パラレルは悲鳴とともに眼を醒ました。

ぼんやりと頭上を見上げ、眼をむいた。

「やだ。私、そんなにきれいじゃないわ」

ぽっと頬を染めたエリアも、次の瞬間、彼が何を見ているのか知った。恐怖の視線を追う。

黒い影が迫りつつあった。

背——というのだろうか——から巨大な羽根を左右に広げたグロッホ大帝獣の巻き起こす風に、ふたりの周囲の樹木は激しく震動した。

「なぜ、スーツに飛行能力つけとかなかったのよ、馬鹿!」

恩知らずにもののしり、エリアはパラレル青年を両腕に抱えたまま地面にとび降りた。

全長五、六〇トロンはありそうな翼のはばたきは、強風とともに別のものも生んだ。大帝の全身から噴き出す妖気と妖風が合致し、どのような化学変化が生じたのか、槍を構えた黒い小人たちが現われ、弾丸のようにエリアに突きかかってきた。

チン、チンとスーツに槍があたるが、さすがにビクともしない。ぶつかった小人は黒い煙となって消えた。

効果がないとみたか、大帝は自らふたりの前方に舞い降りた。

口という口がぐうっと上を向く。

危い! エリアはとっさにパラレルを地面におろし、上から覆いかぶさった。

炎が電撃が寒波が腐敗風が一気呵成に襲った。樹々が炎を発し、凍ってきらめき、ドロドロに溶けた。はじめて味わうコンビネーション・アタックだった。

パリン、という音をエリアの耳はきいた。スーツが剝げかかっている。電撃が走り、右肩が痺れた。

「なによ、五ラコスももたないじゃないの! このインチキ」

と低い声で青年をののしる。

「無茶いうな。こんな攻撃は計算に入ってないよ」

エリアを動けないとみたか、大帝は一気に跳躍した。押しつぶす気だ。影の動きでそうわかっても、エリアにはどうすることもできなかった。

スーツは剝がれつづけている。

——駄目か!?

空中の影がぴたりと止まった。

エリアは眼をあけた。

宙でもがく大帝の頭上にずんぐりした三つの影が停止していた。

うちひとつの手から細い鎖がでて大帝の翼のつけ根に巻きついている。

ヒューイと他のふたりだ!

歓喜のあまりエリアは立ち上がった。

「どこ行ってたのよ、このトンマ!」

「この少し先でござる。ダルタニアンもトレーラーもおります」ユーイの声だった。
「城の眼と鼻の先じゃない！ どうして助けにこなかったの!?」
「テレポートのショックで半重力装置が故障いたしまして。しかも、この城には地上の出入口がないのでござる。ハハハ」
「なにが、ハハハよ。早く、そいつを何とかおし」
「はっ。しばしお待ちを」
一礼するなり、何のつもりか、ユーイは大帝の前(?)へ移動し、手にした剣を高々とさしあげて言った。
「わが名はユーイ。そこもとが襲わんとした姫の従者にして剣士。ここに威儀を正し、決闘を申し込む――いざ、こられい」
「可呆」とヒューイがつぶやいた。
返事をするように大帝の触手が動いた。牙が爪が三人の「メカ」にとぶ。
鎖は食いちぎられ、三人はたちまち無数の敵と争いはじめた。剣が唸り、チェーンがとび、おびただしい手足がエリアのかたわらに降ってきた。
「へえ、やるわね、あの三馬鹿」
と地上で感心したのも束の間、触手の口から何やらネバネバした液体が吹き出されるやいなや、三人はそのままの姿勢でどすんと垂直に落下した。頭からすっぽり粘物質に覆われ、手足も動かせない。
「なにをする、この卑怯者。わが豪剣におじけづいたか」
あくまで元気なユーイの声にまじって「やんなっちゃうなあ」というヒューイのつぶやきがきこえた。
「わあ、ベトベトしていい気持」これはデューイだろう。
「この……」とののしりかけたエリアの頭上から妖魔の声が朗朗と降りかかってきた。
「仲々勇敢な従者だが、いかんせん、実力が違う。さて、いよいよお遊び抜きのとどめといくぞ」
エリアは茫然と頭上をふりあおいだ。
もう打つ手はない。このプロテクト・スーツでは、第二のコンビネーション・アタックには耐え切れまい。
ひょい、と眼の前に、ぽっちゃりした手がつき出された。白い錠剤をつまんでいる。
「？」
「呑みたまえ。さっき牢の中でつくったばかりの試作品だが、役に立つかもしれない。――早く！」
切迫したパラレルの声に押されて、エリアはそれを呑み込んだ。何も起こらない。
「さあ――お別れじゃ」
声を合図に、おぞましい口という口がぐっとそり返った。
次の瞬間、天地を揺がして叩きつけられる火と稲妻の奔流の中で、エリアが自分が、前以上に奇妙な服に身をつつまれていることを知った。
いや、それは乗り物だった。涙滴型の不透明コクピットがヒップまでをかくし、スラリとした二本の足は不恰好な脚部にはめこまれている。いつの間にか両手は操縦桿らしきものを握りしめていたが、それで操る外部の腕ときたら、楕円形の円盤の先に爪がついたみたいな、およそエリアの美的感覚とは遠い代物であった。重プロテクト・スーツだ。あの錠剤がエリアの体内でつくり出し、外部を覆ったのである。
「行け！」とスーツの蔭でパラレルが叫んだ。
エリアは地を蹴った。性能も操縦法も、すべて脳裡に叩き込まれている。
大帝は一瞬とまどい、しかし、たちまち迎撃にうつった。
三人分の半重力を消し去った粘液がコクピットを覆う。
「なによ、こんなもの」
右手のひとふりで、装甲外被が猛烈な分子振動を起こし、ネバネバを四散させた。そのまま、大帝の腹部へ突っ込む。触手がふっとび、胴体に大穴をうがって、エリアは空中に躍り出た。ふり向きざま――
「どんなものよ――あら」
大穴は、大帝の胴と同じ色の粘液で塞がれつつあった。強力な再生機能だ。
と、大帝の触手が、みるみるよじり合い、二本の太い腕をつくった。両方あわせれば、胴より太いだろう。
それは、旋回するスーツを真っ向うから打ちすえた。信じ難いパワーの打撃に、きゃっと回転したところへ、もう一本の腕が巻きついた。力まかせに締めつけてくる。
想像を絶する力だった。スーツが歪み、真紅の緊急灯が点る。
エリアは全出力をあげてスーツの腕を左右にはろうとした。数秒、怖るべき力くらべがつづき、スポッと音をたててエリアは青空の下に解き放たれた。
再び迫る腕。
「最後の手段よ、えいっ！」
スイッチ・オン。スーツの両腕がバンと空中ではたき合わされ離れた。手と手の間に空より青い円形空間が存在していた。
迫りくる触手と大帝へ、エリアはそれを投げつけた。
「ぎゃあああぁぁぁ」
大帝の叫びは巨体もろとも、その直径三〇ラン（三〇センチ）にも満たぬ異次元空間に吸いとられた。
「やっほーい。勝ったわ！」
小躍りするエリアは、次の瞬間、ただひとり空中に放り出されていた。今度のスーツは一ラコス(一分)しかもたないのである。
「きゃあぁ」と落下するエリアを、冷たい手が乱暴にとらえた。
「お前――ダルタニアン！ 治ったの!?」
「見ればわかろうが」
不愛想な声が言った。
「仲々見事な戦いぶりだが、いかんせん、乗りものが良くない。やはり、姫にはわたしが必要だな」
「なにさ、今ごろノコノコでてきて、この役立たず。今度出遅れたら、その場でお役御免だからね」
安堵の息をつきながら、エリアは強い口調で言った。
「ふむ――よい風ですな」
「そらっとぼけて、この」
操縦席に乗り込み、頭上のハンドルを引き下げて、エリアはやっと微笑を浮かべた。
地上ではパラレル青年が手をふっている。
これから先、何が待ち受けていようとも、力強い仲間がふえたものだ。
――でも、
あるかなしかの疑惑がエリアをとらえた。
――ひょっとしたら、あの男もまた、何かの力に操られて……
ここまで考え、しかし、エリアは首を振って青年に笑いかけると、ダルタニアンを地上へと向けた。
（完）

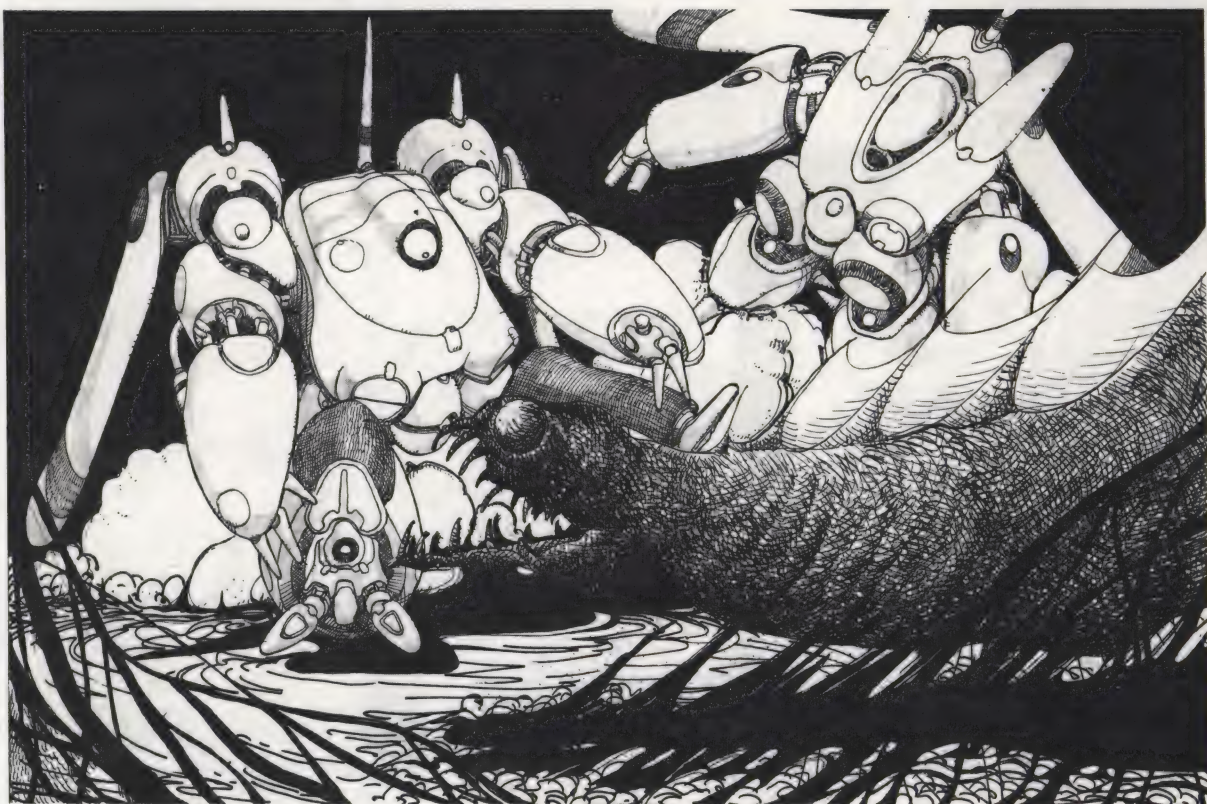
イラストストーリー・エリア

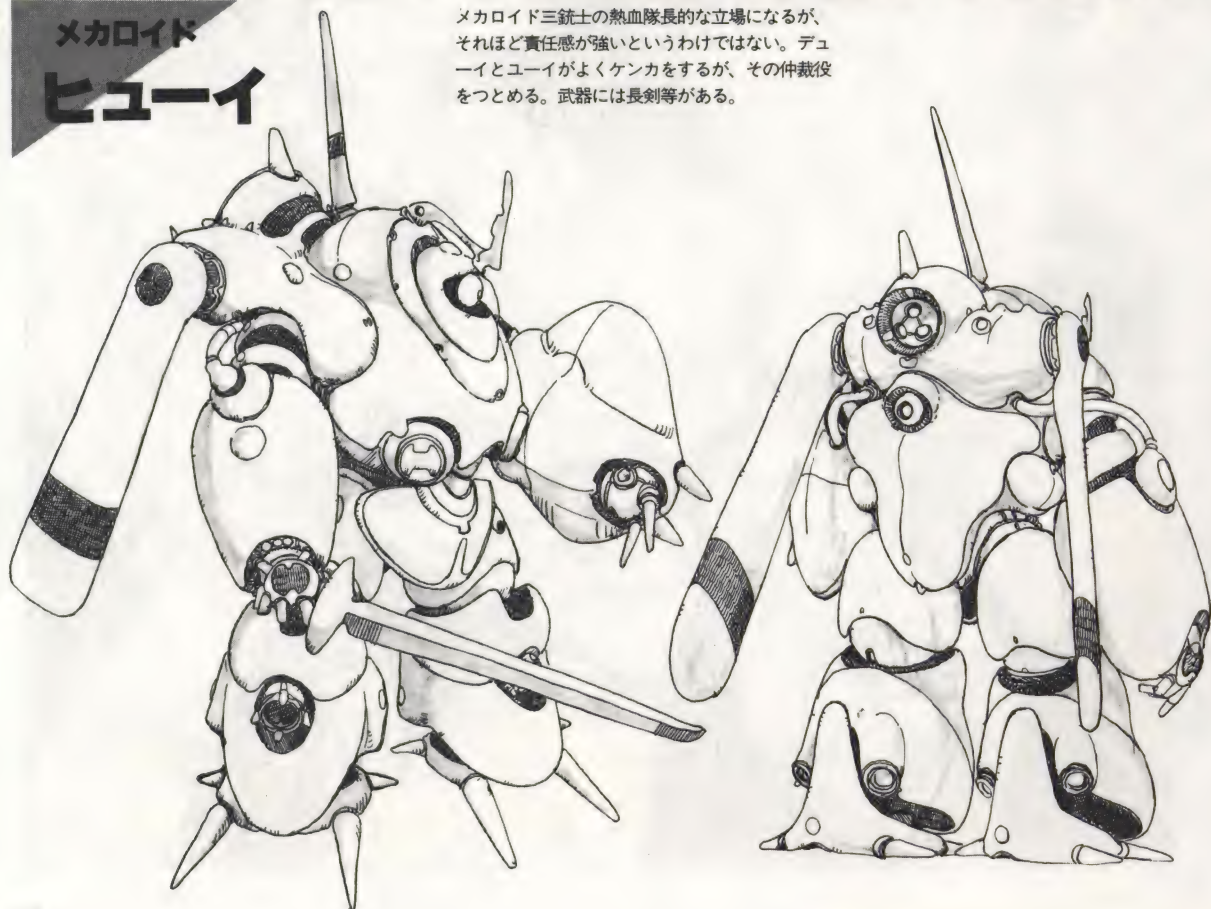
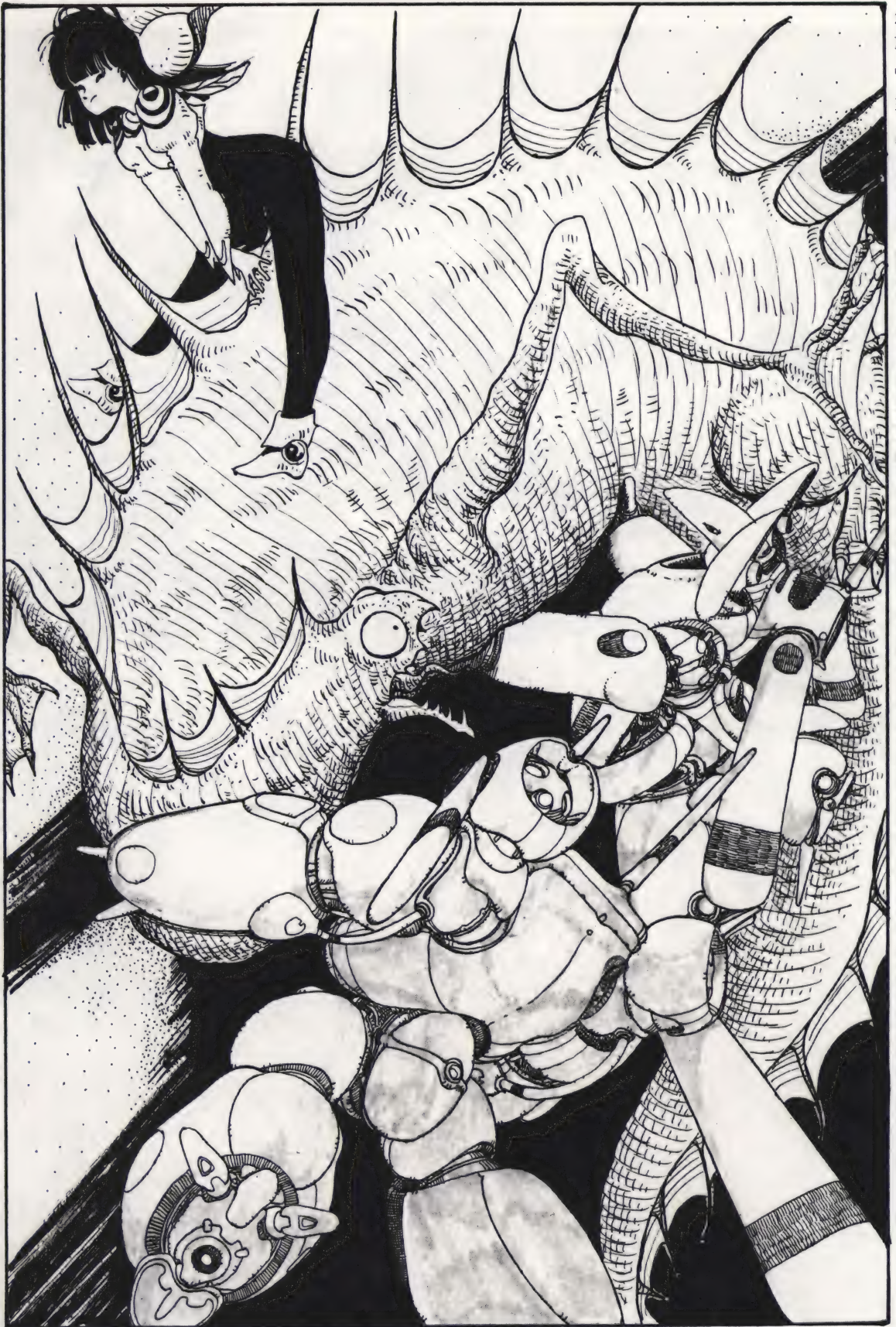
青い森の中を小柄な影が駆けていた。尖った両耳と金色にかがやく瞳から、デブネ族の少年と知れた。猫獣に似た少年の顔は、焦りと恐怖に歪んでいた。

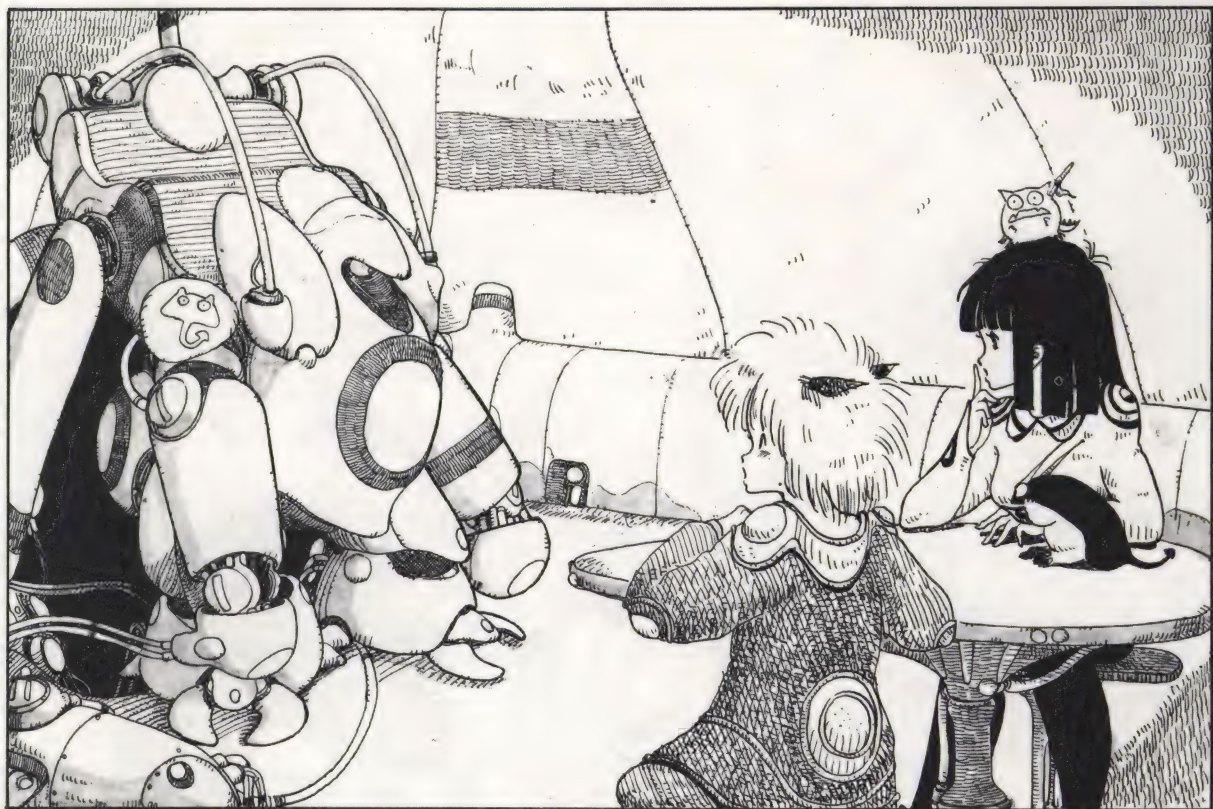
HAHAHAHAHA——風と木と沼が笑った。でられんぞ、ここからはえいきゅうにでられんぞ。「くそ——出てみせらい」少年は反抗の叫びを上げた。

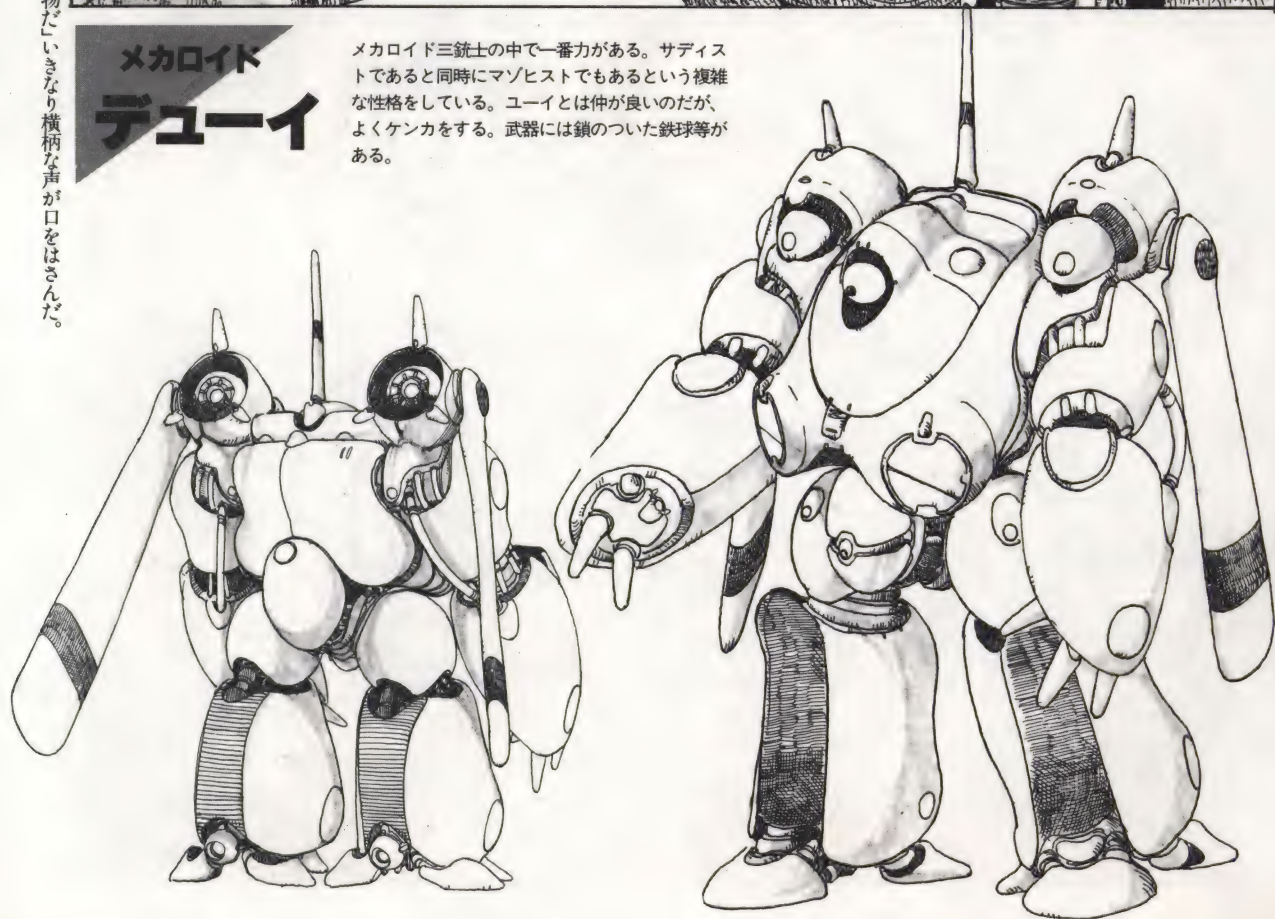
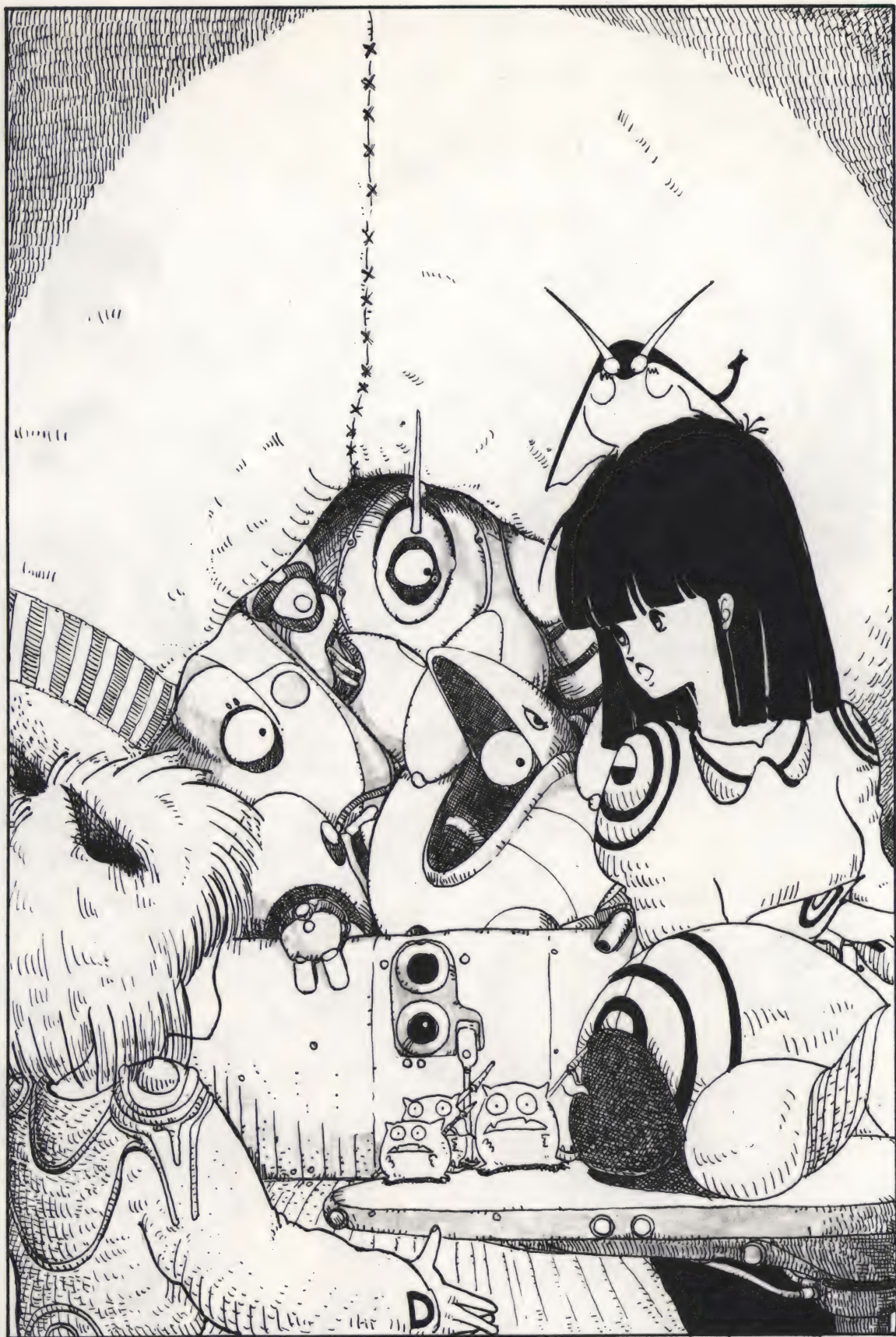
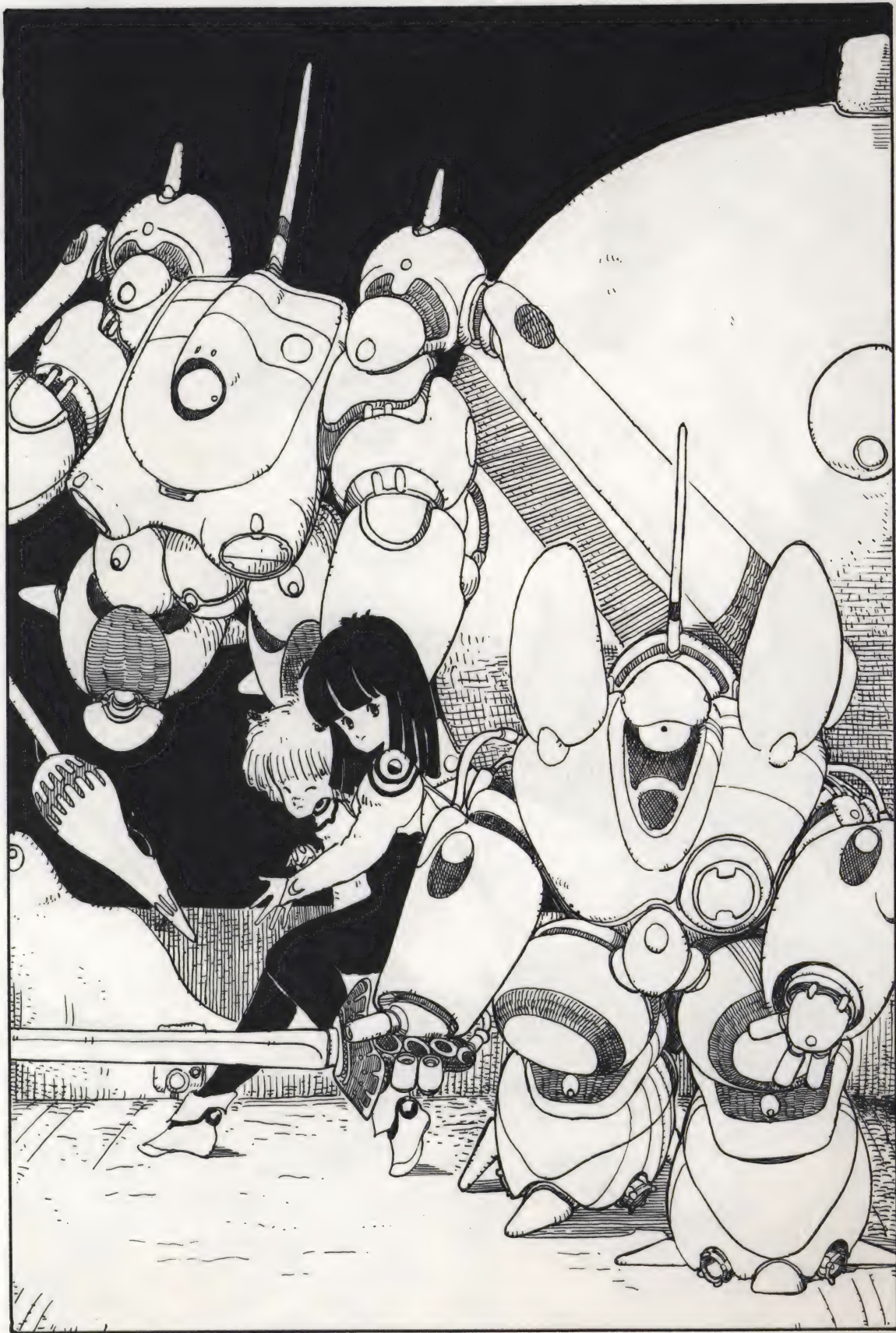
「ごめんね、気をしっかり持って」耳もとでやさしい声がささやいた。少年は、自分が愛苦しい少女に抱かれていることを知った。

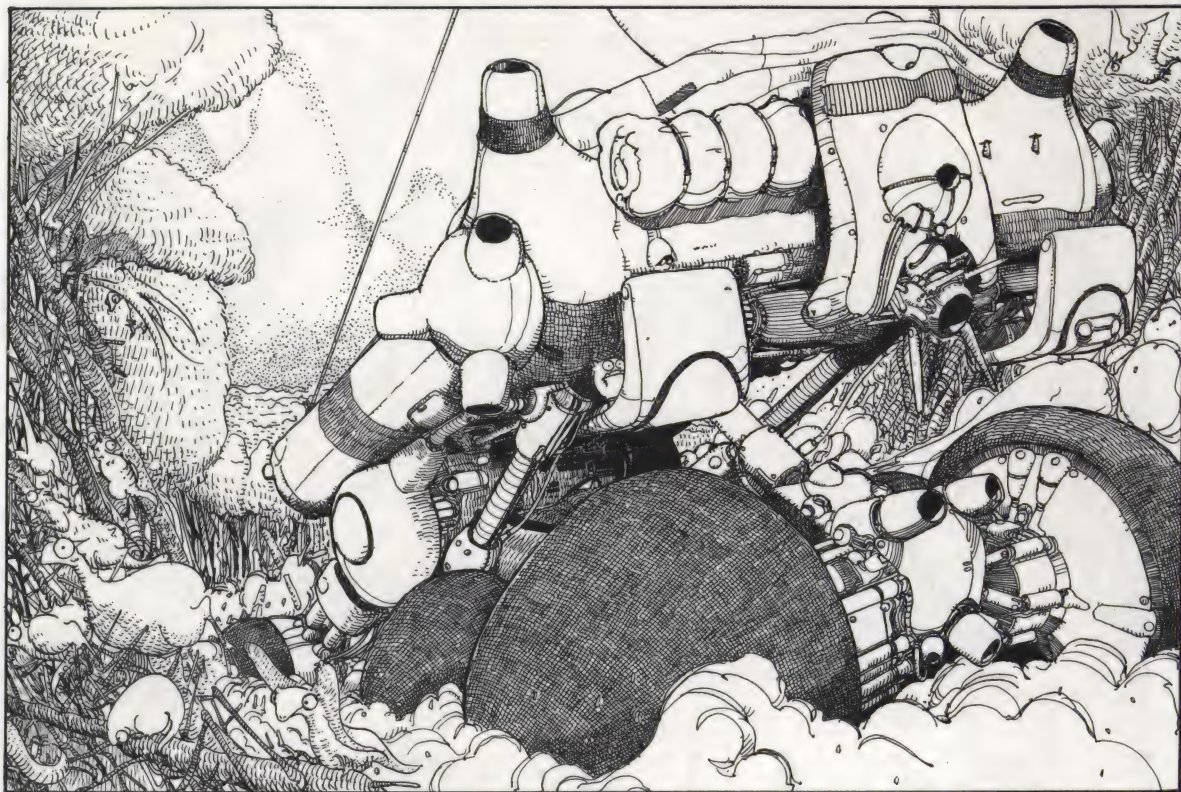
「馬鹿！今度はしっかりガードしてるんだよ！私は下の奴を追い払うから！」美少女は、少年をメカに手渡すなり、一気に急降下した。

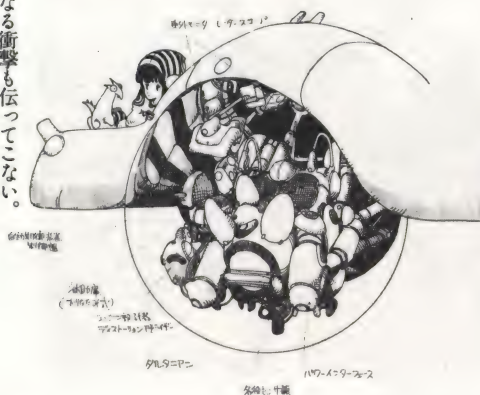
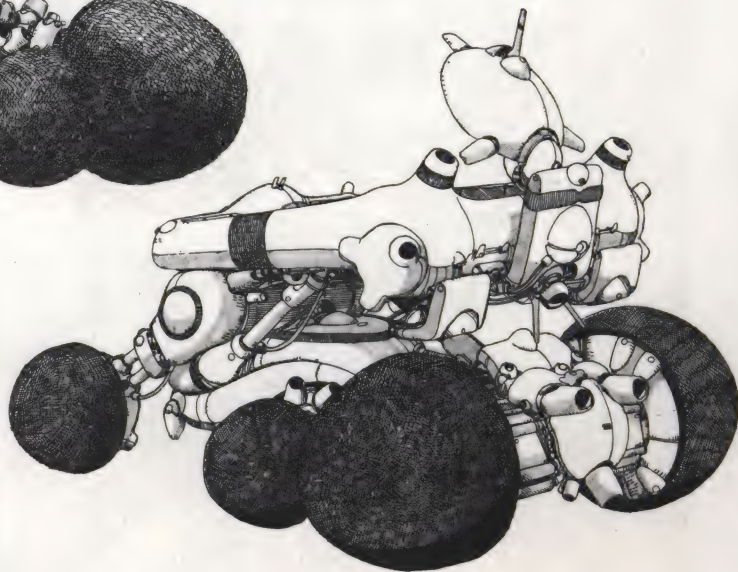
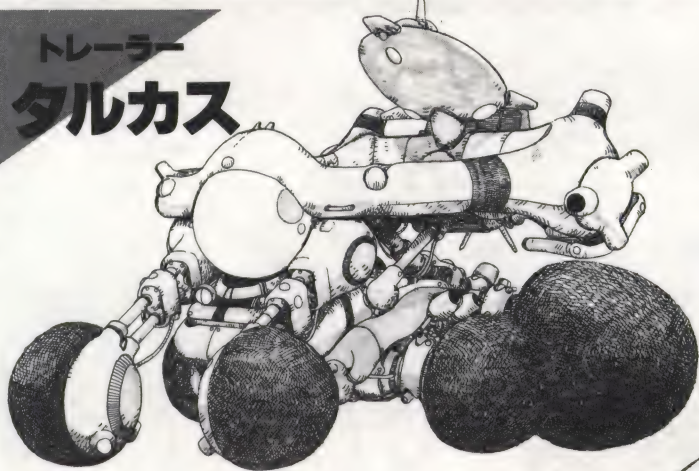
「デューイ、ユーイ!」かけ声にあわせたごとく、上空からふたつの影が水棲人の両脇へもぐり込んだ。

メカロイド
ヒューイ

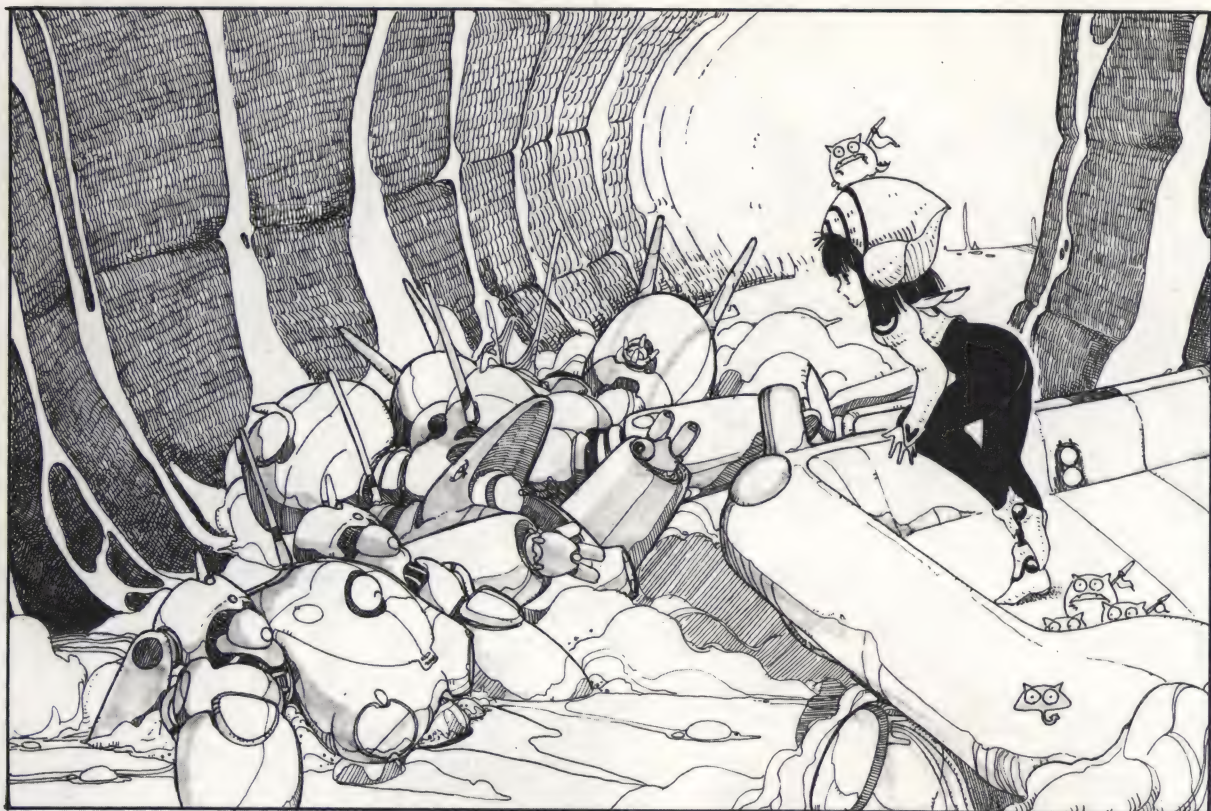
メカロイド三銃士の熱血隊長的な立場になるが、それほど責任感が強いというわけではない。デューイとユーイがよくケンカをするが、その仲裁役をつとめる。武器には長剣等がある。

「急上昇！」と少女が叫んだ。「ほほーい」間の抜けた声を、次の光景が帳消しにした。小さな三つの影が、六〇〇ダインの巨体をあっという間に空中へ持ち上げたのである。

「助けておくれよ」少年は手を合わせ、エリアは困った様な表情をつくった。——「寄り道は禁物だ」いきなり横柄な声が口をはさんだ。

メカロイド デューイ

メカロイド三銃士の中で一番力がある。サディストであると同時にマゾヒストでもあるという複雑な性格をしている。ユーイとは仲が良いのだが、よくケンカをする。武器には鎖のついた鉄球等がある。

「『メカ』ってね『メカロイド』の略なの。機械人間のことよ。——ちょっと、何、聞き耳たててるの!?」

無色透明の殺気が周囲に充満した。ふ、と少女の背後に長身の影が湧いた。

銀灯がはねとび、仕込まれた光粒子が霧みたいにとんで周囲を真昼に変えた。こいつは影に潜むのだ。

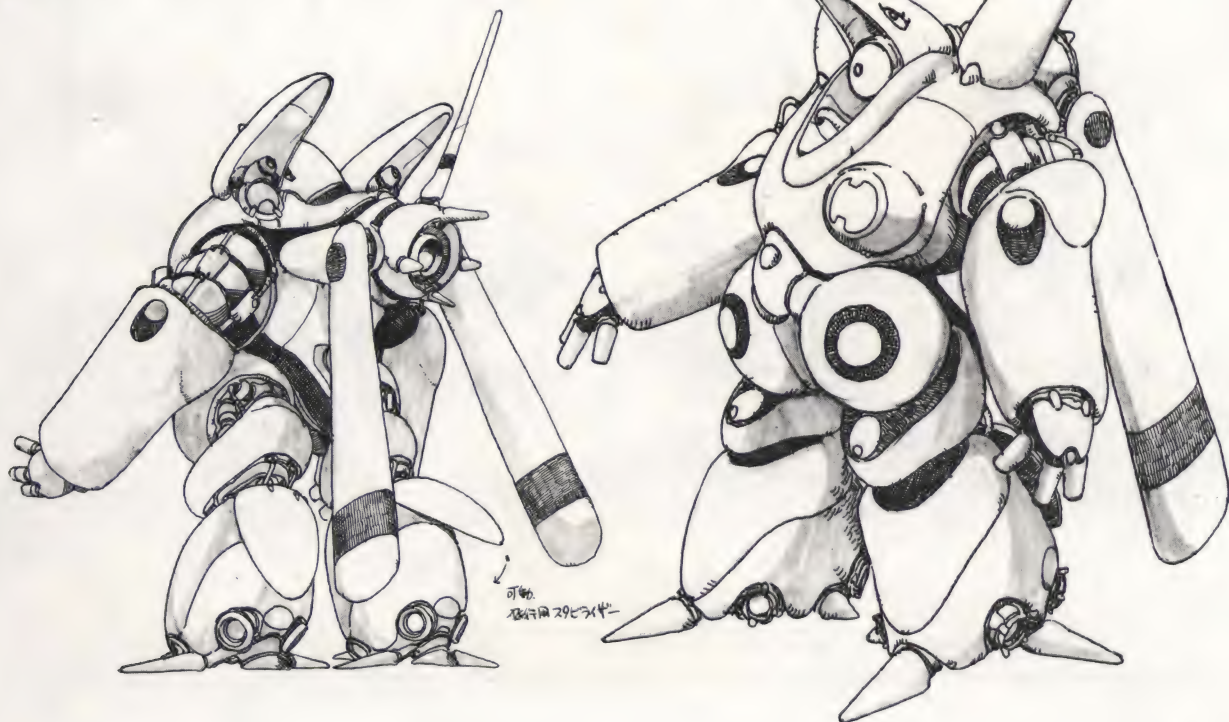
全長十八メートルの巨体は大きなボールみたいな車輪で樹々をなぎ倒しながら前進していくが、コクピットには特殊干衡装置で保護されているため、いかなる衝撃も伝ってこない。

トレーラー
タルカス

タルカスの操縦系は、ダルタニアンの背中のコクピットで行なう。全長18メートル。コクピットは特殊な干衡装置により、つねに水平を保ち、また衝撃も伝ってこない。エリアら一行が旅の足として使用している。

「あれを見て！」と少年が霧の奥を指さした。「洞窟だわ――よく見つけたわね。通れそう、ダルタニアン」

「この車は君の尻ほど大きくない。——ぐわわ、ビリビリ」「ざまあみなさい。以後、言葉に気をつけることね」

「やめなさい！」エリアが叫んだときは遅かった。次の瞬間、三人は地面に貼りついていた。

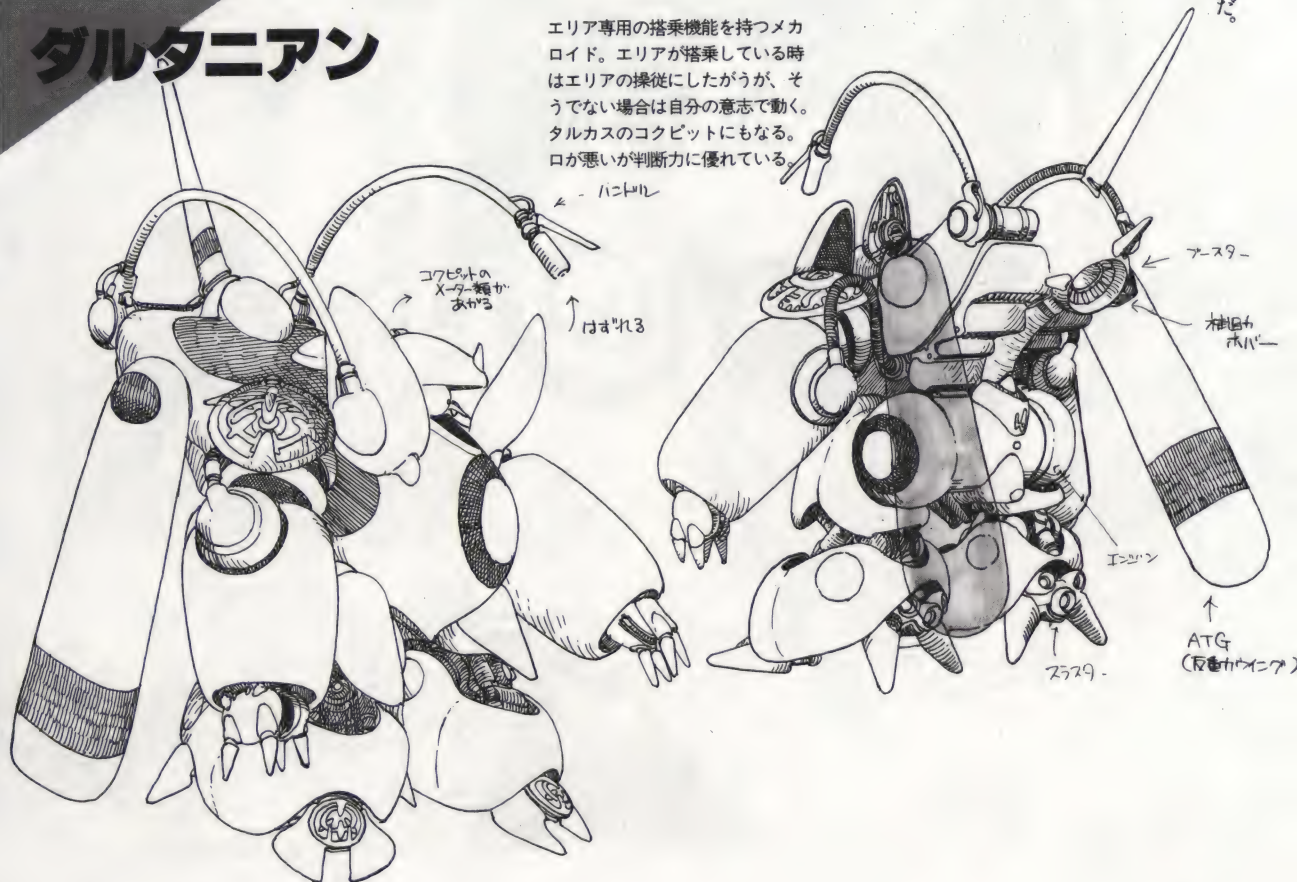
メカロイド ユーイ

フォルムからも判断できるが、メカロイド三銃士の中で最も飛行能力が優れている。肩の補助ブースター、足のスタビライザーが旋回能力を高める。知恵者で修理能力が高い。デューイとよく意見が対立する。メンテナンス用マジックハンドあり。

可動
飛行用スタビライザー

「なによ、——ただの口紅じゃない。恋人への贈りもの？さようなら」「待てってば、危ない橋を渡るにしても、身だしなみさえよくすりゃ死神も見逃してくれるかもしれないぜ」

「おかしいわ」つぶやきが洩れた。疑惑は決定的だった。この巨大な城内に、人っ子ひとりいないのだ。

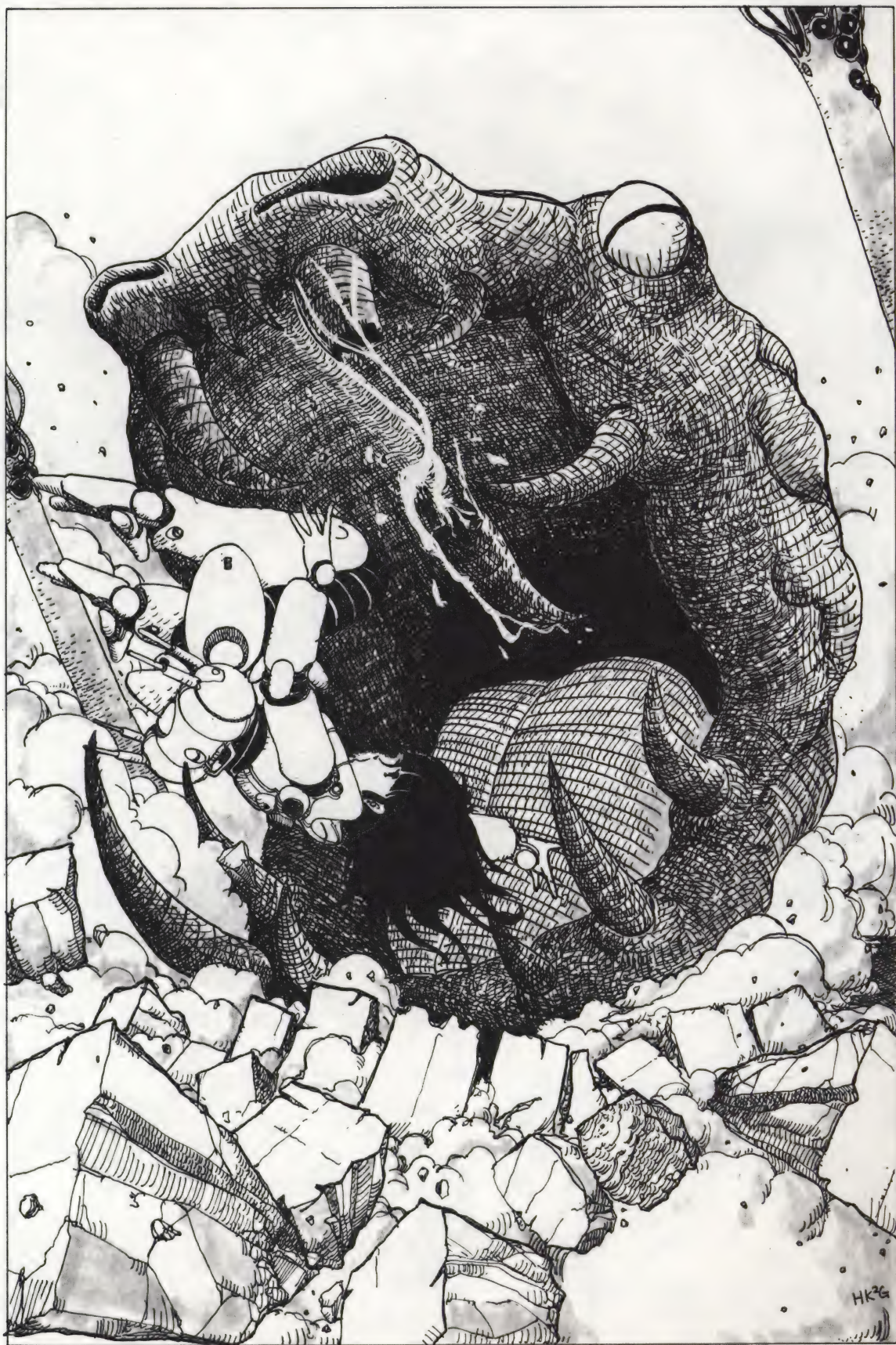
ダルタニアン

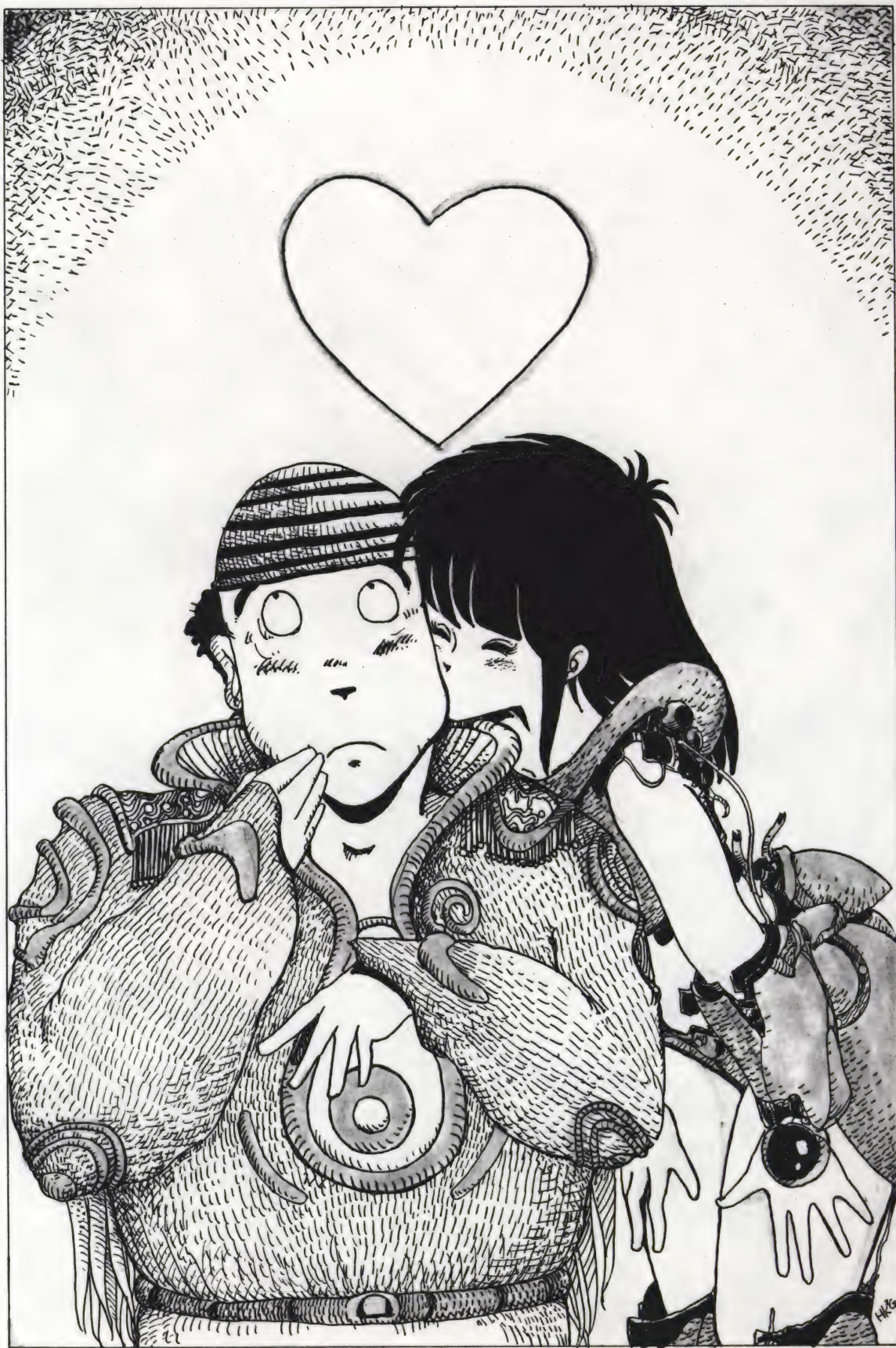
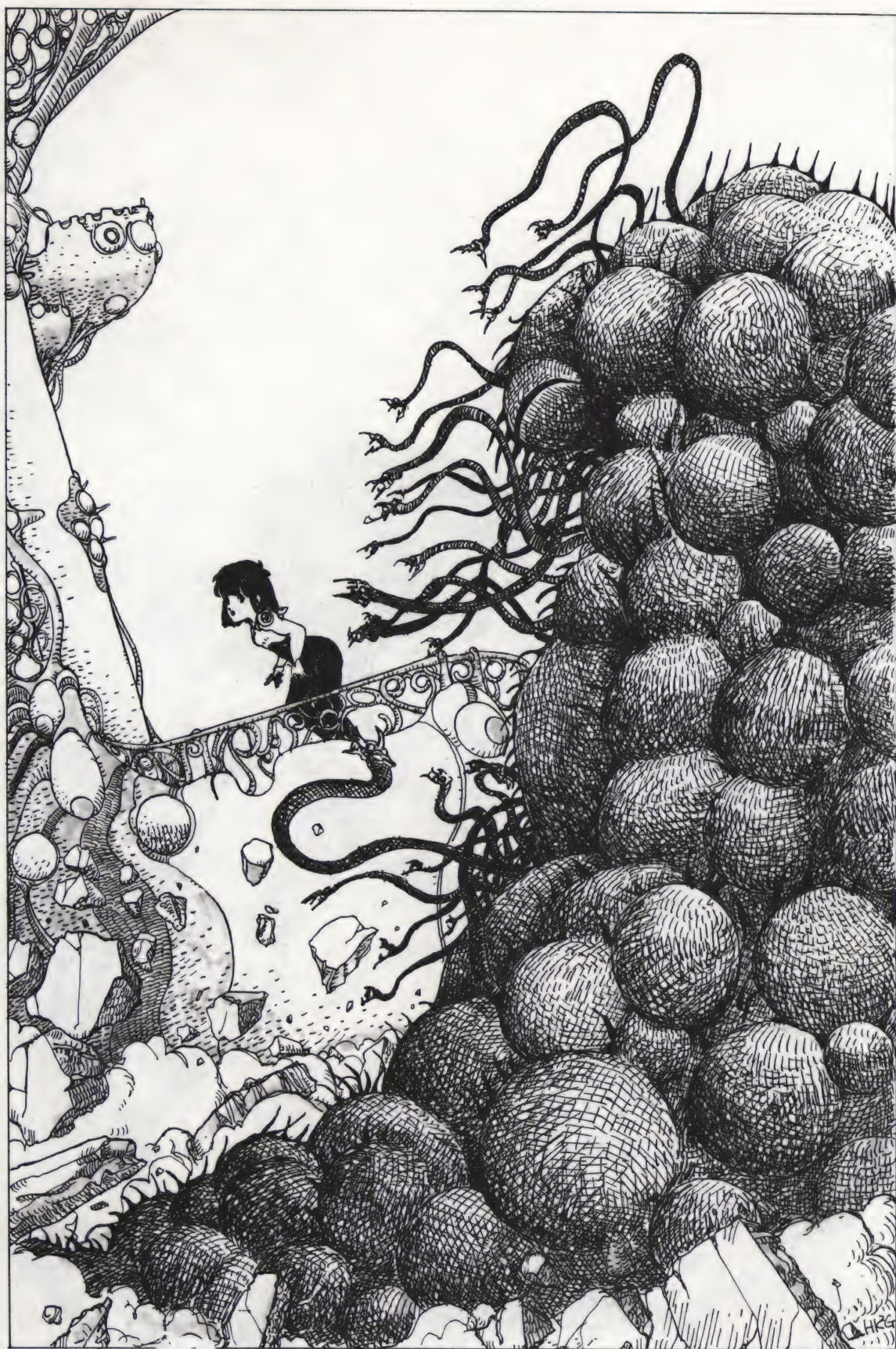
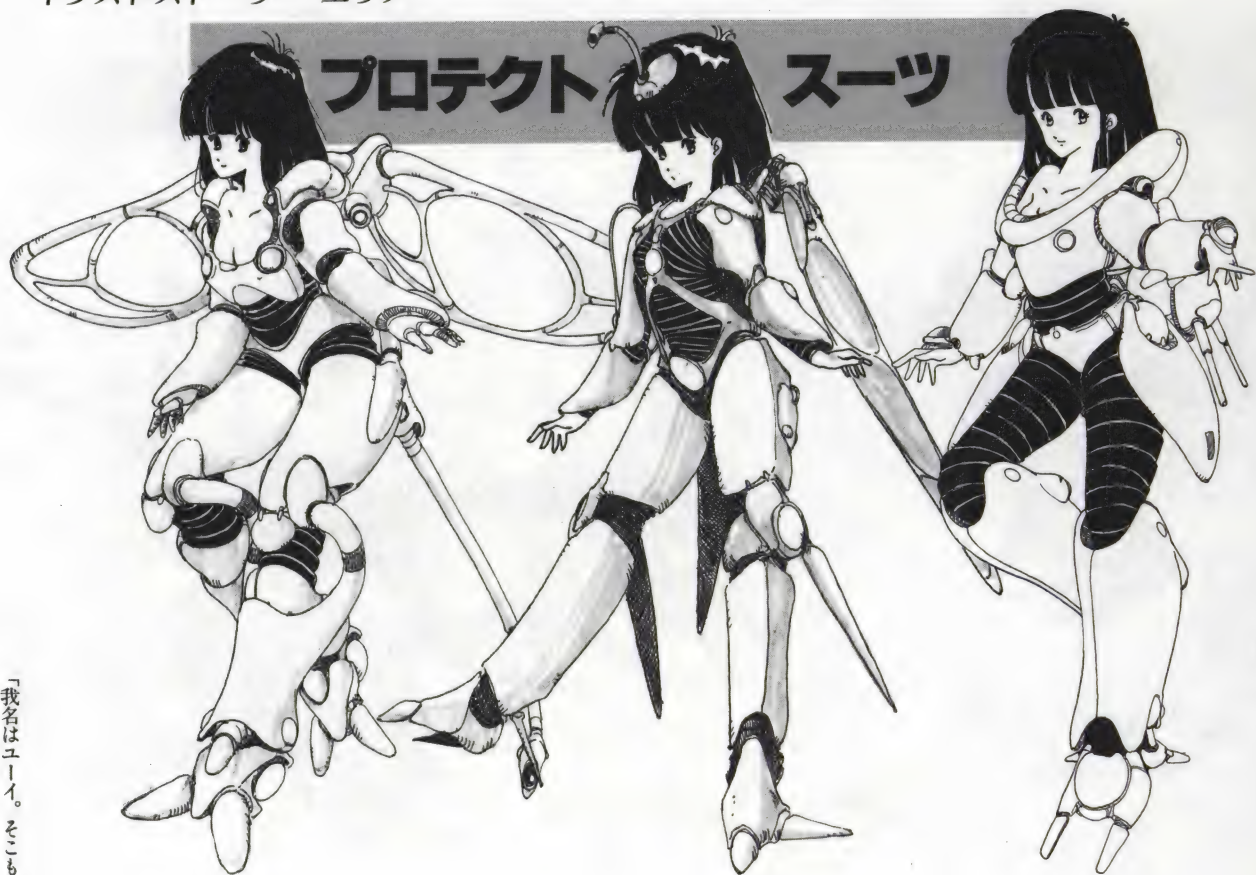
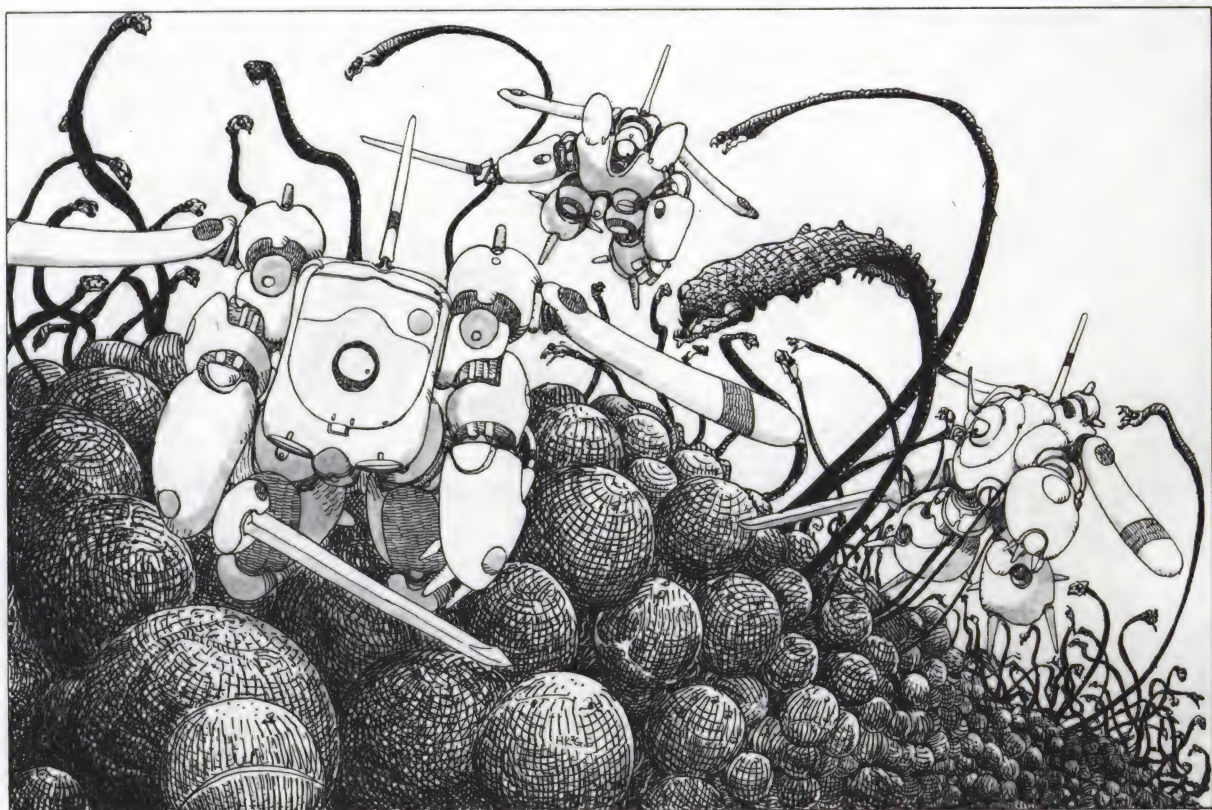
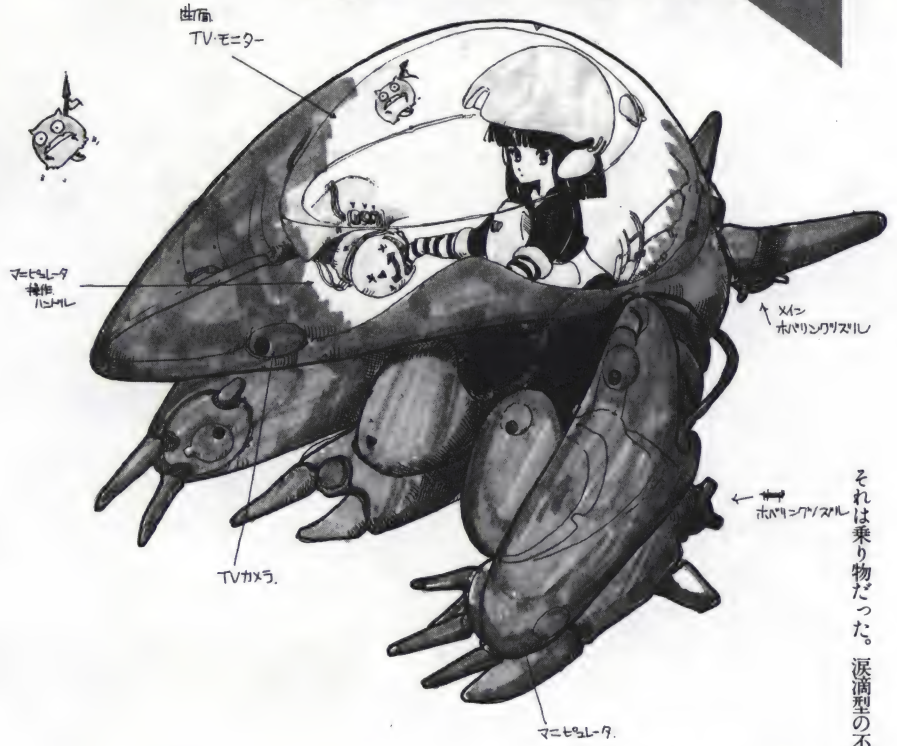
エリア専用の搭乗機能を持つメカロイド。エリアが搭乗している時はエリアの操従にしたがうが、そうでない場合は自分の意志で動く。タルカスのコクピットにもなる。口が悪いが判断力に優れている。

「ようこそ、わが城へ」ひときわ豪華な衣裳に身をつつんだ怪物が言った

足元の空気が鳴った。皮膚を裂く鈍い痛みにもめげず、エリアは二トロンも後方へとび下がり、空中でハンドガンを放った。

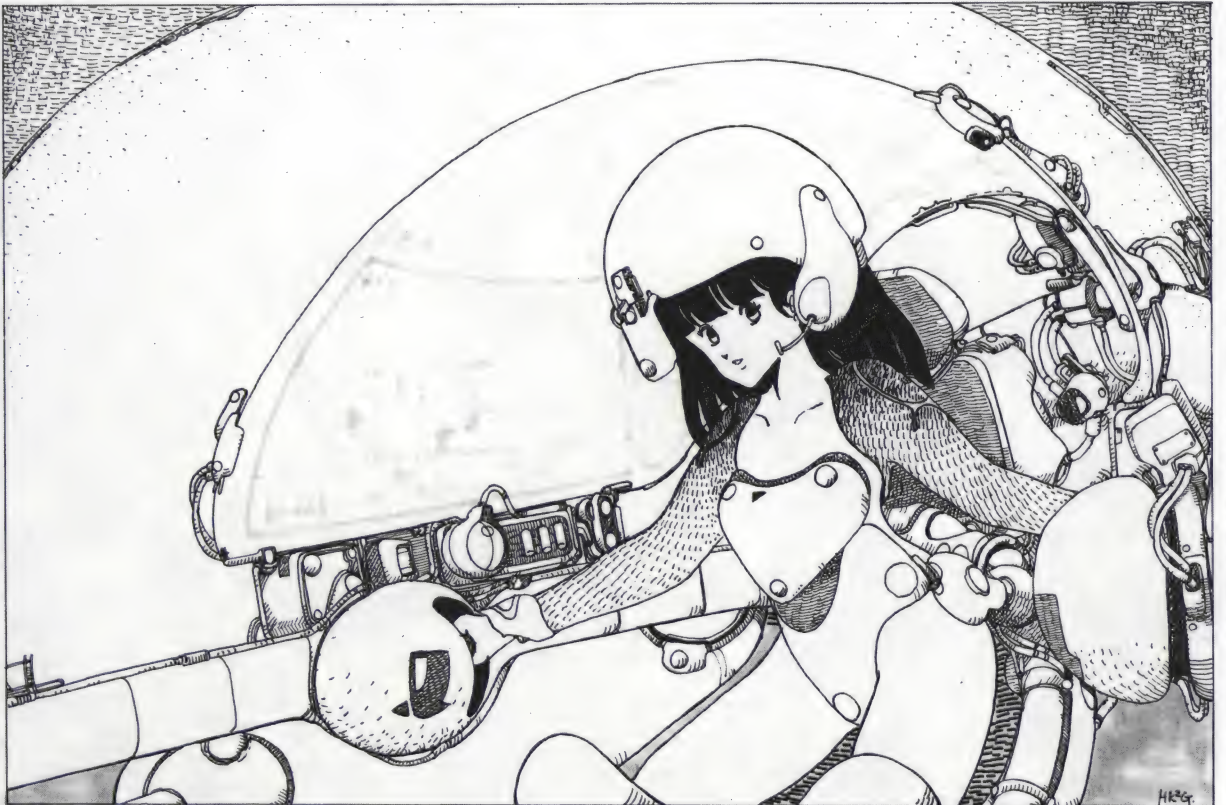
立ち上がろうとした足首を何かがつかんだ。影から突き出た黒い手が！「ドウス——ああん、卑怯もの！」

やだ！生きたい。——唇がひきつった——そう感じたとき、エリアの身体は真紅の光芒に包まれていた。

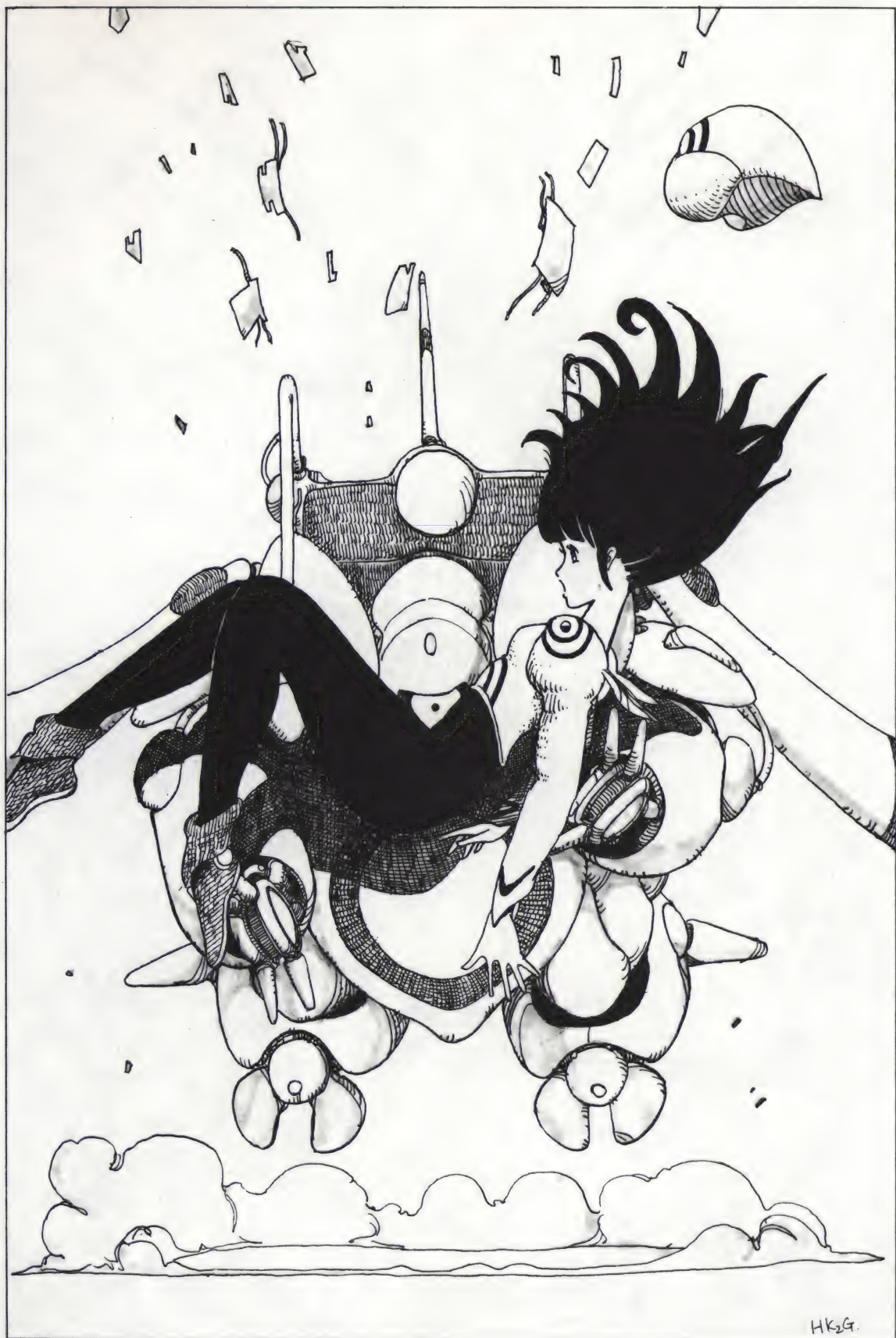
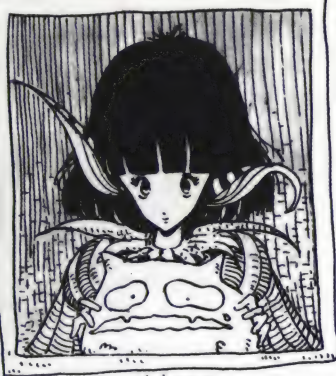
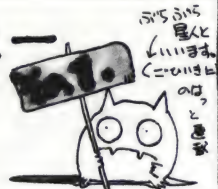
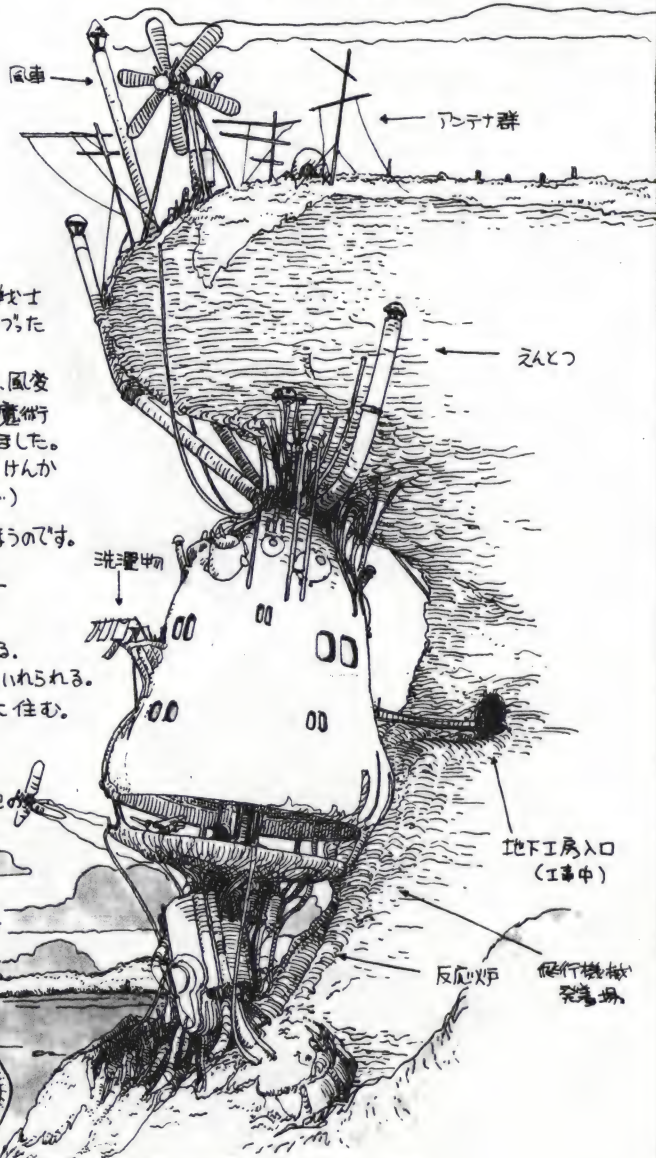
「えい！」右手の手刀を無雑作に叩きつけるひびが入った。二撃めでへし折れた。

スーツが剥れかけている。赤い破片が巻き起こる風に乗って舞った。「やだ、どうしよう、この役立たず!?

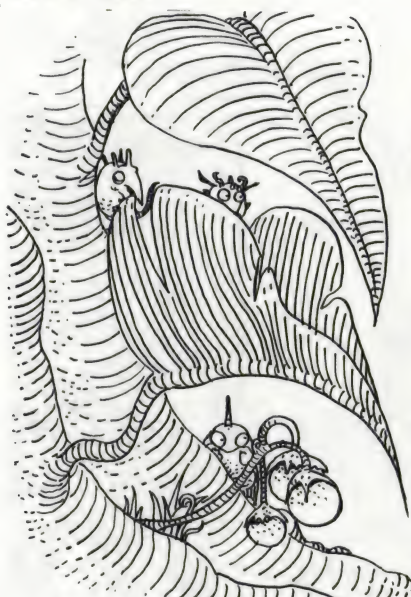
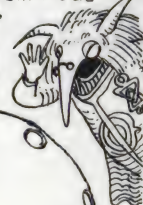
「心配してくれてうれしいわ──チュッ」

「なこと言ってられないわよ、ほら！」エリアが指さした方を見て、青年は青くなった。城壁の角を曲がって、とんでもない怪物が姿を現わした。

プロテクト スーツ

「我名はユーイ。そこもとが襲わんとした姫の従者にして剣士。ここに威儀を正し決闘を申し込む――いざ、こられい」「可呆」

重プロテクトスーツ

それは乗り物だった。涙滴型の不透明コクピットがヒップまでをかくし、スラリとした二本の足は不格好な脚部にはめこまれている。

曲面 TV・モニター
マニピュレータ 操作 ハンドル
メイン ホバリングノズル
ホバリングノズル
TVカメラ.
マニピュレータ.

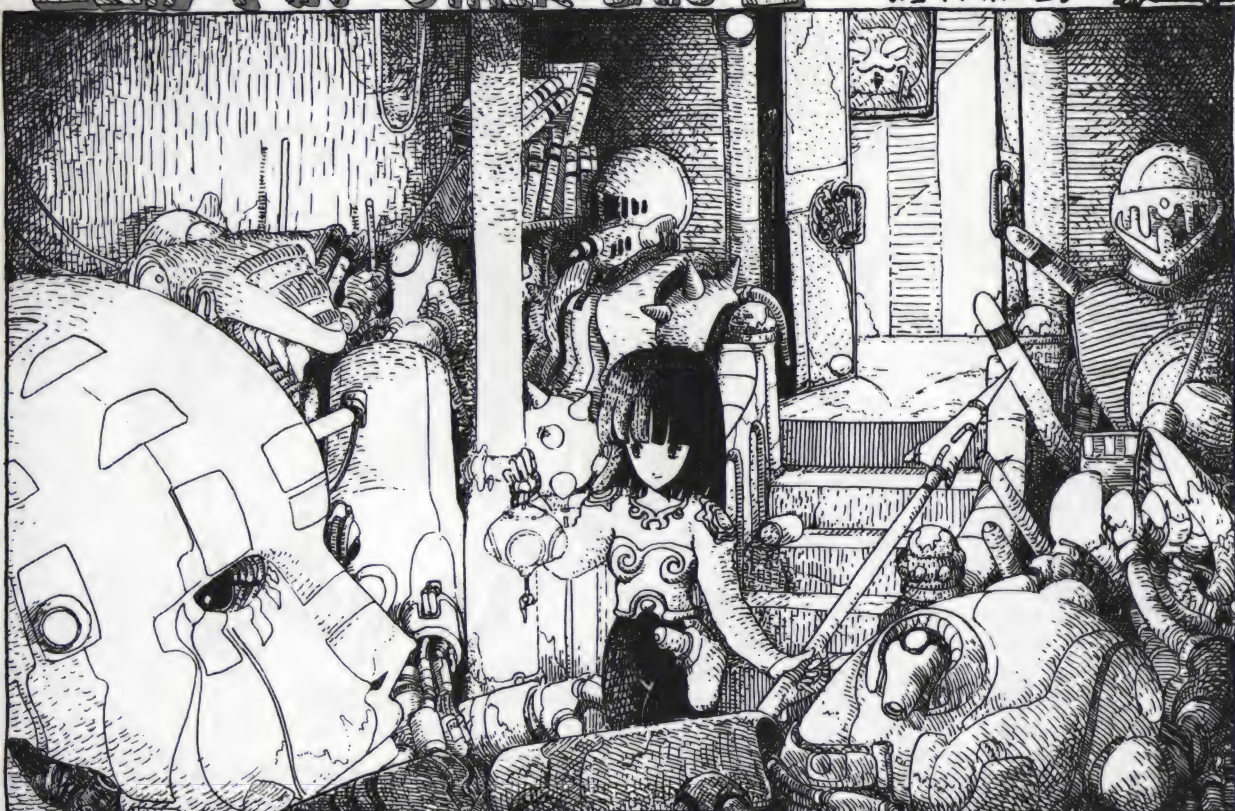
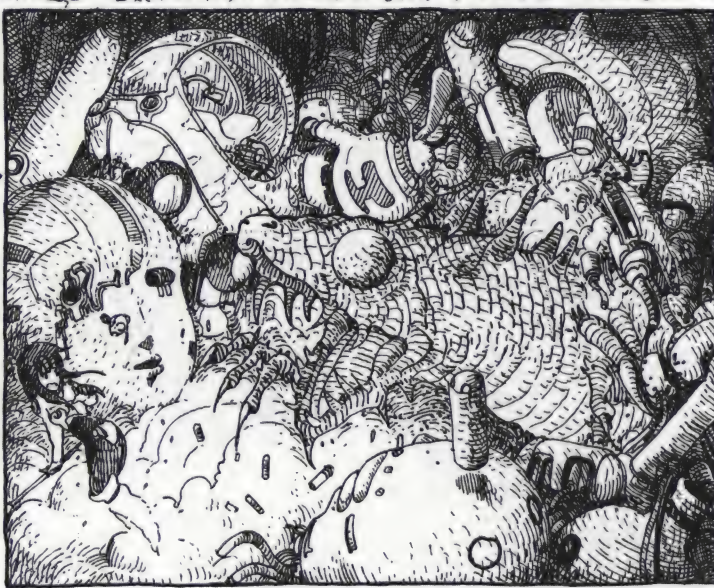
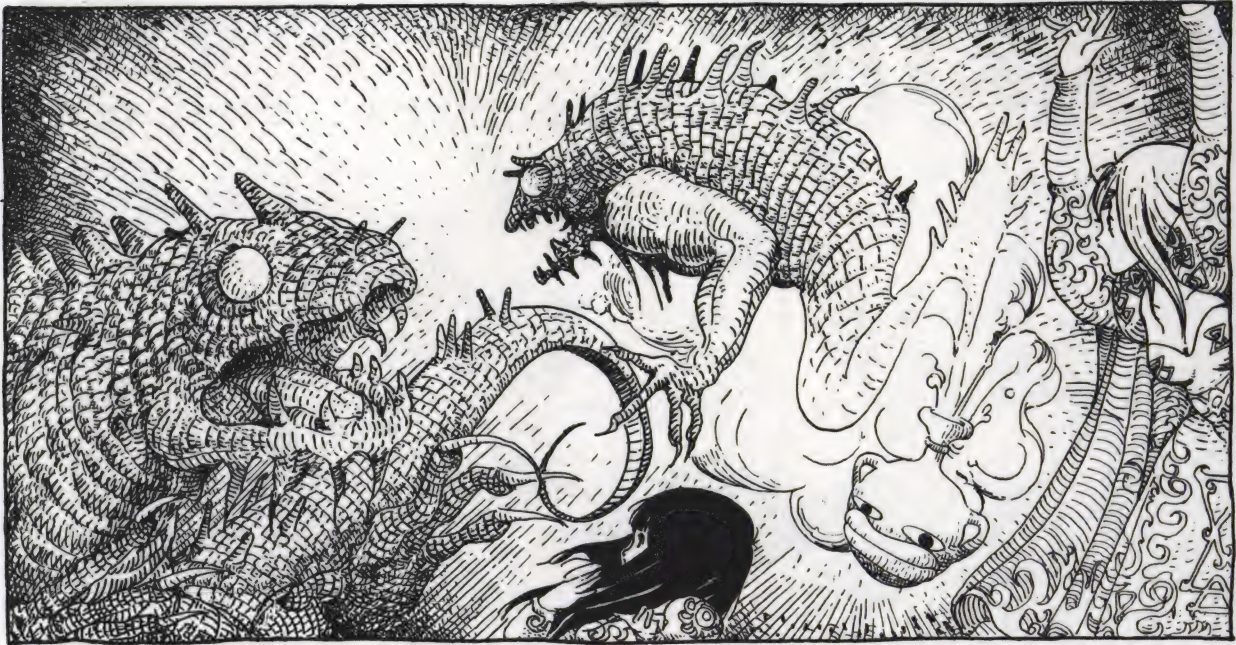
OMAKE

「最後の手段よ、えいっ!」スイッチ・オン。スーツの両腕がバンと空中ではたき合わされ離れた。手と手の間に空より青い円形空間が存在していた。

「きゃああ」と落下するエリアを、冷たい手が乱暴にとらえた。「お前——ダルタニアン！治ったの」

「ふむ——よい風ですな」「そらっとぼけて、この」

—夢幻境戦士エリア前史—
ELIA OF OTHER DAYS
その1.
ぶちぶら星人といいます。(ごひいきに)のはっと意訳
絵と文 ごとーけすけ
かとーしろゆき
エリア 幼少時代
(推定年齢6才)
これは、先月号まで、連載されていた夢幻境戦士エリアのエピソードより以前のお話を絵と文でつづったものです。
おおむね10年前、ペトリューシュカ公国のはずれに、風変わりな天才錬金術師イッペン・ログシィと桃色魔術を得意とするその妻サパーズ・ログシィが住んでいました。
2人は、錬金術と魔術のアプローチの違いからよくけんかをしていました。(実は仲がとても良いんだけど…)
そんな2人、実は、後に、エリアの育ての親となってしまうのです。
— ログシィ博士の輝かしい経歴 —
ペトリューシュカ歴
951年 走らない車を発明、学会で石をぶつけられる。
953年 飛ばない飛行機を発明、学会でケリをいれられる。
955年 学会をおわれ、ペトリューシュカのはずれに住む。そこで、異文明のスペースカプセルを発見
956年 スペース・カプセルを住居に改造
961年 無重力気泡の存在を発見し「無重力気泡の理論と実践」(980クレジット ペトリ出版)を著す。
965年 ペトリューシュカ公国に原因不明の戦が起こり、国を守るために、3体のロボットをつくる、後にヒューイ、ユーイ、デューイと名付けられる。
風車
アンテナ群
えんとつ
洗濯物
地下工房入口
(工事中)
反応炉
飛行機械発着場
ダーリン!
イッペン・ログシィ博士の家
不時着した異文明のスペースカプセルを再利用。
カプセル下部の機械は、異星人の反応炉らしい。
ログシィ博士が、地面から引きずりだし、ケリをいれたらかってに作動し始めた。作動原理はわからないが、
エネルギーの調節はできるし、なかなか重宝している(なにせ洗濯器から粒子加速器までいっぺんに動く)
現在の博士の社会的地位は、実は この反応炉の発見が大きな要因となっている。
イッペンログシィ博士とその妻サパーズ

ログジィ博士製作したところのロボット"ヒューイ・デューイ・ユーイ"が
こんなドタ足では速く走れないと不平を言い、いっそのこと飛行
能力をつけろとわめくので、ログジィ博士自慢の無重力気泡理論
を応用した反重力装置(AGD)を3体のロボットの背に装備しました。
しかしAGDはむちゃくちゃ不安定、おまけにロボットのポンコツ電子脳
に干渉するため、3人の意志に関係なく作動。ヒューイとデューイは、
AGDの反乱をもろにくらって地平線の彼方に
消えてしまい、かろうじて制御を保ったユーイは
ザボットの森に不時着。そこで、なんと
メサイアの葉にくるまってすやすや寝ている
かわいい女の子に遭遇。
ユーイ、びっくりした拍子に、いままで
必死の思いでコントロール
していたAGDのことを
すっかり忘れてしまい
制御を失なったAGD
は、大爆発!
女の子、とびおきて一言
「なによぉ うるさいわねぇ」
不安定な反重力装置(AGD)を装備させられたユーイ
ヒューイとデューイは反重力装置の異常暴走のため行ち不明、山の向こうで爆発音を聞いていらい消息をたってしまった。(どーなったのでしょうねぇ)
ドギャッ
グワッ ギギギッ
バキンッ
なんとっ
すや すや
あなたぁ もうねましょっ!
はて? あいつら どこまで 行ったかな
ドカーン ドカーン

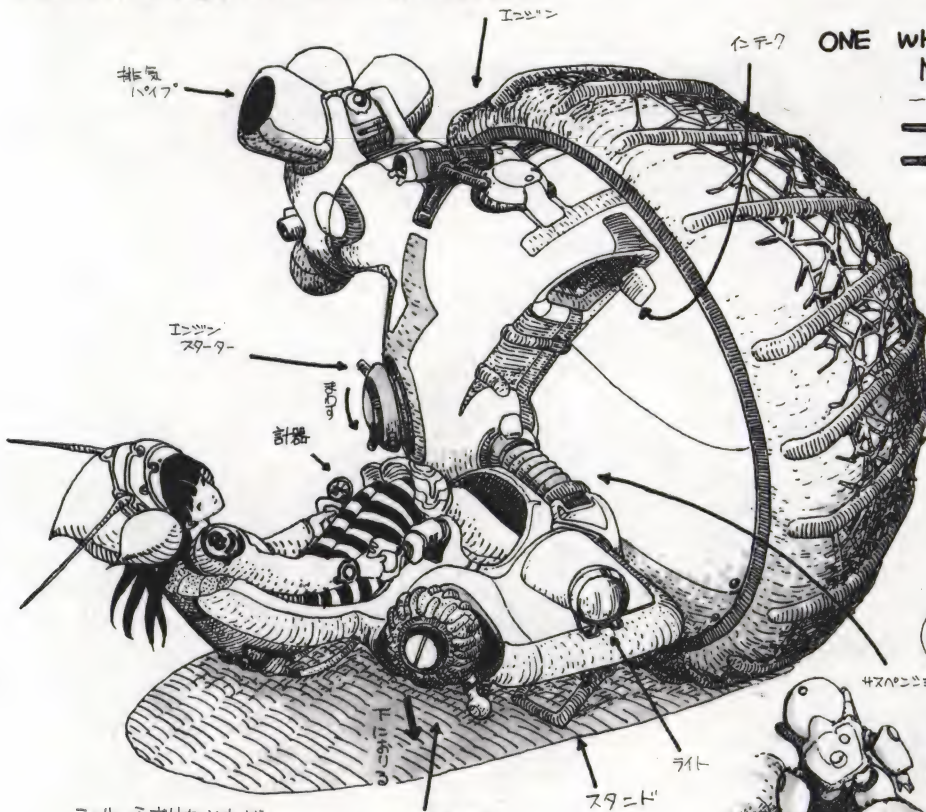
−夢幻境戦士エリア前史−
ELIA of other days その2
まあっ
絵と文 ・ごとーけーすけ ・かとーひろゆき
あれまっ
・さて、前回、ユーイにひろわれたエリアちゃんは、ログッィ夫妻にかわゆく育てられ やたら元気な女の子に成長しました。
今回は、エリアと、それをとりまく世界を思うままにかいてみました。(なんて、いいかげんなんだ。)
・エリアちゃんは、小さい時から、ガラの悪い女の子でしたが、育て親のサバーズさんはさらにガラが悪く気の強いオバサンなので、その影響をもろにくらって
現在に至ってしまいました。
空間あなうめ星人
小さい頃のエリアちゃんは、耳が大きく、羽が6枚もあるかわいい女の子であった。
そして、大きくなったエリアちゃんは、大きかった耳も小さくなり、羽もとれて、女っぽいねーちゃんに成長したのであった。
すごいわっ
エンジン
ほらっ こんなに小さくなってしまいました。
チェーンがまわる。
・チェーン・スウォード
(電気のこぎり型の剣)
なかなか、こわそうでしょう。
後のヒューイ、デューイ、ユーイの武器となります。
小さい時、取れてしまった羽を自分の服にぬいつけている。
お気に入りのドラゴン・ルック。
・チェーン・スウォードでヒューイらを相手に、剣の練習中。
女だてらに…なんて言ってはいけないよぉ。
なんだ、こいつは…
たて
エリア 8才
エリア 17才
かわいそうなロボット達の絵
涙なくしては見れない。
・かわいいエリアちゃんを養女にむかえることになってもそんなことは、おかまいなしに博士のAGD飛行実験は続く。
VOOOOOOOO…
うわ〜 ごめんなさ−い…
駆動トルク1.5
重力フィードバック−2
失敗！
AGD試作品36号
だいじょぶよぉ
←ふるえている。
AGD試作品37号
AGD試作品35号とヒューイ

いってきまーすっ
メンテナンスハッチ
歩行用ジャイロ・スタビライザー
エンジン
・エリアちゃん用おでかけメカ
「ボヨヨン」
ログジィ博士製作
・なかなかかわいいでしょ歩行メカです。
• デューイ に 積んである 電子脳 の お話
機械系の 動作制御は 高速度の ポジトロン電子脳 が行なう が 思考制御は 短絡思考 型有機体コンピュータで 構成されている ので、非常に 人間的で かつ 性格 がメチャクチャである。
しかし、マゾなんてえ 性格 はどーやって 形成されたの であろうか。
球体バーニアは、安定性は良いけど 機動性がおちる。このような航空兵器では、安定性というのは 欠点となるらしい。
よーするに、静的安定マージンが 負である 機が良いということに なるけど、別に どーでも よいことかな、こんなこと♪
だから、ログジィ博士は、これをボツにしたのだ。
だめー
デューイの秘道具？
手の部分が、びろーんと のびて、相手をべしっと たおす。
どぴゅっ
インテーク
ブースター
球体バーニア
球体の高速回転により、浮力を生じる。
浮力が生じてホップする。
ボール
回転
進行方向
これと同じ原理です。
実際 この原理を応用した 飛行機が 開発されているらしいけど ほんとに飛ぶかは しらんけど ねえ
・こんな 小さい 球体が いくら はやく 回転しても デューイを もち上げる ほどの 浮力が えられるかと お考えの 読者の みなさま 多分 あたりです。
でも 要は 雰囲気、らしければ 良いのです。
FRONT
初期型 デューイ
BACK
つづく。 ごめんね…

夢幻境戦士 エリア前史

ELIA IN OTHER DAYS II

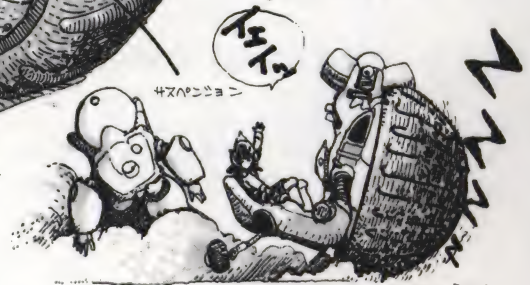
後藤 啓介と加藤洋秋のゴキブリページ。

きょうは、博士のいいつけで、エリアちゃんは 倉庫のそうじをしなければなりません。この倉庫は 博士の失敗作や、昔、研究を打ち切ったものなど わけのわからんものが いっぱいつまっていて、たまにごとごと音がしたりして、非常に気味の悪い部屋です。案の上、はいってみると 顔だけのロボットの目がギョロっと にらんだり、バンダイのプラモデルのつくりかけが けたけた笑ったり、とても生きた心地がしません。突然、ガラクタの中から 不細工な顔をした BEMが眼前におどりでてきました。プラモデルをヤスリでけずるような エリアのさけび声が 部屋をふるわし、手に持っていた ハンディライトは宙に投げだされました。部屋の近くで、料理をしていたサパーズレディは、このさけび声をきいて、焼きかけのパンケーキを 博士になげつけ大急ぎでエリアを救いにかけつけたのです。部屋につくやいなや、サパーズレディのオーラ・エネルギーは 頂点に達し 空気中の 分子がイオン化し、それがプラズマを つくりだし、その(K)

◀りりしいサパーズレディさんの図

▶BEMになぐさみものにされそうになるエリアちゃんの図（貞操の危機か!?）

エリア前史

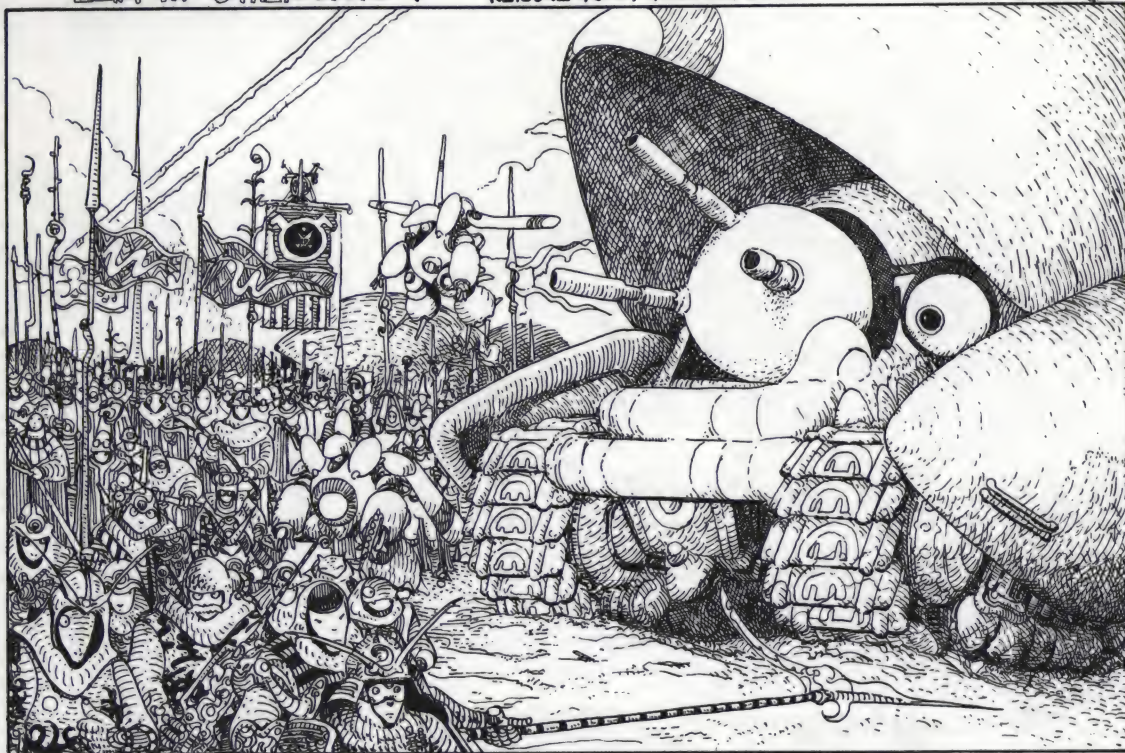
(※)プラズマに反応したピンクのつぼの中からピンク・ドラゴンが実体化。彼女は、高笑いをあげながら狂ったようにピンクドラゴンをあやつり、あえなくBEMはガラクタの中。彼女は、エリアがとめるまで、BEMを撃退したのにも気がつかず反狂乱(こわい性格)それを見ていた博士、パンケーキをたべながら一言「科学が魔術を越える時代は遠い」とつぶやいておりました。こーゆう両親に育てられたエリアちゃんの運命はいかに‥ がんばれエリアちゃん。

ONE WHEEL MOTERCYCLE
一輪バイク
ゴロンゴ

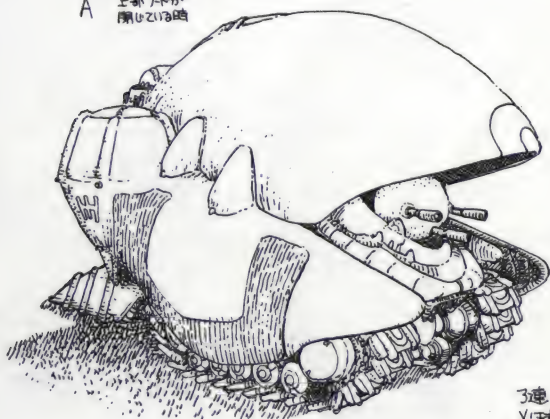
エンジン
インテーク
排気パイプ
エンジンスターター
まわす
計器
サスペンジョン
ライト
スタンド
下におりる
補助輪(練習用さ!)

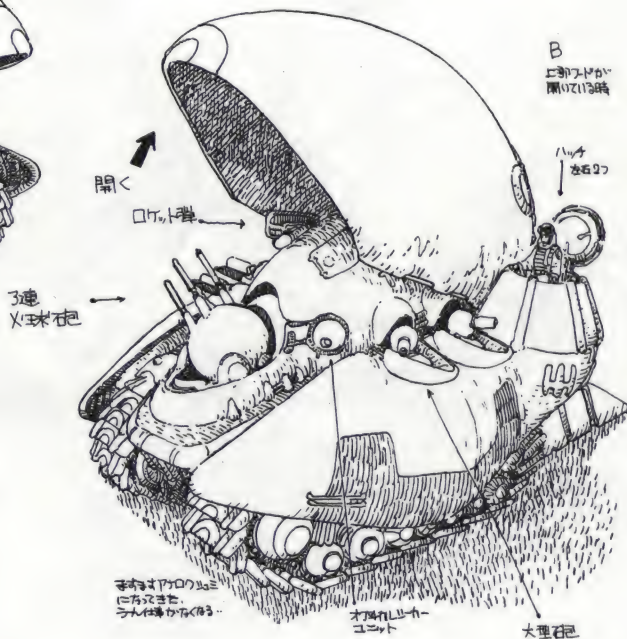
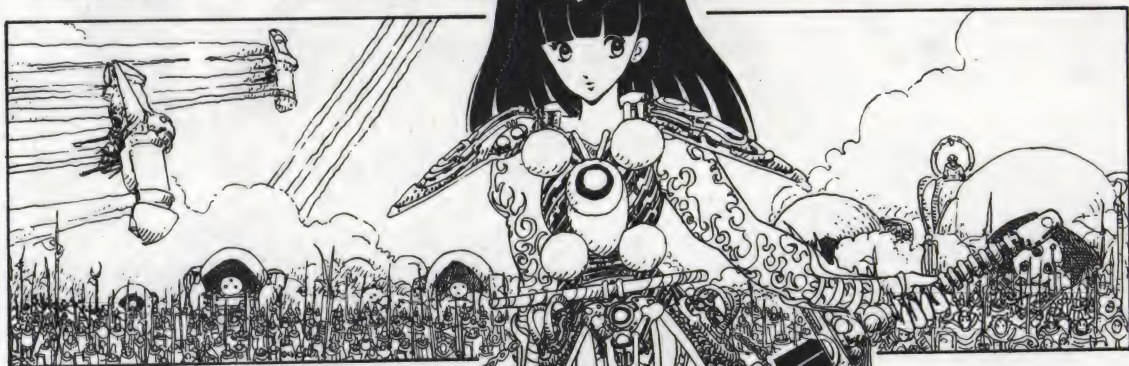
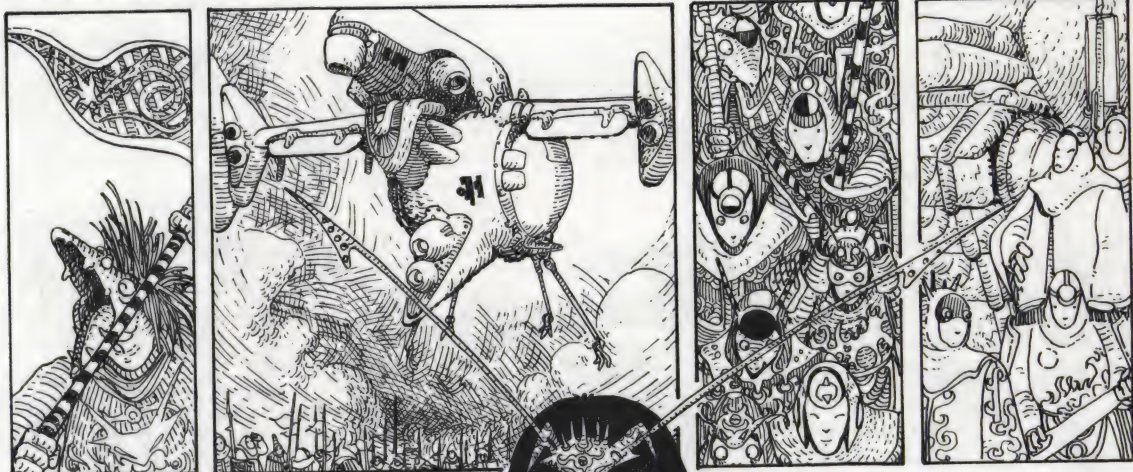
・コブシィ博士が数年前試作したものを、エリアちゃんが物置きの中からひっぱりだしてきたもの。
ジャイロスタビライザーの調子が悪く、走行中すぐころぶので、博士がうっちゃっておいたのだが、エリアのおかげで修理するはめになった。
しかし、スタビライザーの調子はそのままなので、運転には相当の熟練を要するので練習用の補助輪がついている。
まあ10日もすればば補助輪なしでうごかせるでしょう。

イエイッ
Z Z Z

・ヨットを操る感じでやると、うまく上達するのである。

こーゆーふざけたメカが好きです。これで女の子がぐわんと走るマンガが描きたいもんだ。

KEITSUKE GOTO, HIROYUKI KATO

↑ ペトリューシュカ軍 総合演習

平和なペトリューシュカには最近まで軍などというものは存在してなかったが、物騒なことの大好きなログツィ博士が火つけ役となり今に至る。

ペトリューシュカ軍 主力戦車 アルマヅ

内身は、ログツィ博士自慢の高度なメカニックであるが、外身は、遊園地ののりものを改造。もともと丈夫にできていたが、さらにセラミックの複合構造に改造している。尻尾は、そののりものの名残りである。　　5人乗り。

ペトリュージュカ戦記
もともと軍隊のないペトリュージュカ
では、軍人などというものは
まったく存在しなかった。
わずかに国王の側近の兵らしき者はいる
が、昔からの古風なヨロイをつけたほとんど
マスコット的存在であった。それが数
年前、異の者が北方から突然おそって
きたのだ。彼らは、ペトリュージュカ国の人々と
はまったく異形の者で、異なる力をもって
この国を征服しようとしたのである。
しかし、この時学会から村八分に
されていたログジィの製作した
機械生命体ヒューイ、デューイ、
ユーイによって国はすくわれ
たのであった。この機会に
国王は、軍の編成を決意し
ペトリュージュカの人々は、国
を守るために自ら兵に志願
した。みんなかってな軍装をし
ているのはそのためである。
(中には八百屋のおっさんもいる)
して、軍は成立した。ほんとかよ!
うしろではたをふって志気を高めているのは
いうまでもなく、イッペンログジィ博士なの
である。カゲキなおっさんでした。
エリアちゃんも、ダルタニア
ン達と供にタルカスにの
りこみ、独立部隊として
旅立つのであった。
ダルタニアン

ドはドドラゴンのド
作詩・作曲
加藤洋之
後藤啓介

ここからは、
歩いていかなきゃ
だめかしら。
よっこいしょ

ちょっと
暑いね。

だんな
んっ

バタバタバタ
アホ
アタッ

もしもし
イタタタッ

ドの音出してください。

お〜いドの音だ！

オホッン
シュー

音圧を利用して降りるのよ。

おっと
いてっ

ここらへんに周波数の減衰がみられるわ。

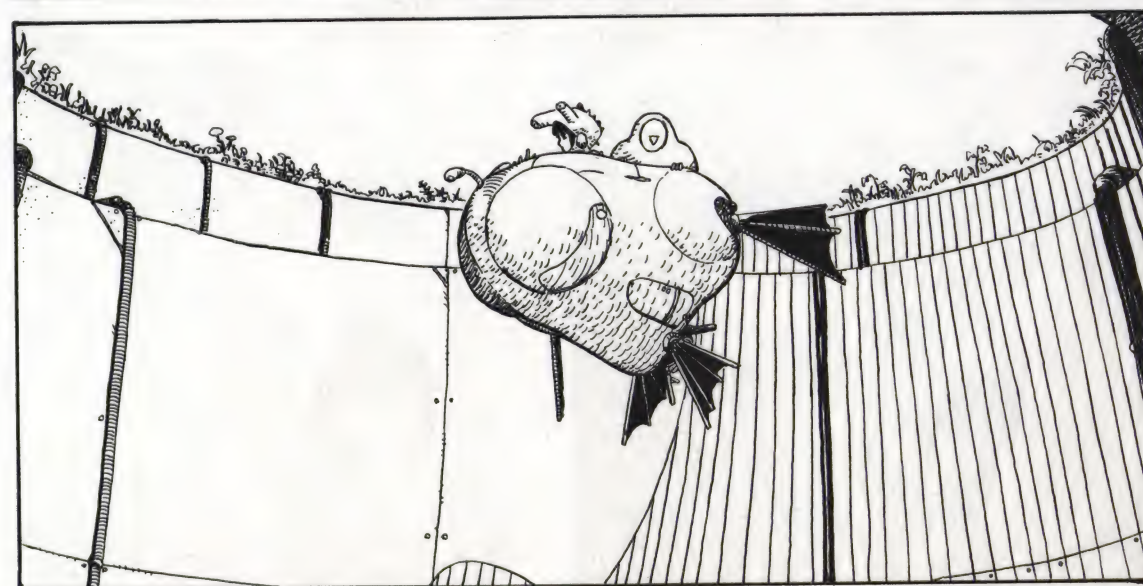
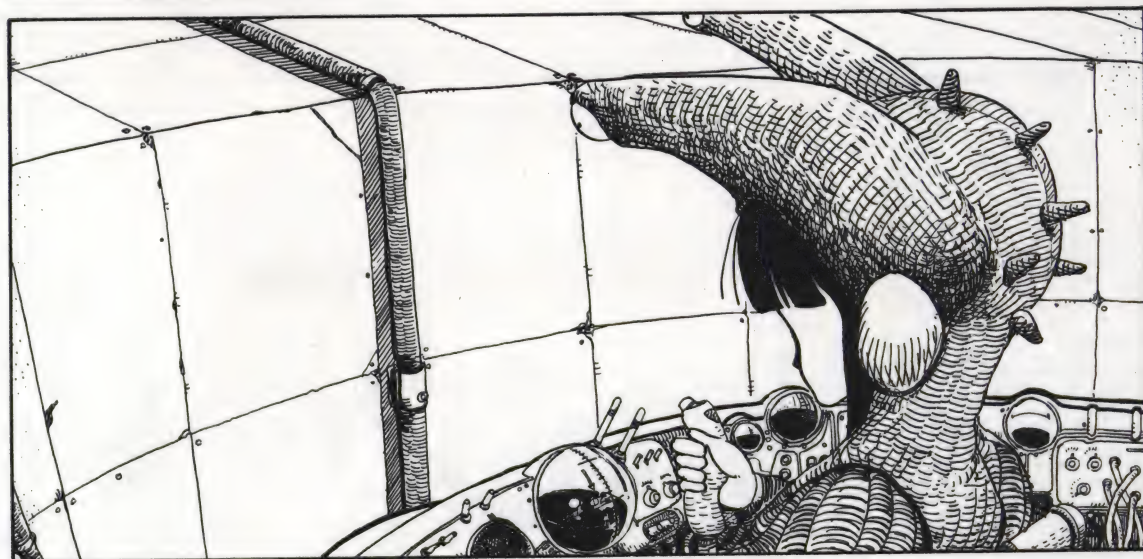
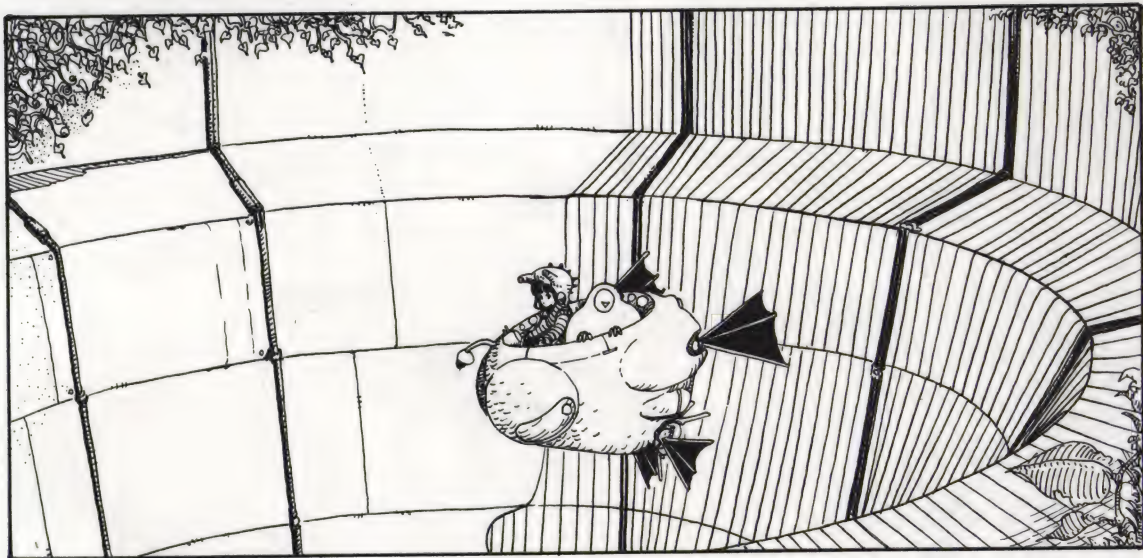
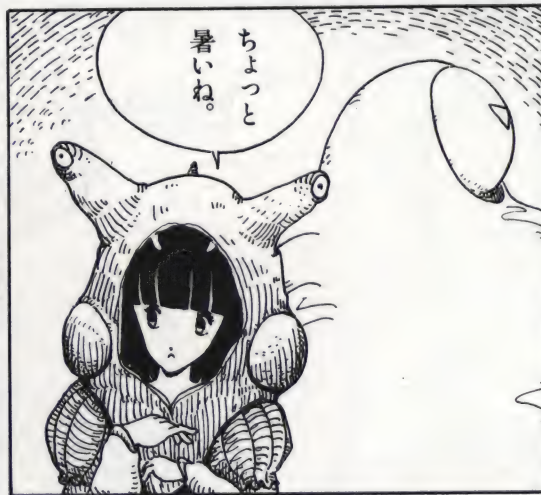
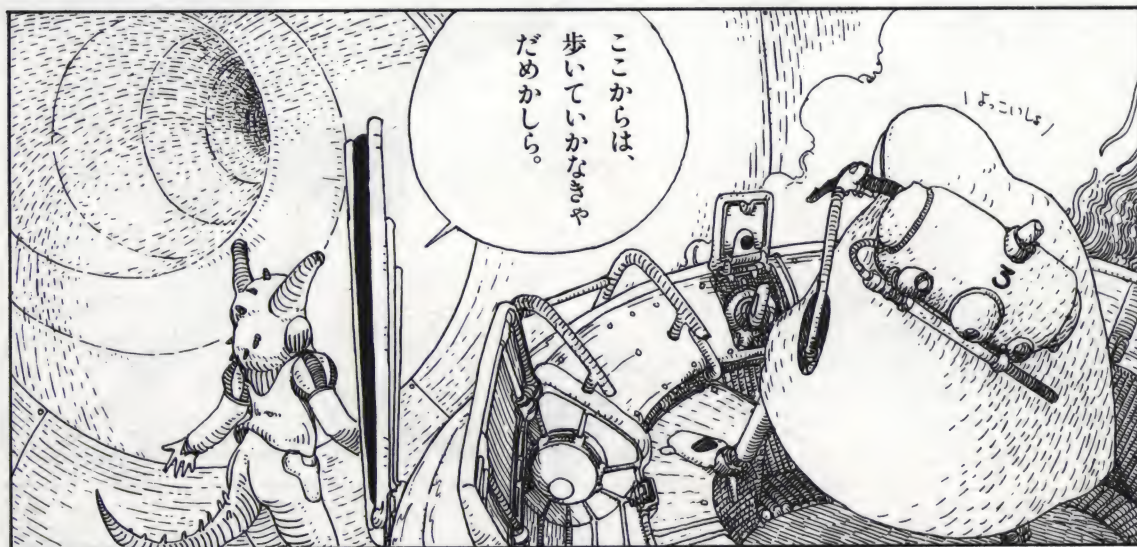
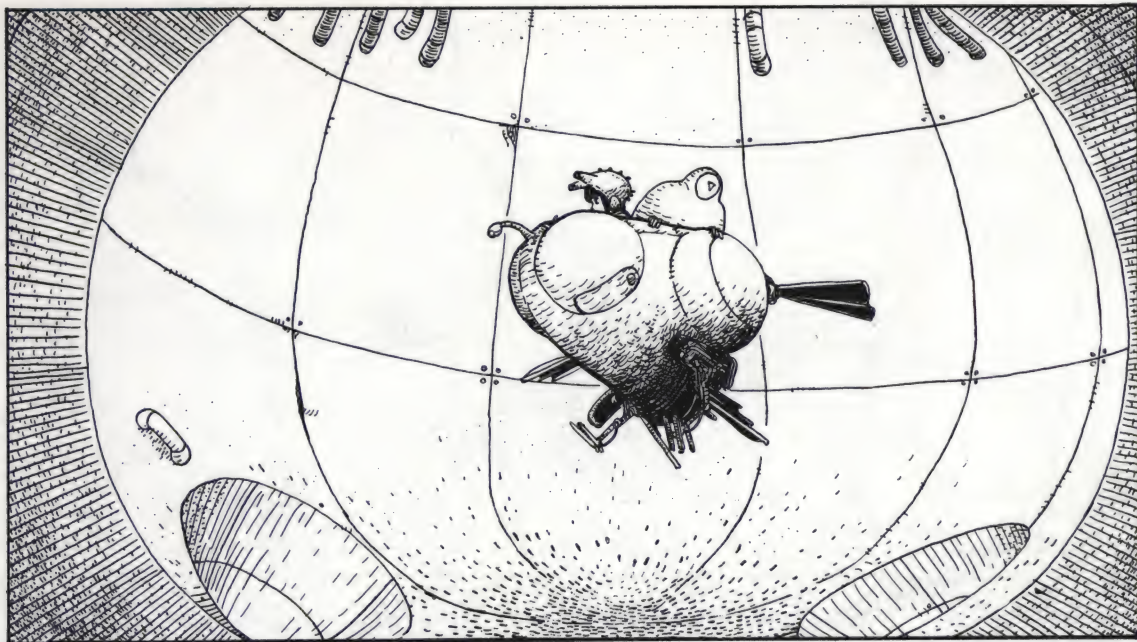
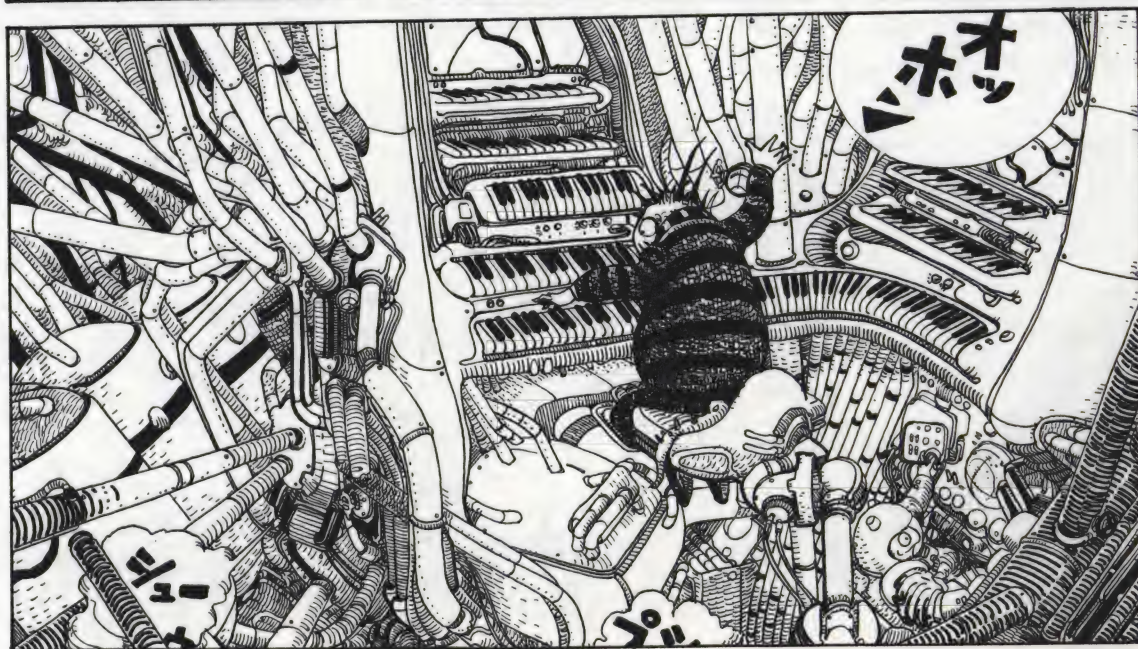
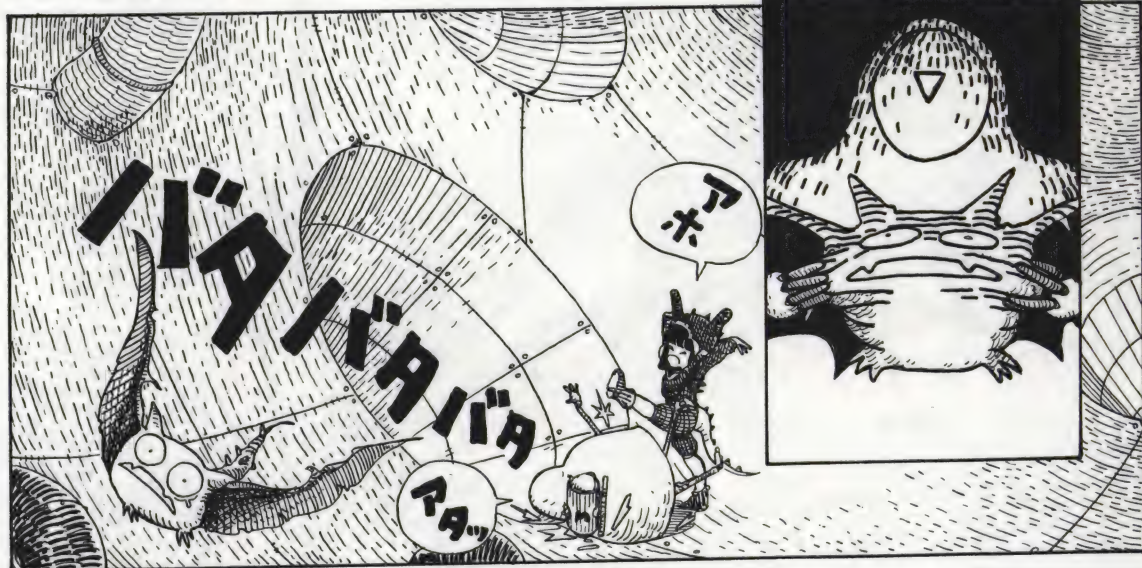
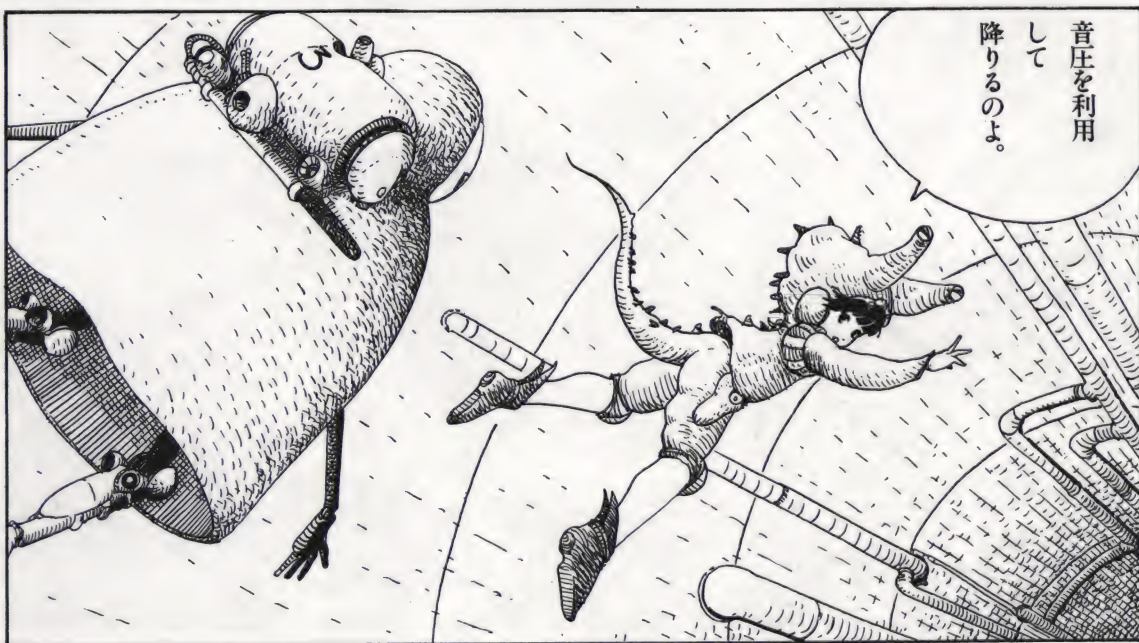
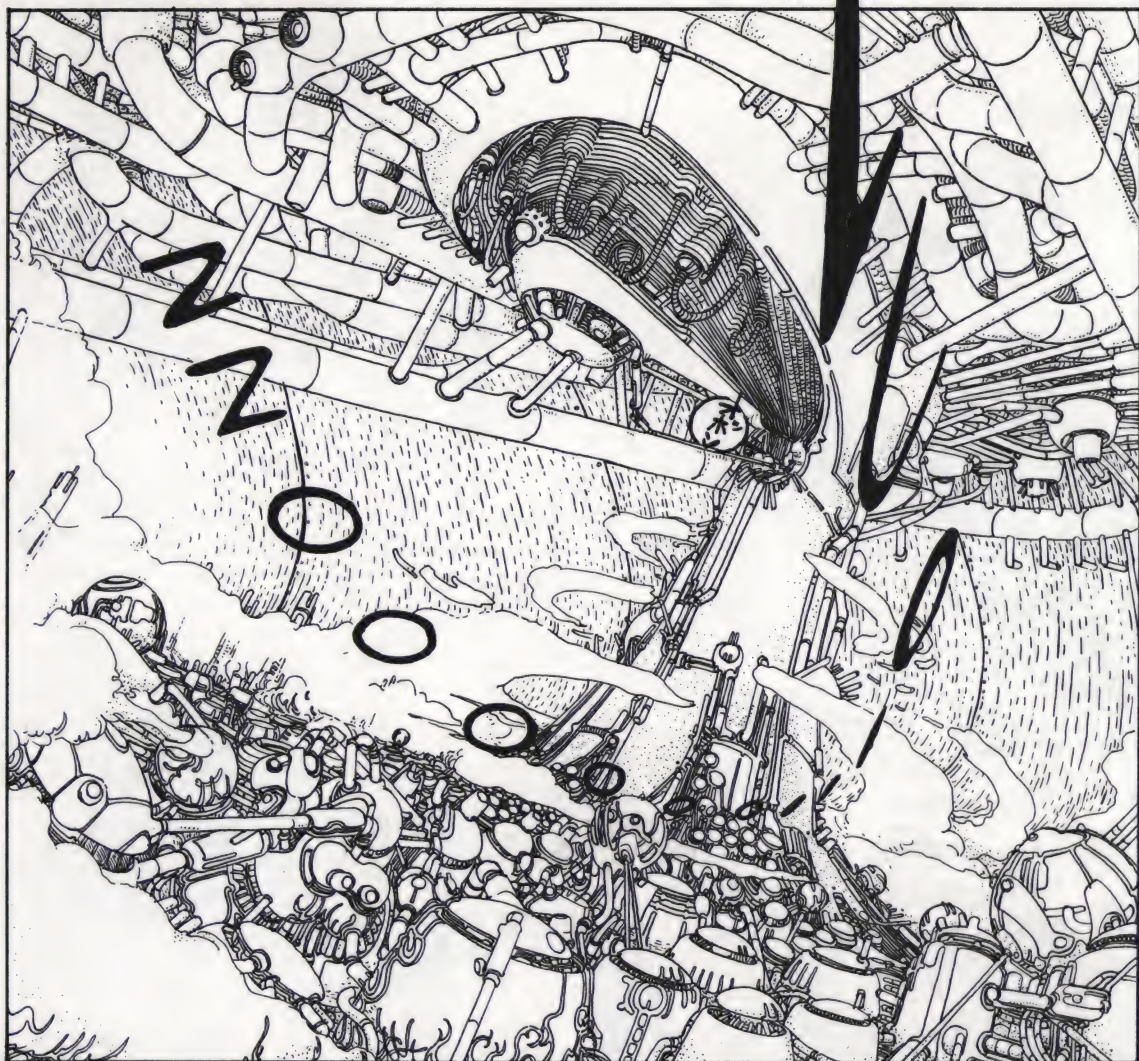
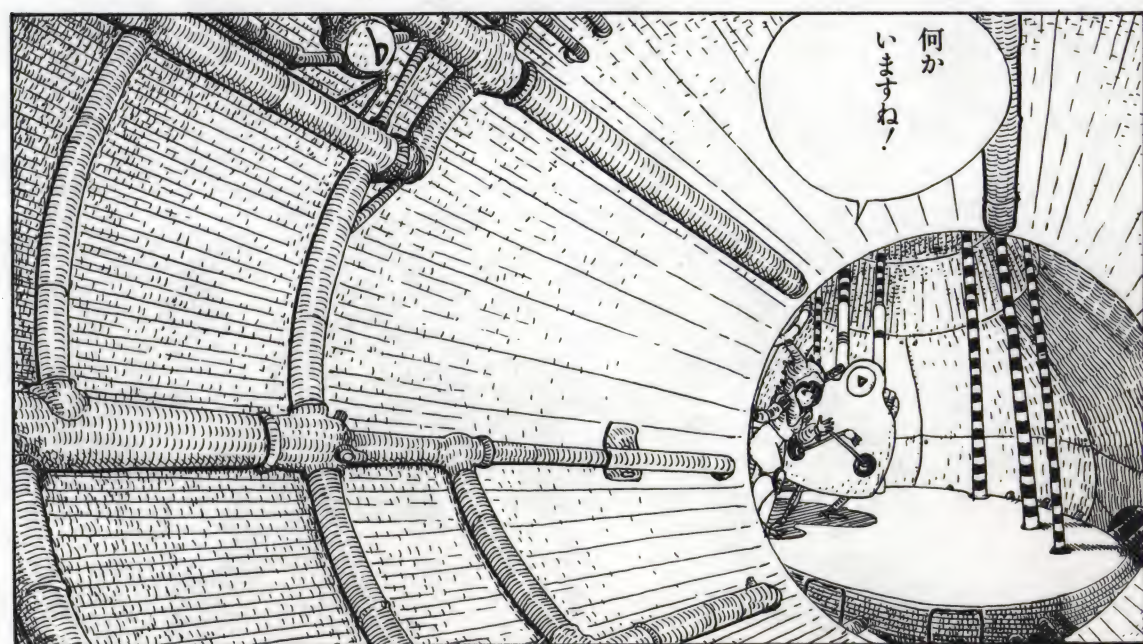
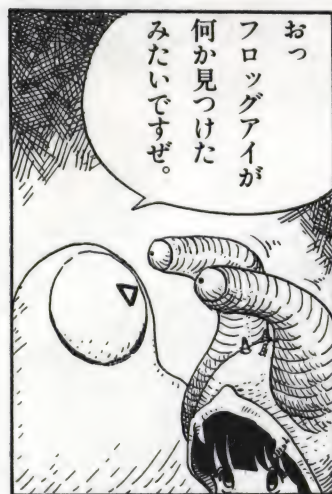
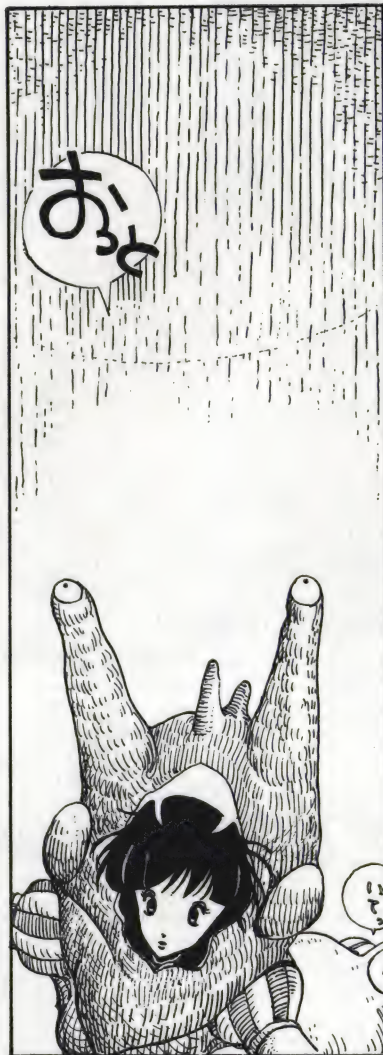
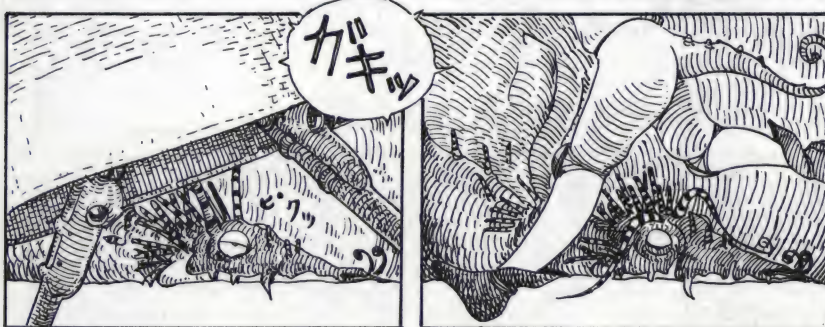
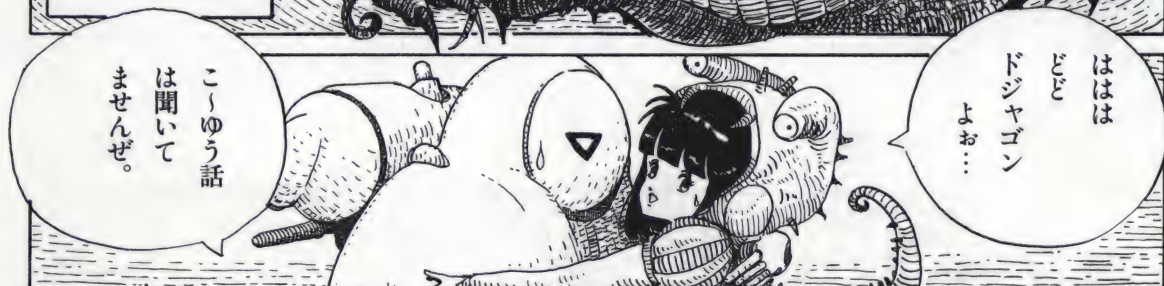
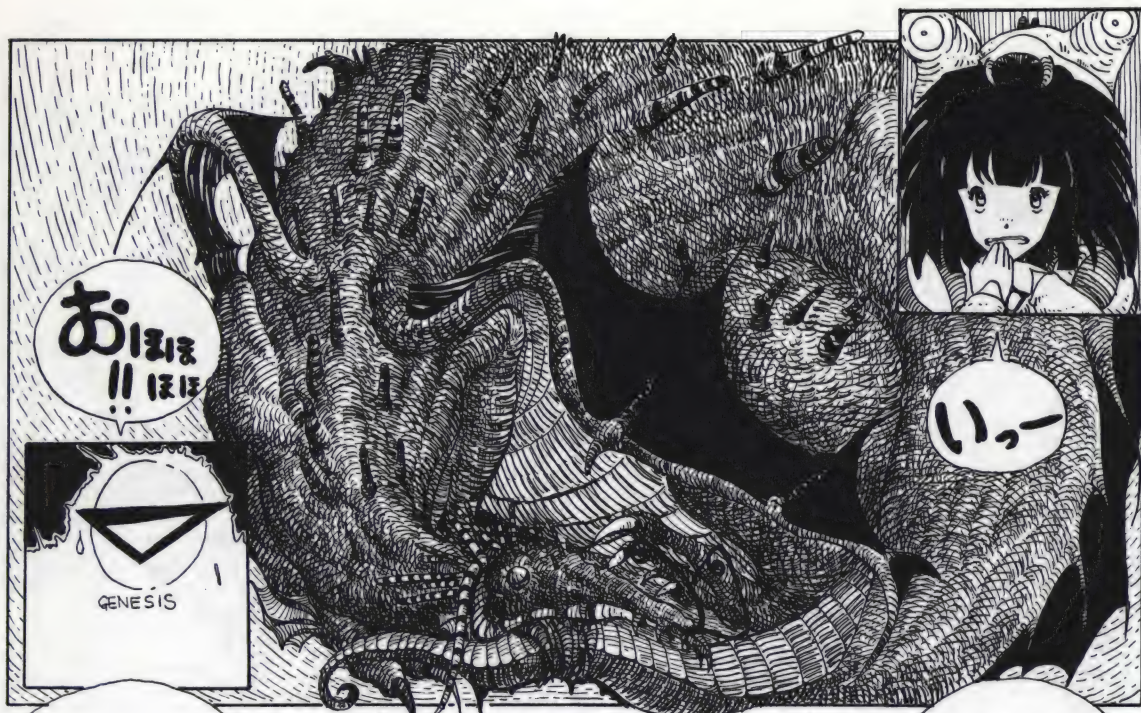
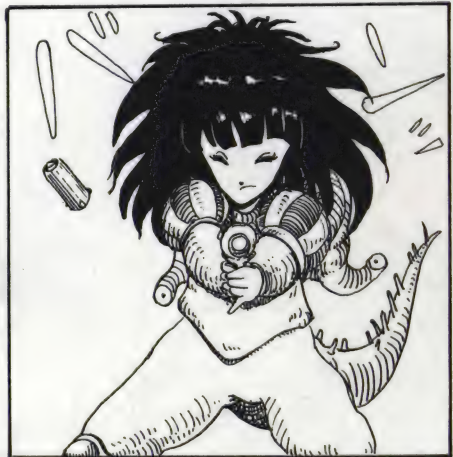
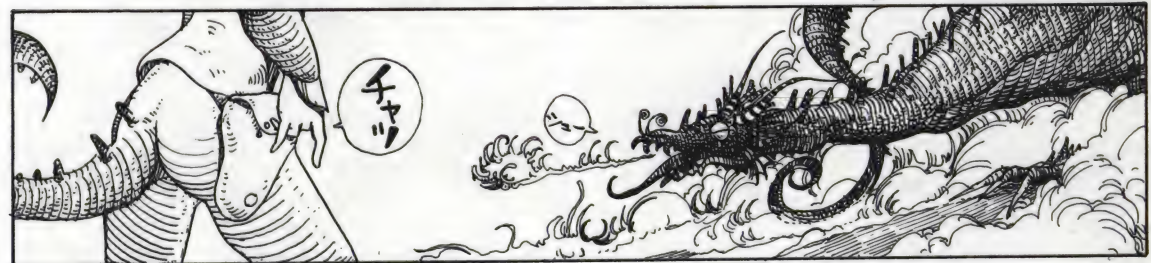
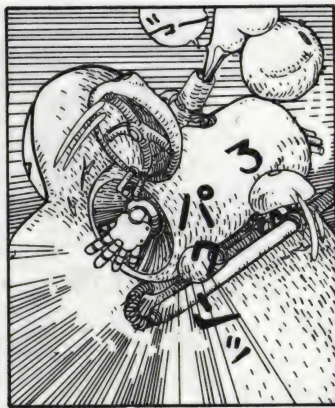
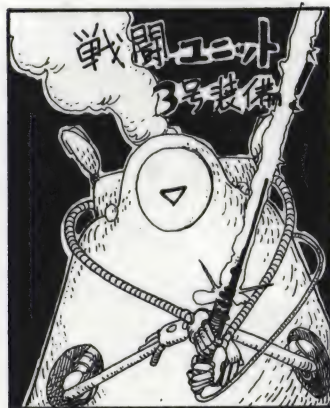
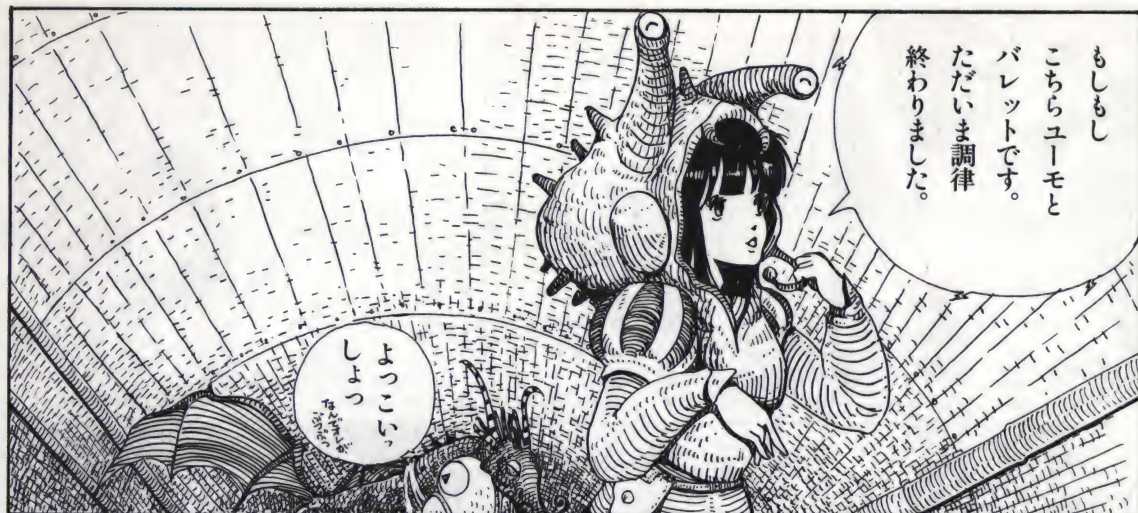
おっフロッグアイが何か見つけたみたいですぜ。

何かいますね！

いっー
おほほ!!ほほ
GENESIS
ははは どど ドジャゴン よぉ…
こ〜ゆう話は聞いてませんぜ。
ねてるから静かに…ね。
しー
ガキッ
ピクッ
あほおっ
すんまへん
あれまっ

戦闘ユニット3号装備！
ジュー
パクッ
カチッ
ふふふ
ふふ…
バレッ
アホ…
ガクッ
チャッ
ますい銃
よっ！
殺ったんすか。

アニギャー

あらっ
今夜は、、
ドラゴン狂詩曲
ね！

FiN

模型情報・別冊「夢幻境戦士エリア」

発行人……山科　誠

編集人……加藤　智

発行所……バンダイ静岡工場

〒424 静岡県清水市袖師町702

TEL 0543-65-5362

発行日……昭和60年6月8日

印　刷……小野美術印刷

©BANDAI 1985

禁無断転載

模型情報・別冊⑤　夢幻境戦士エリア
昭和60年6月8日発行　発行人・山科　誠　編集人・加藤　智　〒424　静岡県清水市袖師町702　バンダイ静岡工場　模型情報編集部 ☎0543-65-5362
©BANDAI 1985 Printed in Japan
小野美術印刷　定価 500円　バンダイ

加藤洋之

僕は、元来プラモデルというものをあまり作ったこともないもんで、模型情報の連載当時は、とてもこわかったのです。というのは、ＳＦマニアは知っていても、プラモマニアは海のものとも山のものともわからず、いったいそんなところに絵をのっけたらどうなるのか、まさか寝込みを襲われて鼻の中にパテをつめられて窒息死させられるのではないかと寝むれぬ毎日が続きました。しかしフタをあけてみると、別段反応もなく、これはひょっとすると村八分にあっているのではないか、最近、友人の反応がとても微妙でわけのわからん含み笑いをうかべ何も言わない。目に光がない。うわっここはどこだ。何だお前らは、そこで何をしている。手に持っているのは何だ。ヤスリとピンセットじゃないか、そんなものでどうしようというんだ。なぜみんなバンザイをしている。（注、バンダイのマーク）あれっバンサイしてないやつがなぐられているぞ。うわっ僕の方を見ている。にげなくては！あれっ加藤編集長、こんなところで何やってるんですか。えっ原稿はここです。ここにあります。はっと我に返ると横では黙々と後藤がペンを走らせ、ひざの上では猫が寝返りをうっていたのでした。

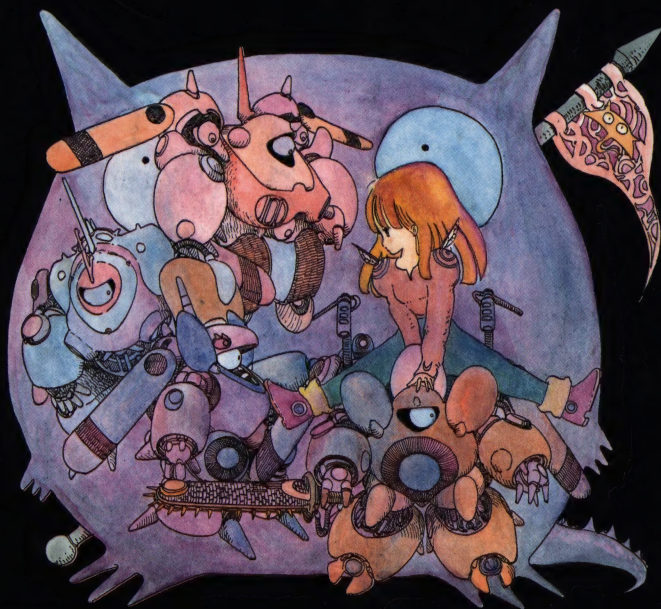
後藤啓介

今日は、４月の27日いや４月の26日です。（おっと、１日得をしてしまった。）

何か最近、忙しくて頭がボ〜ッとしてまして、昨日いったい何をしていたのかが思い出せないという、アホなボクです。

この夢幻境戦士エリアが、僕らのデビュー作となるのですが、いきなりの商業誌しかも連載ときたら、よろこびと恐怖心、相対するものが、複雑にからみ合って加藤くんと、エンピツのつつき合いをしたものです。

連載もはや１年になり、このような別冊まで出していただき、たいへん、うれしいものなのですが、何せ１年程も前の絵なので、「なんてえ、へたくそなんだ」この一言につきます。

やっぱり、うれしいやら怖いやらで、加藤くんと、ついでにネコもいっしょにエンピツのつつき合いをしています。最後に加藤編集長さんどうもありがとうございました。それから、田舎のみなさん、みてるう。（おしまい）

SNYDREAMER・ELIA

模型情報・別冊⑤　夢幻境戦士エリア
昭和60年6月8日発行　発行人・山科　誠　編集人・加藤　智　〒424　静岡県清水市袖師町702　バンダイ静岡工場　模型情報編集部 ☎0543-65-5362
©BANDAI 1985 Printed in Japan
小野美術印刷　定価　500円　バンダイ